

第5節 集落について

三内丸山遺跡ではこれまでの発掘調査成果の蓄積により集落全体の遺構配置（以下、集落構造と呼ぶ）がおおよそ明らかとなっている。ただし、縄文時代前期に関しては、縄文時代中期に構築された盛土に覆われており、遺跡保全の観点から限定的な発掘調査にとどまっているため、部分的にしか把握できないなどの課題も依然としてある。最近では、県内を中心として集落構造が判明しているもしくは推定できる資料が増加し、三内丸山遺跡の集落構造と比較可能な状況となっている。

ここでは三内丸山遺跡の集落構造の特徴について円筒土器文化以前、円筒土器文化期、円筒土器文化期以降の時期毎に比較し、三内丸山遺跡における集落構造の特徴及び円筒土器文化に集落の変遷について考察する。

1 三内丸山遺跡における集落構造

本遺跡における各遺構の消長及び集落構造、その変遷については既に第1章に示している。これを、堅穴建物（大型堅穴建物含む）、墓（埋設土器を含む）、捨て場・盛土、貯蔵穴など集落構造を示す主要な要素に着目し、時期毎に要約すると以下ようになる。

（1）前期中葉の集落構造（円筒下層 a・b 式期）（図5-97）

【堅穴建物】

- ①堅穴建物については、大半が盛土に覆われているためその分布範囲は明らかではないものの、台地北側平坦地と南側緩斜面に大きく2群に分かれて分布するように見える。ただし、この2群の間には中期の掘立柱建物跡群が密集しており、さらに地山まで削平されていることから、この時期の堅穴建物等があったとしても中期以降削平されている可能性は否定できない。個々の堅穴建物が円筒土器文化圏に見られるような列状配置となるかどうかはわからない。
- ②前期初頭の土器が出土しているが、確実に時期が判別できる堅穴建物は円筒下層 b 式期からである。
- ③大型堅穴建物は円筒下層 b 式期のものが確認されており、南北にそれぞれ分布する。

【墓】

- ①南盛土直下から小判型ないしは楕円形を呈した円筒下層 b 式期の土坑墓が検出されていることから、南盛土の直下には規模がそれほど大きくはないものの墓域が形成されている可能性が高い。
- ②埋設土器で最も古いものは円筒下層 b 式であり、分布範囲は中期のそれと基本的には大きく変わらない。
- ③西盛土では前期の埋設土器が多数確認されている。

【捨て場・盛土】

- ①北盛土の直下には円筒下層 b 式期の捨て場が形成されているが、確認のみである。これは北の谷に続く捨て場と本来は一体である可能性も否定できない。捨て場は沖館川に面した北側斜面（第6鉄塔地区）にも形成されている。
- ②北の谷には円筒下層 a 式～d 式にかけての大規模な捨て場が形成されている。
- ③確実に前期中葉に形成された盛土は確認されていない。

【貯蔵穴】

①基本的には小型のフラスコ状土坑で、堅穴建物の近くに配置される。中から炭化したクリが出土したものである。(第4章第2節第8項、第2章第5節参照)

【その他】

①北の谷の中から、土手状の高まりとそれに伴う杭列が確認されており、当初の集落の出入り口の可能性がある。

(2) 前期後葉 (円筒下層c式・d₁式土器期) (図5-98)

【堅穴建物】

①堅穴建物については、大半が盛土に覆われているためその分布範囲は明らかではないものの、前期中葉と同様に大きく2群に分かれて分布するように見える。前期中葉と同じように当該時期以降に削平された可能性がある。個々の堅穴建物が円筒土器文化圏に見られるような列状配置となるかどうかはわからない。

②大型堅穴建物は確実に増加し、その分布も南北2群に分布するように見える。

【墓】

①列状墓を構成する土坑墓から円筒下層d₁式土器が出土しており、この時期には列状墓の形成が開始した可能性がある。

②北の谷の谷頭近くの台地平坦部に分布する土坑の中には敲磨器類が出土するものがあり、円筒下層d₁式期の墓の可能性がある。

③埋設土器は谷の西側及び東側の墓域に分布し、数も増加する。

【捨て場・盛土】

①沖館川に面した北側斜面(第6鉄塔地区)にも形成される。また、北の谷には円筒下層a式～d₂式にかけての大規模な捨て場が形成されている。

②確実に前期に形成された盛土は確認されていない。ただし、西盛土の造成は前期末に開始した可能性がある。

【貯蔵穴】

①前葉と同様に基本的には小型のフラスコ状土坑で、堅穴建物の近くに1から複数配置される。

【その他】

①集落中央部から東西及び南北に伸びる大規模な道路状遺構の構築が始まる可能性がある。

(3) 前期末葉～中期前葉の集落構造 (円筒上層a式・b式・c式期) (図5-99・100)

【堅穴建物】

①堅穴建物は確実に増加し、前段階と同様に分布範囲は中央部の掘立柱建物をはさんで南北に2群に分かれて分布する。前段階からの継続なのか、それとも後の掘立柱建物跡群の構築ないしは削平のためにそのような分布に見えるのかははっきりとしない。個々の堅穴建物の分布については円筒土器文化圏に見られるような特徴的な列状配置となるかどうかはわからない。また、西盛土周辺にも堅穴建物は構築されるようになる。

②大型竪穴建物は確実に存在し、南北にそれぞれ分布する。

【墓】

①北の谷の東側墓域には円筒上層 a 式のものがあり、確実に墓域の形成が始まっている。

②出土遺物から列状墓を構成する土坑墓のなかには確実にこの時期のものが含まれる。

③西盛土からは中期前葉の埋設土器が確認されている。

【捨て場・盛土】

①北の谷には引き続き大規模な捨て場が形成されている。

②盛土の形成が始まり、形成当初である最下層には大量の遺物が含まれる。西盛土の造成も本格的に開始した。

【貯蔵穴】

①大型のものが増え、北の谷の対岸（第7鉄塔地区）に密集する分布域がある。それらの中には転用墓と考えられるものもある。

【その他】

①土坑墓の列状配置とほぼ同時かそれより少し遅れて道路状遺構が本格的に構築される。

②中央部の掘立柱建物跡群はこの時期には構築される可能性が高い。また、北側に密集する大型掘立柱建物跡もこの時期の可能性が高い。

（4）中期中葉の集落構造（円筒上層 d 式・e 式期）（図 5-101・102）

【竪穴建物】

①竪穴建物はさらに増加し、その分布については中央部の掘立柱建物をはさんで南北に2群に分かれて分布し、その範囲も拡大する。個々の竪穴建物の分布については円筒土器文化圏に見られるような特徴的な列状配置とは断定できない。

②大型竪穴建物は確実に存在し、規模も大型化する。分布は北側のみとなる。

【墓】

①列状墓の大半はこの時期以降のものであり、併行して道路状遺構も構築される。列状墓については分布の濃淡が見られるものの、その新旧関係について精査をしていないためわからない。このころから一部の環状配石墓が構築される可能性がある。

②埋設土器はこの時期のものが最も多い。分布域は北の谷の西側の居住域にも東側の墓域にも多数ある。

【捨て場・盛土】

①捨て場は形成されない。

②北盛土・南盛土の形成が活発に行われ、盛土層も最も厚くなり、大量の遺物が含まれる。

【貯蔵穴】

①大型のものが台地の縁辺部に分布する。

【その他】

①大型掘立柱建物が引き続き構築される。

(5) 中期後葉～末葉の集落構造（榎林式・最花式期、大木10式併行期）（図5-103・104）

【竪穴建物】

- ①竪穴建物はさらに増加し、それまでの南北2群に分かれて分布していたのが、一体となった分布域に変化する。これは中央部の掘立柱建物の有無とも関係する。終末の大木10式併行期の竪穴建物数は激減する。
- ②大型竪穴建物は確実に存在し、規模も大型化する。分布は北側のみとなる。一部大木10式併行期にもみられる。

【墓】

- ①引き続き列状墓が作られるが大木10式併行期には構築されない。併行して道路状遺構も構築されるが大木10式併行期には構築されない。この時期には確実に環状配石墓がある。南地区丘陵突端では榎林式の土坑墓が検出されている。また、北地区の東側墓域の列状墓と併行して分布する最花式期の土坑の中には墓の可能性があるものが含まれる。
- ②埋設土器は減少傾向にあり、最花式期以降にはほとんど見られない。

【捨て場・盛土】

- ①捨て場は形成されない。
- ②北・南盛土の最上層は最花式であるため、確実にこの時期までは盛土が形成される。大木10式併行期には盛土は形成されない。

【貯蔵穴】

- ①大型のものが南地区の北側緩斜面に構築される。大木10式併行期には点在する竪穴建物の近くに分布する。

【その他】

- ①大型掘立柱建物で最大規模のものは最花式期である。
- ②台地西側にも大型掘立柱建物跡が密集する箇所がある。

2 青森県内における集落構造について

(1) 円筒土器文化成立以前

集落構造がわかる遺跡として、前期前葉の八戸市沢堀込遺跡、青森市大矢沢野田(1)遺跡、円筒土器文化成立直前の深郷田式土器期の大罫町砂沢平遺跡を取り上げ、比較する。比較にあたっては、三内丸山遺跡周辺に適当な遺跡が所在しないことから、後の円筒土器文化圏に含まれる地域から抽出することとした。

①八戸市沢堀込遺跡

八戸市の東側、太平洋岸から1kmなどの内陸に位置し、標高約60～100mの北東緩やかに傾斜する海岸段丘上に立地する。平成2・3年(1990・1991)に青森県教育委員会が発掘調査を行い、前期前葉の大木2a式期の集落跡を検出した。集落の規模は小さく、存続期も短いと考えられている。竪穴建物、土坑から構成され、土坑について墓坑の可能性もある。竪穴建物は、浸食のため尾根状となった地形のほぼ中央部に点在する。土坑群は竪穴建物の西側に接するように構築される。

②青森市大矢沢野田(1)遺跡

青森市の東南に位置し、標高10～20mの沖積平野から段丘上に立地する。平成10年(1998)に青森県教育委員会が、平成11～13、20、23年に青森市教育委員会が発掘調査を行い、前期前葉の早稲田6類期の集落跡を検出した。集落の規模は小さく、存続期も短いと考えられている。竪穴建物、土坑から構成され、土坑のうち1基から石皿が出土しており、墓の可能性はある。竪穴建物と墓は近接して構築される。

③大鰐町砂沢平遺跡

大鰐町の東南に位置し、標高約150mの河岸段丘上に立地する。昭和52～54年(1977～79)に青森県教育委員会が発掘調査を行い、前期前葉の深郷田式土器期の集落跡を検出した。集落の規模は小さく、存続期も短いと考えられている。竪穴建物、土坑から構成される。竪穴建物は段丘の縁辺部に、土坑墓はその内側に構築される。

④まとめ

円筒土器文化以前の集落は竪穴建物数棟からなる小規模なもので、存続期間が短く、定住性が高いとは言えない。集落は竪穴建物、土坑、土坑墓から構成されおり、居住域と墓域の分離が明確であるものの、近接している傾向が見られる。

(2) 円筒土器文化の集落

円筒土器文化成立後、遺跡数は急増し、三内丸山遺跡に代表されるように中には大規模かつ存続期間の長い拠点集落も顕著となる。円筒土器文化を、1) 前期中葉(円筒下層 a・b 式)、2) 前期後葉(円筒下層 c 式・d₁ 式・d₂ 式)、3) 中期前葉(円筒上層 a 式・b 式・c 式)、4) 中期中葉(円筒上層 d 式・e 式)に時期区分して検討する。時期区分に際して、三内丸山遺跡での時期区分と同様のものとした。また、比較対象の遺跡については、円筒土器文化圏の中で、円筒土器文化圏の中心地域である本県に所在し、より三内丸山遺跡に地理的に近いものを選択した。

1) 前期中葉(円筒下層 a・b 式)

①大面(1)遺跡

平川市の北東に位置し、標高約200mの平川の河岸段丘上に立地する。昭和53年(1978)に青森県教育委員会が発掘調査を行い、前期前葉の集落跡を検出した。集落は竪穴建物、貯蔵穴、土坑、埋設土器、捨て場から構成される。土坑の中には配石を持つものがあり土坑墓と考えられている。全体の配置として、段丘の縁辺部に等高線と併行するように各遺構群が構築される。個々の遺構というよりも遺構群が帯状のまとまりを持って分布するようにも見える。

②石江遺跡(図5-26参照)

青森市の西方に位置し、標高6.5～12.6mの台地上に立地する。平成16～18年(2004～2006)にかけて青森県教育委員会が発掘調査を行い、前期中葉・後葉の集落跡を検出した。集落は竪穴建物、フラスコ状土坑、土坑墓、埋設土器、捨て場、道路跡などから構成される。各遺構群はそれぞれ台地上にまとまって分布し、尾根筋に構築された路跡を挟んで、土坑墓、フラスコ状土坑が直線状に分布する。土坑墓には豊富な副葬品を持つものがある。

③岩渡小谷(4)遺跡

青森市の南西に位置し、神館川右岸の標高約30～50mの段丘上に立地する。平成12・13(2000・2001)

年に青森県教育委員会が発掘調査し、前期中葉～後葉の集落跡を検出した。集落は堅穴建物、土坑、埋設土器、水場遺構、木道から構成される。埋設土器は堅穴建物の近くに分布する。

④畑内遺跡

八戸市の南東の南郷区に位置し、標高約85～100mの新井田川の河岸段丘上に立地する。平成4～13年(1992～2001)にかけて青森県教育委員会が発掘調査を行い、前期中葉・後葉の集落跡を検出した。集落は堅穴建物、大型堅穴建物、土坑、埋設土器、捨て場から構成される。堅穴建物は列状に配置されるという指摘もあるが判然としない。土坑はフラスコ状の貯蔵穴である。墓ははっきりとしない。

2) 前期後葉(円筒下層c式・d₁式・d₂式)

①新町野遺跡

青森市の南方に位置し、標高約20～40mの台地上に立地する。平成8・9年(1996・1997)に青森県教育委員会が、平成15・16年(2003・2004)に青森市教育委員会が発掘調査し、前期後葉の集落跡を検出した。集落は堅穴建物、大型堅穴建物、土坑、土坑墓、埋設土器、屋外炉から構成される。各遺構群が列状ないしは帯状に分布し、フラスコ状土坑は長さ約170mにわたって伸び、その前後に堅穴建物が配置される。土坑墓や埋設土器はそれらに近接して配置されているため、同様に列状・帯状に分布しているように見える。

②畑内遺跡

集落は堅穴建物、大型堅穴建物、土坑、埋設土器、捨て場から構成される。堅穴建物の配置は列状というほど明確な配置ではない。土坑のほとんどはフラスコ型の貯蔵穴で、中には埋葬人骨が確認されたものがあり、合葬例もある。これらの埋葬例は転用墓の可能性もある。

③岩渡小谷(4)遺跡(図5-23参照)

集落は堅穴建物、土坑墓、埋設土器、水場遺構、木道から構成される。沢を挟んで居住域と墓域が区分され、墓域には土坑墓と埋設土器が構築される。土坑墓には豊富な副葬品を持つものがある。

3) 中期前葉(円筒上層a式・b式・c式)

①笹ノ沢(3)遺跡

八戸市の北西に位置し、標高51～71mの段丘上に立地する。平成10～14年(1998～2002)にかけて青森県教育委員会が発掘調査を行い、中期前葉の集落跡を検出した。集落跡は堅穴建物、大型堅穴建物、土坑、埋設土器、屋外炉、焼土、捨て場から構成される。堅穴建物は尾根の両側に等高線と直行するように列状に配置される。それと重複するように土坑が並ぶ。土坑の中には、貯蔵穴の他に墓が含まれる。

②山田(2)遺跡(図5-15参照)

蓬田村の北方に位置し、標高19～23mの段丘上に立地する。平成19～21年(2007～2009)にかけて青森県教育委員会が発掘調査を行い、中期前葉の集落跡を検出した。集落跡は堅穴建物、フラスコ状土坑、埋設土器、捨て場から構成される。堅穴建物と土坑が段丘上の平坦面に2列になって分布する。土坑の中には土坑墓が含まれる可能性がある。

4) 前期中葉(円筒上層d式・e式)

①富ノ沢遺跡(図5-15参照)

六ヶ所村の西北に位置し、標高65mの段丘上に立地する。昭和62年～平成2年（1987～1990）にかけて青森県教育委員会が発掘調査を行い、中期中葉の集落跡を検出した。集落跡は堅穴建物、大型堅穴建物、掘立柱建物跡、フラスコ状土坑、土坑墓、埋設土器、捨て場などから構成される。一見、馬蹄形集落のように見えるが、基本的には各遺構群がまとまりを持って列状に分布するとした方が適切である。

②三内丸山(6)遺跡

青森市の南西に位置し、標高39～55mの段丘上に立地する。平成9～11年(1997～1999)にかけて青森県教育委員会が発掘調査を行い、中期の集落跡を検出した。集落跡は堅穴建物、フラスコ状土坑、土坑墓、埋設土器、捨て場などから構成される。巨視的に見れば、沢を挟んで堅穴建物が列状に並び、その外側に土坑墓が分布する。

5) まとめ

円筒土器文化の集落構造の特徴として、以下のような点が挙げられる。

①円筒土器文化成立直後に居住域と墓域が分離した集落構造となる。その場合においてもそれぞれの分布範囲は狭く、両者の距離は短い。突出した規模の集落は見られない。

②前期中葉以降、拠点集落と呼べるような規模が大きく、存続期間が長い集落が出現する。

③拠点集落では墓域そのものが拡大する傾向にあるとともに、捨て場の形成も顕著となる。各遺構群が列状、直線状に配置され、道路を挟んで対象に配置される例も見られる。

④中期に入ると三内丸山遺跡のような突出した規模の集落が出現する。集落も堅穴建物以外にも掘立柱建物跡や盛土など構成要素も多様化する。堅穴建物や土坑墓の列状化が顕著となる。

⑤大木式の影響を受けた榎林式期や最花式期においても、引き続き集落が営まれ、集落構造は円筒土器文化期と基本的には変わらないものが多くあり、そこに大きな画期を見いだすことは難しい。しかしながら、居住域には変化が見られるものもあることにも留意する必要がある。

(3) 円筒土器文化以降の集落（榎林式・最花式、大木10式併行期）

各土器型式に限定される集落跡が少なく、部分的な発掘調査であることから集落構造がわかる事例はない。

①三内遺跡

青森市の南西に位置し、標高5～35mの段丘先端に立地する。昭和51（1976）年に青森県教育委員会が発掘調査を行い、中期後葉の最花式期の集落跡を検出した。集落跡は堅穴建物、フラスコ状土坑、土坑から構成される。堅穴建物は等高線と直交するように配置され、堅穴建物の外側に土坑が分布する。

②孫内遺跡

青森市の南西に位置し、標高約80mの舌状台地上に立地する。昭和47年（1972）年に青森市教育委員会が発掘調査を行い、中期後葉の大木10式併行期の集落跡を検出した。集落跡は堅穴建物、土坑から構成される。部分的な発掘調査であるため、全体の集落構造は不明である。

③まとめ

いわゆる榎林式以降では集落構造を明確に把握できる遺跡は少ない。

3 集落構造から見た円筒土器文化圏における三内丸山遺跡

(1) 構成要素について

基本的に前期では、堅穴建物（大型堅穴建物を含む）、墓、埋設土器（小児用埋葬施設）、貯蔵穴、捨て場などから構成される。ただし、石江遺跡では前期段階の掘立柱建物や鯉ヶ沢町鳴沢遺跡でも柱穴列などが検出されており、掘立柱建物は前期段階まで遡る可能性がある。ただし、秋田県大館市の池内遺跡では前期中葉の円筒下層 a・b 式の掘立柱建物が多数検出されているが、これについても掘立柱建物跡としない説もある。いずれにせよ、掘立柱建物があったとしてもその類例はきわめて少ないと言える。

中期になると、掘立柱建物や盛土が新たな要素として出現ないしは増加する。掘立柱建物は建物構造が堅穴建物と異なる以上、機能・目的が異なると考えられ、三内丸山遺跡では道路と列状墓の延長上に配置されていることから、集落構造にとって大きな意味を持っていることは確実である。掘立柱建物と堅穴建物を季節的な居住施設とする説もあるが、中期前半に拠点集落に多く見られ中期末には激減する様相を環境の違いによる居住形態の違いとするのは無理がある。

掘立柱建物の中には直径 1 m 近くの巨木を使用したものも見られ、三内丸山遺跡や鯉ヶ沢町東禿遺跡の例から中期前半には確実に存在するものと考えられる。機能・目的についても諸説があるが、2 棟検出された東禿遺跡では、その方向性には規則性は見られず、うち 1 棟は眼下に海岸線を見下ろす丘陵の先端部に構築され、明らかに眺望を意識した配置となっている。

盛土については、道路などの構築に伴う造成の際に生じた残土・排土の処理を目的とするものと祭祀遺物などを埋めるものが見られ、特に後者については地形が大きく変化し、小丘状となるものがある。ただし、両者は肉眼での識別は困難であり、もっぱら埋蔵されている遺物の種類及び出土状況により区別されている場合が多い。

巨視的に見れば前期の捨て場から中期への盛土へと遷移すると考えられ、極論すれば大量の土砂を伴う捨て場が盛土であると言える。しかし、道南の同時期の遺跡からは前期の盛土（北海道では盛土遺構と呼ばれることが多い）が検出されており、今後、認定の方法等の検討が必要となろう。

(2) 列状配置について

前期の集落の中には、堅穴建物や土坑墓と考えられる土坑群が等高線と併行して、あるいは台地の縁に直線状、帯状に分布するものがある。このような分布は円筒土器文化圏以外にも見られ、大木式の前半にもあることが知られている。前期中葉の宮古市千鶴遺跡では堅穴建物が、長軸が等高線と併行して分布する。建物の配置はもちろんだが構造上の理由と言うことも視野に入れる必要がある。本県では前期前半には県南地方で確認されている。

前期の石江遺跡では丘陵の中央部を道路が通り、それを挟んで両側に堅穴建物や土坑墓が配置されている。このことは道路を意識した集落構造を意図すれば土地の制約もあって自ずと堅穴建物等は等高線と併行して配置されることになる。

しかしながら中期の笹ノ沢(3)遺跡や山田(2)遺跡では明らかに等高線と直交しており、それ自体に社会的規制を強く感じさせるものであるが、やはり巨視的に見れば細長く伸びる丘陵を選地し、地形に沿って各遺構が配置されていると言えなくもない。地形的な制約も背景にあるものと考えられ

る。なお、その場合においても各遺構群が帯状に配置されることには変わりがなく、しかもそれらが列状に配置されることもある。

むしろ留意しなければならないのは個々の遺構配置であり、三内丸山遺跡では道路に直交して土坑墓が配置される。道路が湾曲すれば、それに沿うように土坑墓が配置されていることから、地形的な制約ではないことが明らかである。集落構造上における社会的規制の存在を想定する必要がある。あるいは当時の世界観が表出しているとも考えられる。

このような列状墓の配置は、三内丸山遺跡以外にも七戸町二ツ森貝塚や五戸町上蛇沢(2)遺跡、つがる市牛湯(1)・(2)遺跡でも確認されており、単なる集落固有のものではなく、円筒土器文化圏における大きな特徴と言える。しかし、もともとは円筒土器文化成立以前から見られた集落構造で、地形的な要因によるものであったが、その後において社会的規制や伝統となったものと推察され、このような傾向は拠点集落において顕著であることに注意する必要がある。

4 まとめ

これまで述べたように、三内丸山遺跡は前期の段階では内容や規模ともに近隣に所在する集落との大きな違いはないと言える。むしろ沖館川の対岸に位置する石江遺跡は、規模はもちろん施設の配置や土坑墓に見られる副葬品の豊富さなどでは三内丸山遺跡を凌駕すると言っても過言ではない。ただし、大型堅穴建物がないなどの違いにも留意する必要がある。その後、石江遺跡は中期以降存続せず、三内丸山遺跡は大規模化するという大きな差異を結果的に生じることになるが、この違いが何によるものかは非常に興味深い。環境変化による立地環境の悪化や周辺集落との関係、土地の広さといった様々な要因が考えられるが、現時点では明快な理由は示すことはできず、さらに詳細な比較検討を進めていく必要がある。

(岡田)



図 5-97 縄文時代前期中葉の集落構造 (円筒下層 a・b 式土器期)



図 5-98 縄文時代前期後葉の集落構造 (円筒下層 c・d 式土器期)



図 5-99 縄文時代前期末葉～中期前葉の集落構造 (円筒下層 d2 式～円筒上層 a 式土器期)

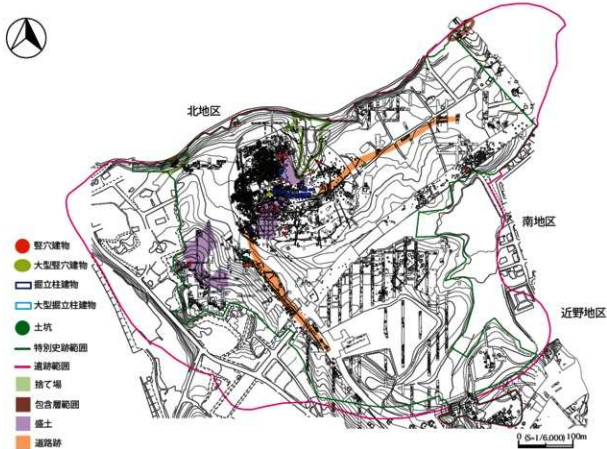


図 5-100 縄文時代中期前葉の集落構造 (円筒上層 b・c 式土器期)

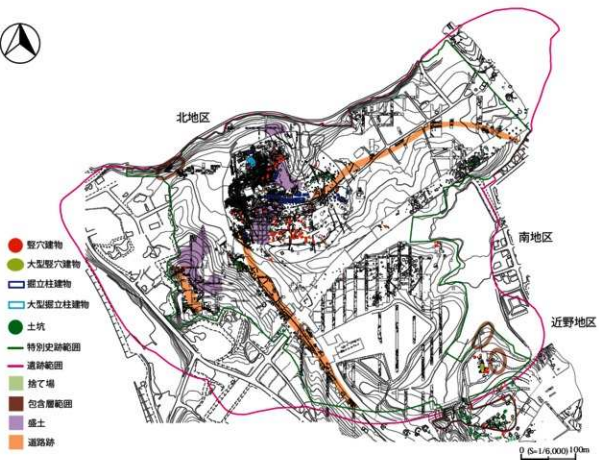


図 5-101 縄文時代中期中葉の集落構造 1 (円筒上層 d 式土器期)



図 5-102 縄文時代中期中葉の集落構造 2 (円筒上層 e 式土器期)

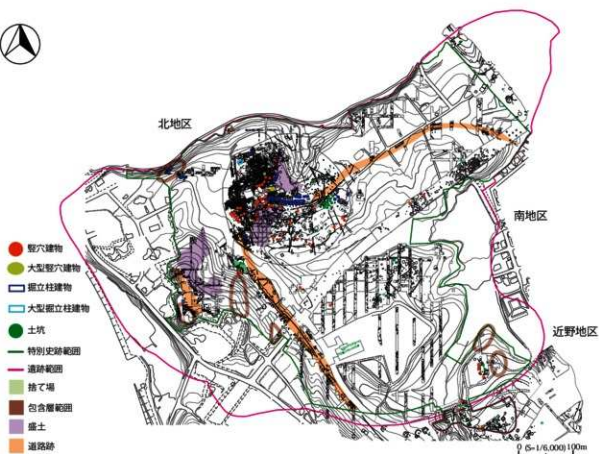


図 5-103 縄文時代中期後葉の集落構造 (榎林式・最花式土器期)



図 5-104 縄文時代中期末葉の集落構造 (大木 10 式土器併行期)

第6節 日本列島における円筒土器文化－他文化圏との比較の視点－

第1項 縄文文化の特徴

－縄文文化を構成する地域文化圏とその東北アジア史的位置－

岡村 道雄

1 はじめに

世界史的に見て新石器時代に並行する縄文文化は、東アジアの東端・日本列島の九州から北海道に分布した。その文化は日本国の歴史、日本史が始まる以前の列島人の歴史であり、世界の人類史上もまれな先史文化であった。先ず縄文文化を構成する文化要素の面から、地域と時間のまとまり、つまり文化圏という時空的枠組みを捉えてみよう。各地の豊かで多様な生態系・自然に適応して発展した文化、特にその自然の一員として共に暮らした精神文化の共通性、独自性・固有性に文化的なまとまり、つまり文化圏が読み取れる。信仰、宇宙・世界観、同族意識、言語、習俗、伝統などの共有によって文化圏が紡ぎ出され、共有する程度・強弱によって縄文文化圏から、さらに東日本と西日本という二分、それぞれを構成していた各地の地域文化圏、さらには河川流域や海岸沿いなどの細分地域圏をもち、集落群が構成する狭い文化圏・地域社会まで、重層する文化圏・社会として把握できる(図5-105)。この重層する文化圏を、東アジアの中での地理的、かつ歴史的・文化的にも位置づけなくてはならない。

ここでは近年の縄文考古学の成果を中心に、人類学、民俗学、地理学、生態学などの成果も踏まえて、定住についての歴史の変遷を軸に、時間的・地理的枠組みを整理してみたい。また時間軸を記述するにあたり、ここでは世界史的に通用する暦年較正されたC14年代観を用いた。

2 文化圏の重層と定住の歴史

(1) 定住への胎動

後氷期の温暖化によって現在の日本列島に近い地理・自然環境になり、縄文文化が誕生した。約15,000年前には南九州で季節的にせよ堅穴住居に住み(鹿児島県鹿児島市掃除山遺跡)、屋外に集石炉や煙道付き炉穴、墓、捨て場をもつ集落(鹿児島県加世田市榑ノ原遺跡など)を形成するようになった。土器や石鏃・磨製石斧などの道具を発達させ、定住化が始まった。「南九州文化圏での縄文文化の始まり」である(新東 2015)。一方、東日本(関東・北信越以北の本州)でも、石刃技法を基盤とした彫刻刀形石器やエンドスクレイパーなどと大型石槍、刃部磨製石斧などを特徴とする御子柴文化が成立し、やがて約15,000年前にはその文化に無土器や石鏃が加わった。この本土(九州から東北の本州島)における土器の出現をもって、縄文文化の始まりと定義することが多い。

この新たな六季を持つ温暖で湿潤な温帯モンスーン気候に変わったことと、海に囲まれた陸地の台地や山川など多様な地形地質によって、世界でもまれな動植物の多様性が生まれた。この豊かな現代につながる風土・環境を、ここでは仮に「縄文的环境」と呼んでおこう。この環境に適応して出現、あるいは定着した石鏃、石匙、石皿・磨石などと、九州から東海・関東では堅穴住居が作られ始め、近畿の三重県阪南市粥見井尻遺跡と滋賀県東近江市相谷熊原遺跡では、草創期土器に伴って土偶が現

れた。これらはいずれも縄文文化に特徴的に見られる文化要素である。温暖化に伴う「縄文的环境」の九州での出現と、さらなる温暖化による「縄文的环境」の漸次の北上によって、列島に固有な縄文文化が始まり、安定した定住への歩みが進む(岡村 1997)。これによって縄文文化の範囲は、九州から東北までの本土と、やや遅れて早期からの北海道に広がる。関東では東京都前田耕地遺跡で、竪穴住居から多量な焼けたサケの骨髄、埼玉県の洞穴遺跡からもサケ骨が検出され、以後、北陸(小矢部川、犀川)から東北・北海道では、現代までサケ漁が東北日本の豊かさを支えた。

ところで土器は、後水期の中国東北部、沿海州、本州島に繋がる中緯度地帯の林縁(森林フロント)で、植物や魚類などの煮炊き用に出現して広がった。磨製石斧も木材の伐採と加工に用いられた。また、竪穴住居、サケ漁、家送り(アイヌ語でカシオマンテ)・物送り(アイヌ語でイオマンテ)、そして屈葬、釣針・モリ・ヤスなどの漁具も北方との強い繋がりをもって成立した。これら東北アジアに広がっていた文化が、日本列島に影響して独特の発展をとげたと考えられる。また草創期始めの無文土器段階の次の隆線土器段階になるが、南九州にはための隆帯文、北九州から近畿には隆線文、中日本(東海北陸から関東甲信越)には微隆起線文、東北には微隆起線文が、それぞれの地域文化圏を現わすようになった。つまり、この段階から、世界でも独特な文様をもった土器となり、また多用するという特徴をもち、縄文文化と地域文化圏の特徴が鮮明になった。そして爪形文が分布する段階が続き、やがて本州には縄で施文した土器が現れた(図5-106②)。この縄文が出現する以前までの、縄文の要素が鮮明でない縄文草創期と呼ぶ時期を、世界史的区分の中石器文化に相当するとして区分することもできる。

なお、これまで文化要素のまとまりとして文化圏を捉えてきたが、相互に共通な縄文文化の要素としては、竪穴建物(図5-109)、人やイヌの屈葬、家焼きや物送りなどの東北アジアにつながる要素と、さらには文様と波状口縁を持つことを特徴とする縄文土器、石鎌・石匙、土偶・石棒などの独特な祭祀具、耳飾り・櫛などの装身具などの縄文独自の要素が捉えられ、これらによって縄文文化の範囲が設定できる。南の範囲を熊毛諸島まで(伊藤2017)、北の範囲を国後択捉までの北海道とする意見(福田2017)を支持したい。

(2) 定住の成立

早期半の約10,000年前には、全国各地に居住域(居住施設の集まり)、墓地、貯蔵穴群、捨て場・送り場(遺物包含層)などで構成された定住集落が成立し始めた。南九州では鹿児島県上野原遺跡で竪穴住居群や集石炉・煙道付き炉穴、埋設土器、遺物包含層が集落を形成し、土偶・土製環状耳飾り・異形石器などの祭祀具も用いられるようになった。さらに北九州から山陰までも祭祀的な配石遺構が発見され、定住と祭祀の発達が認められる。東九州から西日本・東海・北陸、そして中部高地まで押型文文化が広がり、関東には熱糸文文化、東日本一帯には貝殻沈線文の尖底土器が広がり、関東・道南(函館空港遺跡など)では大規模な集落も出現したことが明らかになっている。再び九州、中四国・近畿・東海・北陸南半、関東などの中日本、南東北、北東北・北海道南半(渡島半島から石狩低地)とそれ以北の北海道に分かれ、後期旧石器以来の地域文化圏とそれが重層する枠組みが、定住の成立・安定によって再び顕在化した。

またこのころの世界的な温暖化の一環として日本列島でも縄文海進が進み、9,000~7,000年前には

ピークを迎えた。最高時には現在より気温が3度ほど高く、海水面は上昇して3～5mも高くなったと言われる(工藤 2012)。沿岸部には内湾が形成され、河口をさかのぼって海が谷間に入り込み、集落には海産物の捨て場であって葬送と物送りが行われた貝塚が営まれるようになる。有明湾奥に残された約8,000～7,400年前の佐賀市東名遺跡では、七体合葬の墓地や貯蔵穴も含む集落と集落の縁に貝塚が形成された。さらにその下の海拔-1～3m前後の低湿地には貯蔵穴群が設置され、そこに廃棄された豊富な植物遺体や植物質遺物が発見された(佐賀市教育委員会 2016)。このころの温暖化によってすでに縄文的環境は北上し、追い打ちをかけるように南九州は鹿児島県喜界島喜界カルデラの約7,300年前の大噴火に見舞われ、発達した南九州の縄文文化は鳴りを潜めた。このころには中国近畿に及ぶ瀬戸内海は、後氷期の海面上昇によって形成されていたが、縄文海進によって黄島などに押型文期の貝塚を残している。

関東では、熱帯文化(圏)期の初め(約12,000年前)に日本最古の貝塚、神奈川県横浜市夏島貝塚が相模湾に形成された。その後の縄文海進は東京湾岸の利根川沿いをも進み、約50kmも内陸に入った早期半ば約9,000年前の群馬県板倉町寺西貝塚、約70km入った前期初頭の栃木県藤岡町篠山貝塚などを形成した。千葉市周辺の東京湾沿岸にも、約10,000年前から貝塚をもつ集落が並存した。特に千葉県船橋市の取掛西貝塚には数棟の堅穴住居があり、廃絶された堅穴住居で行われたシカ・イノシシなどや土器・装身具(多量な貝玉)の送り儀礼が、定住とともに始まった様子が明らかになった(船橋市教育委員会 2013)

また東北では、約8,000年前に三陸沿岸北部の小川原湾の三沢市野口・早稲田(1)などの貝塚や、古奥入瀬・八戸湾には日ヶ久保・赤御堂・長七谷地貝塚などが形成され、日本海側では秋田県由利本荘市蒲蒲崎貝塚が営まれた。長七谷地貝塚では、北方系の結合釣針、開窩鈎などの漁具が発達し、その後、三陸では南部の仙台湾まで豊かな海を背景に、近世・近代まで漁法と漁具を発達させた。世界に冠たる海洋国日本の漁労文化の基礎を縄文時代に形成した。

この温暖期によって、早期の半ばから本土・北海道では食糧、編組製品・木材・木製品などに植物利用が進んだ。北海道では約9,500年前から高度な漆文化が誕生していたが、その後、漆文化は早期末から前期には、東北日本・北陸・山陰まで広がって定着した。漆文化は祭祀の文化でもあり、定住と共に発達した。

(3) 定住社会の確立

前期の初めから東日本では長期の定住が確立し始め、海浜には大規模な貝塚を持つ集落が営まれ、集団墓地や葬送や送りの祭祀が確立した。縄文時代遺跡約9万か所の約85%は東日本にあるが、それらの多くは前中期の集落である。特に中期後半には集落数も、そして恐らく人口も縄文時代の約一万年間で最も多いピークを迎え、祭祀も発達した。ただし、東日本では定住集落が確立して地域社会が形成されたが、西日本は、先にも触れたように照葉樹が主体となる生産性の低い森に変わり、定住集落の数は著しく減少した。以後、縄文文化の東高西低といわれる状況が続いた。

東日本の東海・関東・甲信越・南東北には、環状の拠点集落が発達し、北緯約40度以北から道南の津軽海峡圏には円筒文化と「円筒モデル村」が発達した。一方、南東北には大木文化が広がる。さらに関東・甲信越を中心に、前期初めには関山や黒浜式土器、続いて諸磯式土器、中期半ばにはさらに

装飾性の強い勝坂（甲信・南関東・北関東）と阿玉台（東関東）、一部に火焰型土器を含む馬高式や焼町式土器などの個性の強い小文化圏が並存し、続いて中期後半の加曾利E式が広がる。これら文化圏の分立を土器型式の分布圏の広狭などによって「縄文のクニグニ」と捉える主張がすでにある（小林1996、図5-106③）。このように中日本文化圏とその細分された小文化圏は継承されるが、後述するように東日本全体の中期社会はやがて終焉を迎える。

この中日本の文化圏は、中央に共同墓地広場をもつ環状集落が普遍的であり、中期には立体土偶、集落広場や竪穴建物奥の大形石棒祭祀などの精神世界も共通する。環状（または開いた所に集落に入りする道が想定される馬蹄形も含む）集落は、およそ2棟が組になった竪穴建物群を単位として中央の共同墓地を開き、外周に貝塚や捨て場が形成される。墓地は、土坑墓の小群が十か所前後集まり、その一角の小群にはヒスイやコハクなどの大珠が副葬されていることがある。これらは集落を統率したリーダーやシャーマンの墓と考えられる。このような環状集落は、前記のような集落構成をもつが、1haから大きくても3ha程度の規模である。このような拠点集落が、河川沿いや谷頭を開んで2km前後おきに所在する地域社会が構成されていたと推定される。

一方、東日本の北部、北東北から北海道石狩低地までは、前半ばから中期半ばまで円筒文化圏が継続した。円筒土器、板状土偶などの祭祀具、「円筒モデル村（北の縄文研究会2012）」など種々の文化要素でまとまり、かつ特色付けられる地域文化圏である。この文化圏の中期半ばには、三内丸山遺跡や二ツ森貝塚などの30haにも広がる、数百年から二千年にも及ぶ大規模な拠点集落が出現した。これらの集落は、先ず掘削盛土による土地造成がなされ、三内丸山遺跡では居住域、貯蔵穴、捨て場だけでなく、道を挟んで大型建物、環状配石墓・土坑墓・列状墓・埋設土器などの各種墓地、盛土遺構、水場施設、粘土採掘坑などと、これらを結ぶ道が整備され、計画的に配置されていた（岡田2014、青森県教育委員会2017）。

このように中期後半には、二千年から数百年に及んだ長期に安定した定住がピークを迎えた。拠点集落は、各種の物資や道具などが集中する物流センターであり、共同墓地や「盛土遺構」・捨て場などの送りの場、祭祀具・装身具などが多く出土する葬祭センターでもあった。また中期後半の円筒文化圏（三内丸山遺跡保存活用推進室2016）、岩手県の一戸町御所野遺跡群や北上川中流域の盛岡市周辺（加藤ほか2016）に見られるように、遺跡群が流域に分布している（図5-108）。前者では、御所野（拠点）集落の周辺に居住施設や貯蔵穴群しかなく祭祀具・装身具がほとんど出土しない枝村（派生集落、分村ともいう）が、同時期に短期に並行して営まれ、川に沿って径約2kmの範囲に遺跡群を形成した（岡村2017）。これら遺跡群とその分布状況は、中日本地域文化圏の遺跡分布、遺跡構造、地域社会の在り方とは大きく異なっていた。つまり、北東北の中期社会は、各種施設が区画整理された大規模な拠点集落、さらに大家族が集めた拠点集落、そして季節的や出作りの分村、前述したような各種生産遺跡などで構成され、社会が階層化・構造化されていたと思われる。同時に三内丸山集落に見られるように環状配石墓、列状墓、配石墓、埋設土器など数種類の墓地が認められ、大規模拠点集落では、リーダーや祭祀者、年齢や性別などによる階層分化も認められる（青森県教育委員会2017前掲）。

なお、このような安定した定住社会であっても、一方では人々や集団のしばしばの移動を窺わせる現象が認められる。特に中期後半の東日本に見られる環状の配石墓群、竪穴住居内の複式炊や祭壇、土器の形や文様、各種祭祀具や装身具などの型式変遷と型式の移動の現象は、それらを選択して価値

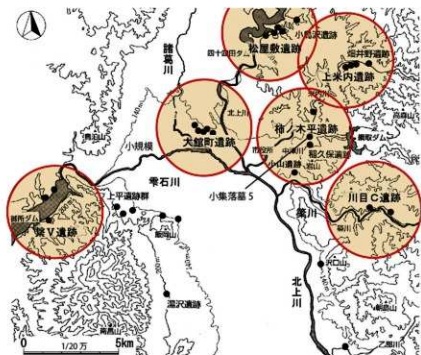


図5-108 御所野遺跡と盛岡周辺の中期遺跡群

づけていた大木文化圏の集団が、信越・南東北から北に逐次移動した証と思われる(岡村2015)。このような漸移的で断続的な集団移動による文化的複合や集団の融合によって、集落が活性化したと考えられる。このような移動と文化の動態は、定住とその間隙を埋めて補充する重要な社会現象だった(宮本2011、宮本2015など)。

(4) 東日本における中期社会の衰退

中期後半に大規模な定住と地域社会の発達が500年ほど北東地では続いた。しかし、御所野遺跡群などで見られるように、南東地以南の中日本文化圏も数百年続いた拠点集落は姿を消していった。

約4,400年前に急激に始まった、中期末から後期初頭の寒冷化と、拠点的な集落が姿を消して、周辺の小規模な集落が残り、それもやがて衰退した。長期にわたる甲信越から東北への人々の移動もあって、大きくなり過ぎた大規模集落や社会の複雑化による社会矛盾、集落環境の悪化などが原因となり、地域や遺跡群によって時間的前後は大きいですが、東日本の中期社会は崩壊・変革期を迎えた。

(5) 隣接大陸の同時代文化圏、民族の分布

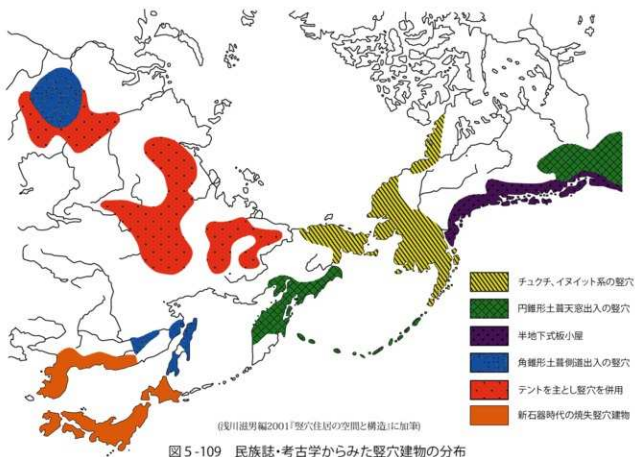
縄文時代の前・中期に確立した東日本の定住文化と同時代の隣接大陸では、どのような文化圏が分布し、文化圏としての特徴をもっていたのだろうか(山田昌久1995、大貫静夫2010など)。その文化的特徴を土器型式、集落構造、生業などの面から見てみよう。

東北アジアでは、北緯50度前後のサハリヤやアムール中下流域に文化圏が成立していた。そして、北緯45度前後の北海道・北東北と同緯度地域にはロシア沿海州のボイスマン文化、さらに海岸から約600km入った中国内陸部には興隆窪文化が分布していた(佐川・小林2004)。これら北緯40～50度前後の文化圏では、自然物の捕獲採集を主な生業とし、堅穴住居に住んだ(図5-109)。堅穴住居の家焼き儀礼も見られ、送りを伴う貝塚での人やイヌの埋葬など縄文文化と共通する要素を多く持っていた。ただし、興隆窪文化では、石鋤(打製石斧)や台石・石皿・磨棒などで一部アワを栽培・加工していた集落もあった。集落は、同規模の方形堅穴建物が道を挟んで方形区割りされ、広場は持たない。全体は堀・環壕で囲まれ、墓は堅穴建物の床下に掘られる場合もあった(日本・中国史前文化遺址共同研究実行委員会など2003)。

これ以南の同時代には文化圏にも、たとえば河南省の仰韶文化や水田稲作農耕を始めている浙江省の河姆渡文化など、ほぼ同規模な文化圏が分立している。縄文時代の地域文化圏も、これら東アジアの地域文化圏に共通した規模をもち、さらに北海道北半、石狩低地から北東北(ほぼ北緯40度以北)、南東北から関東甲信越(中日本)、東海・北陸、近畿・中四国、九州に、それぞれ分かれた文化圏、民族分布圏が分布していた(図5-105前掲)。

(6) 後期以降の縄文社会、生業・生産と呪術祭祀の発達

中期社会崩壊後の東日本は、東北日本では二、三百年の後に集落は再興し、沿岸と内陸(サケ・マス)の漁労文化、アスファルト・ベンガラなどの生産と流通、漆工技術、呪術・祭祀が発達した。津軽海峡圏の十勝内文化圏には、墓地・葬送の場として環状列石をもつ拠点集落が成立した(図5-110)。このような集落は、秋田県鹿角市の大湯環状列石や北秋田市の伊勢堂岱遺跡、青森県の平川市太師森遺

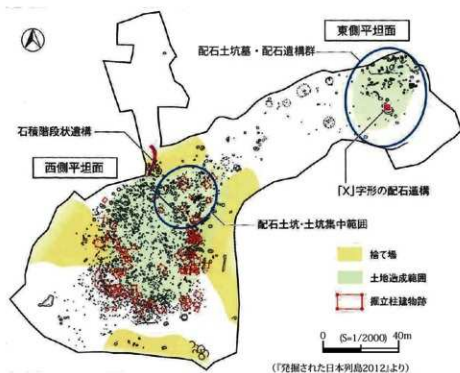


跡、青森市の小牧野遺跡、岩手県北の洋野町西平内Ⅰ遺跡、道南の森町鷺ノ木遺跡など、数えるほどしか発見されていない。

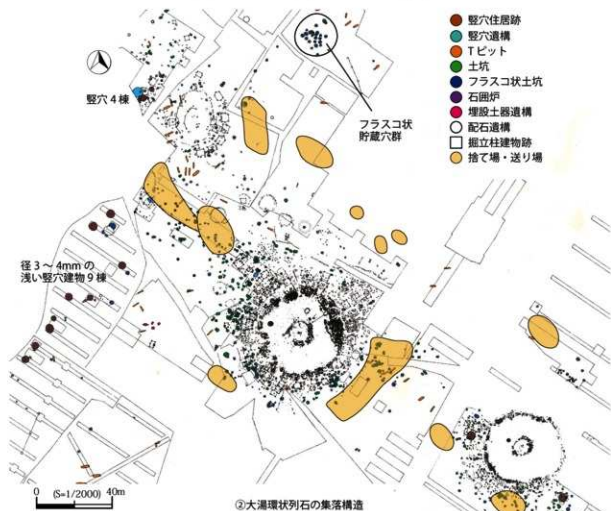
これらは、数十キロ範囲に一か所ほどの中核的な拠点集落であった。またこれら集落の分布範囲は、十腰内文化・集団の広がりを示す。このうち北東北日本海側秋田県の環状列石をもつ集落は、狭義に環状列石と呼ばれる配石墓群を取り込んで大石を径四十数mから二十数mのほぼ円形(35cmの縄文尺を用いて設計された円形という説がある)に大規模に並べられた共同墓地を囲んで掘立柱建物が巡り、さらにその外側に捨て場が形成されている(図5-110②、鹿角市教育委員会2017)。一方、秋田県以外の環状列石は、集落の外に離れた高台に葬祭場として独立している。

これら環状列石の時代に並行する東北南部から関東甲信(中日本)の、堀之内式期には、細長い入り口部をもつ隅丸円形(その平面形から柄鏡型といわれる)の敷石住居が南東北まで広がる。さらに壁際に細い柱列が円形に並び、壁で建つ建物「壁立ち建物」が普及した。このような建物様式は、恐らく集団の北上もあって、北海道まで広がった。そして環状列石を中央にもつ集落が残った秋田県でも、北秋田市漆下遺跡にみられるように、中央の配石墓群は環状掘立柱建物の外に出るようになる(図5-110①、秋田県教育委員会2011)。これ以後、後期後半から晩期の新潟から東北は、掘立柱建物が環状に配置された環状集落が拠点集落となった。

なお、かつては水の確保、水利用については、その施設や実態についてほとんど言及されることはなかった。しかし、1980年ころから新発見が相次いだ。水場には、木組み・石組みや素掘りの貯水施



① 漆下遺跡の居住域(西)と配石・配石墓群(東)



(秋田県鹿角市教育委員会2011年に加筆)

図 5-110 秋田県の縄文後期集落

設・水溜(栗島2015)、護岸や足場、木道・石敷き道、丸木舟や舟着き場などが施設され、水利用の実態が明らかになりつつある。同時に水場は低湿地捨て場・送り場にもなり、各地での野生動植物利用や栽培植物、周辺の植生環境などの実態が、にわかには明らかになっている(工藤雄一郎/国立民俗学博物館編2014)。

一方で後期末の石狩低地には、環状列石の盛土版ともいえる土手を円形に巡らせた周堤墓群が出現した。中には、櫛や連珠、耳飾り、腕輪などを装着したシャーマン、石斧、石刀などを副葬したリーダーの墓なども見られ、葬送や祭祀や工芸などが発達した様相が見て取れる。やがて北東北に亀ヶ岡文化を生み、南下して東北日本一帯に広がり、その影響を受けた関東甲信に安行3 a・bと氷式文化圏が成立した。しかし、停滞した社会と呪術・祭祀の異常な発達、寒冷化などによって晩期半ばには東日本の衰退がはじまった。

そして紀元前千年に近く、北九州に水田稲作が上陸した。このころ亀ヶ岡文化の点的な広がりには、西日本から北部九州・四国南岸までに届いた(大洞A・A'式期)。逆に西日本に広がっていた突帯土器文化圏に、灌漑技術を伴う農耕・水田稲作が北上していった。この弥生文化は、瀬戸内・山陰を北上し、一呼吸あって東海を弥生文化に取り込み、北陸・関東甲信越まで面的に広がった。環濠集落、鉄製品の分布など弥生化した地域が、倭国の範囲に取り込まれ、太平洋側は仙台平野まで稲作農耕文化が波及した弥生文化の範囲と考えられる(図5-107⑥)。弥生時代の土器型式の地域性(圏)は縄文時代以来の文化圏をほぼ継承しており(図5-107⑤)、倭国・ヤマト政権から古代政権が文化圏の上に伸長(北上)していった様相が見て取れる(図5-107⑥)。なお、東北北部の津軽や岩手県南などは、ひとたび水田農耕を受容したが、寒冷な土地柄と豊かな縄文的环境、ヤマト権力の及ばない所となって稲作は撤退して古墳時代以降も縄文文化を継続した。

3 天変地異、気候変動などが縄文文化に与えた影響

縄文海進期などの環境・気候変動、火山の噴火、地震・津波、台風・洪水、山崩れ(土石流)などの自然災害にも適応し、自然の猛威と適切な距離を保ちつつ共生し、定住を持続した。噴火や地震は周期的にしばしば起った。例えば超大規模なものだけでも、秋田・青森県境の十和田火山は、前前半、約6,500年前に東北北半に中振火山灰を広域に降らせた。また南の鹿児島県錦江湾桜島の草創期約11,000年前の薩摩火山灰、同県喜界島の約7,300年前のアカホヤ火山灰、また磐梯山が縄文中期半ば、約4,500年前に沼沢火山灰を会津・新潟北部に降らせた。これらが直接的に被害を人々に与えた証拠はないが、噴火以前に起こっていた気候変動や噴火が生態系に与えた影響を引き金に、人々の移動、文化圏の変動が起きたと考えられる。

なお、世界的規模の温暖化による後氷期の海面上昇・縄文海進が、縄文文化に与えた影響については前述したが、その後、今よりも寒冷化した中期後葉、続いて後期初めと終わり、晩期後半から弥生・古墳時代の寒冷化も、文化・文化圏の変動に影響を与えたに違いない。地震や津波の痕跡は、遺跡にも残されている。地震による噴砂、個方流動の痕跡はもとより、地割れ、遺構の変形もしばしば認められる。

津波も少なくとも百年に一回以上、列島各地の沿岸をおそった。海側から山側、河川をたどって奥へ、海浜起源の土砂(貝殻、フナムシ生痕ある岩片も含む)が、厚さの方向性をもって広域に堆積して

いる。ただし、今回の三陸大津波では、特に大きな被害があった青森県三沢から福島県いわき海岸までの約400kmの範囲で、約480か所あった貝塚をもつ集落は、津波被害を受けていなかった(岡村 2011)。火山にせよ、地震・津波にせよ、予知能力をもち、適切な距離で共存も図っていたことが分かる。山崩れの跡も各地に残っている。土壌の攪乱・天地返しが起こって緩斜面となった地すべり地形に接して、集落が営まれている相関関係が認められる(図5-108①)。地すべり後の土地に生まれた生物多様性を、積極的に利用していたことを窺わせる。これも自然との共生の具体的な様相であろう。なお、最後に一言、地震雷火事親父の内、縄文時代から平安時代まで人々の住まいであった土屋根堅穴建物は、厚く覆われた屋根土によって耐火性は強く、火事・失火は起こらなかったことに注意しておきたい。

まとめ

先ず、約四万年前、朝鮮半島経由で古本州島に新人が渡来した。やがてそこには世界的に見ても固有なナイフ形石器や局部磨製石斧をもつ文化が生まれた。そして、この段階には、すでに主に剥片生産技法やナイフ形石器の型式によって括られる地域文化圏が形成された。つまり、北海道、東北日本、関東中部、近畿瀬戸内、九州の地域文化圏が分立した。その後、約二万五千年前には北方からの石刃・細石刃文化が、古北海道半島まで南下した。約一万七千年前になるとより新しい細石刃文化が本州島に南下した。

一方、九州から中部日本には、大陸の伝統を持った細石刃文化が朝鮮半島経由で西日本へ渡来した。このように日本列島の地形・自然環境に規定され、さらに気候・植生などの東と西の違いによると考えられる東西に二分される文化圏と、前述のような地域文化圏が分立する時期が、重層して繰り返して現れる日本列島の歴史が始まった。

次いで後水期の温暖化によって気候・地形は大きく変化した。旧石器時代からの地理的・時間的枠組みとまとまりをもった特色ある地域文化圏は継承された。定住したことによって似た言語集団・民族・部族的集団を形成し、地域の特性・風土に適応した固有の生活文化を発展させた。自然物利用を主とし、自然と共生する循環の哲学や信仰、葬送やモノ送りの習俗、祭り、集団の絆などを大切にす精神文化を発達させた。土器の型式を成立させる祭祀・呪術性をもつ特に文様は、同じ役割を持つ土偶や石棒などの祭祀具、耳飾り・玉類・櫛などの装身具の型式とともに、同じ精神世界・儀礼・祭りなどを共有する集団によって用いられ、それらは文化圏と集団の広がりを示す。

これらはさらに重層して、例えば東西の二大文化圏、さらにルーズにまとまった総体としての縄文文化が、九州から北海道に分布し、約一万年間以上にわたって行われ、日本の基層文化を形成した。この文化圏の分布や広がり、重層化は、約四万年前からの日本列島における後期旧石器文化からの地域性を、日本国が成立する以前から継承してきたことを示す(図5-106、図5-107⑤)。

そして本土に権力が現れてその支配領域が形成されると、時代を追って北と南に政治的版図を広げていった(図5-107⑥)。しかし、列島に我々の祖先が住み始めた時から、地域文化圏が形成され、各地の環境・生態系に適応した生活文化を発展させ、その地域的な枠組・基盤は、今日まで連綿と継承され、大陸渡来集団などによる大きな文化的断絶は認められない。

4 里山の育成・管理と豊かな自然物の利用 一 生業と食生活の特徴一

温帯モンスーン地帯に位置して季節性をもつ日本列島は、海に囲まれ海浜・平野・湖沼・河川・丘陵・山岳などの地理、基盤・土壌、生物の多様性によって、豊かな自然・風土に恵まれている。この自然の豊かさと同様に働きかけた技術、つまりクリやウルシ林の育成管理、乾燥・アク抜き・燻製・塩蔵などによる食料の保存加工や貯蔵技術などが、長期に安定した定住を経済的に支えた。

また低湿地遺跡などの発掘によって、特に東日本の豊かな広葉樹林帯では、クリ林やウルシ林を含む里山を育成管理し、動植物の季節的生態や特性・有用性を熟知して、旬の恵みを食材とし、薬とし、施設や道具などの資材としても、共同作業と相互扶助によって効率よく利用していたことが明らかになってきた。また、萌芽更新による育成や種実の発芽抑制もしていたことなども知られる。特に東北日本には、三内丸山遺跡の北の谷、尾川遺跡や亀ヶ岡遺跡など情報量の多い、低湿地捨て場をもつ遺跡が多い。また例えばウルシの場合、樹液を漆に用いただけでなく、美しい黄色で耐水性のある木材を、浮き、建築材や水場の施設資材、そして民俗例に照らして見れば実でロウを作り、若葉を食べていたとも考えられる。ウルシ全体を多様に有効に季節的に用いていたことが推定できる。そして、貯蔵、保存加工（あくぬき、干物、塩蔵、堅穴建物内での低温燻製や炉穴による燻製）などの技術を開発させた。今日の和食の基礎となる豊かな食生活を送り、一万年間以上戦争した証拠が見られない平和で安定した定住生活を維持した。

一方、定住が確立したころからアサ、ヒョウタン仲間、ヒエ、エゴマ、マメ類、ゴボウ、カボチャの仲間なども栽培した。またイヌを育て、東日本ではイノシシも育てていた可能性が高い。しかし、新石器時代のヨーロッパなどのように、自然を開拓して土地を開き込んで耕し、単一の栽培作物を増産する農耕を主体とはしなかった。また里山では水場を設けて水利用を進め、粘土・石材、木材・繊維などの道具の素材を得、土木・建築、木工・編組技術を発達させた。中でも世界最古級であり工芸的にも祭祀・芸術的にも発展させた土器文化や漆文化は、その極地であり、物作り日本の基礎を作った。

内湾では民俗例に見られるように磯掃除し、砕いた貝殻や岩片を撒いて藻場を作って魚介を育て、陸では林を育てて里海との循環を図っていたと考えられる。また東北日本の太平洋側は、貝殻や魚骨などの動物遺体や土器・石器や釣り針や鉛・ヤスなどの漁具が、良好に累層して堆積した貝塚が多い。これらはこの地域における漁労文化、海洋適応の発達を如実に示している。全国で90以上の遺跡から160艘以上の丸木舟が発見されていることなどと共に、漁労や水運が発達した海洋国日本の基礎が、縄文時代に作られていたことを示している。

このようにクリ林やウルシ林を育成し、里山を育て、栽培や飼育もしていたが、自然と共に暮らすことを基本にしていた。そして後述するように循環・再生する多様で豊かな自然の中で、自然観、循環再生の哲学・信仰などの精神文化を発達させ、日本の精神文化の基礎を築いた。

5 定住を支えた生産と物流

(1) 原料の加工場(生産遺跡)

石材・原鉱など(原料)が取れる原産地付近には、それらを採取・採掘や加工・精製した原産地遺跡(生産遺跡)がある。例えば原産地には、膨大な量の粗割り、母材(ブランク)、未成品、粗割片、剥

片、チップなど、完製品までの製作とその工程を表す出土品がある。それらの残り方によって、その遺跡で、どこまでの工程や生産が行われたかや、生産量が分かる。このような原産地遺跡の他に、赤鉄鉱や赤色土壌(赤色顔料原料)産地、黒色顔料(石墨)や朱(辰砂)・ベンガラなどの原産地遺跡、海辺の貝の採取と干し貝加工遺跡(ハマ貝塚)や製塩遺跡、アスファルト産地とアスファルト精製遺跡などもある。また考古学的に実証はむづかしいが、夏場のイワシ漁などのための「はまなや」、山での「わらびごや」なども想定される。

また原産地遺跡では、原料・原鉱が露頭採取、採掘され、採掘跡、加工場、堅穴建物などの工房跡が残されている場合もある。これらは生産性や専門化の度合をある程度表しているであろう。

(2) 生産に関与した個人あるいは集団の推定

個人や集団の原産地への立ち寄り、原産地での季節的な居住やキャンプ生活に伴っての素材獲得、原産地周辺の定住集落や遺跡群(集合・協業も考えられる)を営むことが想定される。それによって、逗留期間の推定、複数集団の集合と分散居住による協業の可能性が検討される。例えば信州産黒曜石原産地麓の諏訪湖岸周辺などの集落には、黒曜石が多数貯蔵(特に集落広場に多い)された集落が50か所以上分布している。これらは、黒曜石を採掘、貯蔵、供給した集落と考えられる(山科2010)。また、漆製品の製作、朱の精製、アスファルト精製やそれを用いた加工作業は、集落内に精製場所、精製の土器などの道具、精製カスや製品貯蔵土器などが発見された工房と推定される堅穴建物が発見される場合があり、季節的に生産をまかなった小集団がいたと考えられる(図5-111)。多量に原産地で生産された磨製石斧も、男性の工人がいた可能性がある。

(3) 原料、半製品、製品の中継遺跡と流通

原料・半製品・製品が、埋納・貯蔵された状態で出土する場合がある。例えば千葉県市川市古作貝塚ではオオツツノハやベンケイガイなどの貝輪(腕輪)を入れた土器、秋田県旧田沢湖町湯前遺跡の堅穴建物床から多量のアスファルトが貯蔵された埋設土器(晩期)が発見されている。

また荒川の上流域の埼玉県吉田町・小鹿野町の塚越向山遺跡では、炉内埋設土器(中期末)に、黒曜石などの原材と完形石斧10点が入って発見されている。この石斧と同様に、糸魚川産と推定される蛇紋岩製石斧が完形で土器に入れられて10か所ほどの遺跡から出土している(松戸市立博物館2016)。これらはヒスイや信州産黒曜石の搬出ルートと同様、いずれも関東平野に流れ込む川の流域に点在している。これらの遺跡は、物流中継の集落だったと考えられる。

(4) 同一土器型式圏内程度に流通した品々と流通ルート

良質石材(黒曜石・安山岩・頁岩など)、特にブランド石材(十勝石や信州産黒曜石や秋田・山形などの珪質頁岩など)は、ブランク(母材…円筒文化圏では楡先形類似の両面体)や完成品、手工業製品(塩・アスファルト・ベンガラ・朱、漆製品(赤漆塗り土器など)、土器、石器(石斧・石棒・石刀など)、骨角器などの製品や前述したような貝製品、耳飾りなどの装身具、祭祀具、また干した魚貝・肉などの加工食品、生鮮食料までも運ばれたらしい。



図5-111 アスファルト・朱・ベンガラ・漆の工房跡とベンガラ精製用器

物流品の分布状況と高率の利用範囲と谷・川などの地形的ルート、歴史的古道などから、運搬路・ルートを推定することも可能になった。例えばアスファルト、アオトラ石斧などは、拠点集落を中継して、同じ文化圏に高率で動いていた様子がうかがえる(図5-112)。また運搬手段としては、丸木舟が有効で、鳥根・鳥取の日本海沿岸部、琵琶湖東南岸、埼玉県などの利根川中流域、東京湾奥から千葉県奥の村田川・借当川などから多数発見されている。

(5) はるか遠隔地への移動

ヒスイなどの玉・原石、南海産貝製品(オオツタノハやタカラガイなど)などの希少品・ぜいたく品・威信財は、原産地から遠く離れて地域文化圏を超えて列島各地に動いた。また九州の黒曜石が朝鮮半島、北海道の黒曜石が沿海州やサハリンに海を渡って運ばれていた。

まとめ 物流と文化的影響 - 人が動く、物が動く、文化が伝わる -

旧石器時代の原産地には、人が動いて行ってその場で石器作りをしていたと考えられている。縄文時代になって定住生活するようになると、原産地周辺の集落で各種生産が行われる場合が多くなる。そして、生産物が拠点集落経由で主に地域文化圏内に流通した。ただし、良質石材とその製品、アオトラ石製の石斧など、地域文化圏を超えて流通するものもあった。さらにヒスイ原石・製品、南海産貝製品などは、より遠隔地へも運ばれた。主に自然の恵みで暮らしていた集団にとって、このような物流は、自然の恵みを分配し、近隣とも友好関係を保ち、定住に欠かせない必需品を譲渡して喜んでもらい、集落・社会関係を維持したと推定される(保坂2016)。

7 縄文の祭りと祈り

(1) 「盛土遺構」と貝塚などの物送り場

「盛土遺構」は、集落内または集落近くに形成される。川沿いに送り場を点在させる場合もある。いずれも所定の場所を決めて継続的に、焼け土や灰・炭、廃土、食べ物の滓(焼いた骨・堅果類)、壊れた・使わなくなった道具が、まとめて捨てられ(廃棄単位層)、マウンド状に累層して堆積した遺構である。これらの内、廃棄層として貝層が介在した場合を貝塚、焼け土や灰・炭、掘削土などの廃棄層が顕著な場合は「盛土遺構」と呼ぶ。また廃棄単位層が明瞭でない場合も多く、それらについてはこれまで「遺物包含層」と呼ぶことが多かった。しかし、最近では、「捨て場」「土器捨て場」と呼ばれるが、これも物送り場といえよう。なお、貝塚の場合には送られた貝骨などの動物質遺物は、焼けていなくとも残るので送り儀礼が認識しやすい。

北海道南から北東北では、土坑墓などと乳幼児の土器棺(埋設土器)などの墓が、累層の堆積前後や堆積中に営まれる。貝塚には埋葬された人骨が残り、「盛土遺構」の場合にもまれに埋葬が把握できる場合もある。晩期半ばの青森県五月女遺跡では、典型的な墓地和送り場が横列に囲まれて残っていた。盛土(マウンド)と墓標をもった土坑墓が、20~30基ほどずつ小さなグループを作り、なだらかな丘の西側を取り巻くように分布していた。その北西さらに北にも墓地があり、少なくとも全体に200基以上の墓の存在が推定されている。墓地の西側には、犬の埋葬や子供の墓(土器棺)も発見された。この範囲に重なるように6か所の物送り跡もあった。それらの内、北東端の送り場には貝層(貝

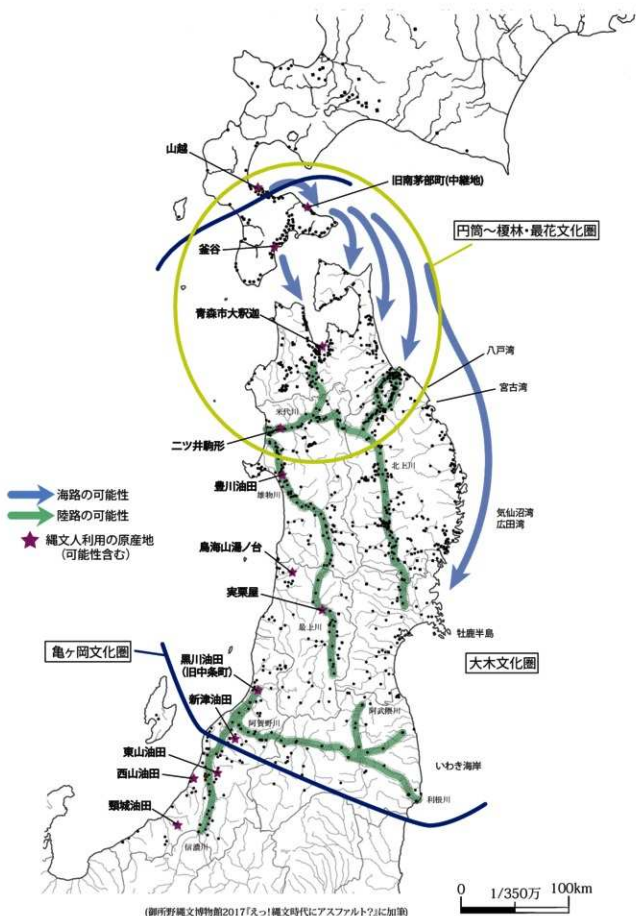


図 5-112 アスファルトの原産地・精製遺跡と流通ルート

塚)が発達していた。貝塚からは、玉の原料や作りかけ、道具作りの道具やその作りかけ、食べ滓などが出土し、それらを送った様相がよくわかる。墓地の南西側には大型の掘立柱建物、祭祀的な土偶や石棒・石刀、凹凸・穴の開いた奇妙な海石(くびれ石・くぼみ石)などが集中していた祭祀跡と脇から固く締められた地面が発見された。東側には、ここに至る墓道が伸びていた。そして、これらを囲うように南側斜面に太い柱の柵列が二列並行して続いていた。集落から独立して営まれた墓地と送り場の全体像が、極めてよく残っていた(五所川原市教育委員会2017)。

また堅穴建物(住居)などが廃絶された窪地に、送りの累層が形成される場合がある。貝層であれば堅穴内貝塚とか地点貝塚と呼び、堅穴内で土器が多い場合はかつて「吹上パターン」と呼ばれた。また最近「盛土遺構」と呼ぶものの内、黒・褐色シルトなどの地山・ロームの塊が多く混じる厚さ10~20cm前後の堆積層が、廃棄単位累層の下位や時には累層間に堆積している。このような黒・褐色シルトなどと地山のロームは、掘削によって本来の上下関係が逆転して堆積している。これらは集落などの造成に伴う廃土の堆積と考えられる。同様な状況は、貝塚などの場合にも見られ、集落設営・維持のために大規模な土木工事が行われていたことも示している。

(2) 送り・供えられる物

イノシシやシカ頭骨や角、シカ第一切歯やクマの牙、ヒゲマ骨などの集積、イルカ頭骨の環状配置、頭の無いウミガメやオジロワシなどの骨格が送り場で確認される場合がある。また、部分骨などを焼いてばら撒いたり、アワビ、ホタテなどを並べたり、重ねた出土例、石器製作の石屑、焼いたトチやクリの実などの集積も認められる。これらは発掘によって明らかになったアイヌ民族が残した送り儀礼の跡と良く類似している(宇田川1989)。決められた送りの場に残された送りの痕跡と考えられる。物送りに当っては、火が焚かれ(石組み炉を設置する場合も)、物が焼かれ、送る物・供物が供えられた(配石を伴う場合もあり)。またヒスイの大珠や、石棒・石刀、骨刀などが分割され、焼かれて分散された場合もある。

これらは、アイヌ民族が、万物に皆カミが宿ると考え、動植物の食べかす、灰・炭や焼け土、道具類などを、「もの送り場」に祭壇(アイヌ語でヌササン)を設け、そこに集めて送った儀礼のルーツと考えられる。

(3) 焼失堅穴建物などの家送り

樺太(サハリン)や千島(クルリ)諸島のアイヌは、近代まで冬に土屋根の堅穴住居に住んだ。北海道アイヌの祖先、本州でも遅くとも平安時代までは土屋根堅穴住居に住み、家を焼く儀礼を行っていた。この儀礼の跡と見られる焼失堅穴建物跡は、朝鮮半島から中国東北部・ロシア沿海地方などにも広く認められる(図5-109)。アイヌは「死者にあの世で住むための家を送る」目的で、家を焼いて送り焼却解体するのだという(百瀬2017)。縄文時代でも約10,000年前の福岡市や沼津市の堅穴住居が焼かれ、焼失堅穴建物として発見されている。その後、鹿児島県北半から北海道まで縄文、弥生・続縄文、そして古代まで家送り(カシヨマンテ)が続き、アイヌは明治35年に禁止令が出てもしばらく続けた。なお、堅穴住居の炉や柱穴に焼いたトチやクリなどが多量に入れられていたり、柱穴に合わせ口の土器や磨製石斧が入れられている場合もある。これらも建物の解体に伴う儀礼と思われる。

まとめ 一定住を支えた祭祀、縄文の精神文化一

数百年から二千年にも及ぶ長期継続的な集落、そしてその定住は、物流や精神文化に支えられてきた。循環・再生する自然の一員として自然と共に生きることによって、循環・再生の持続的な哲学と祭や祈りを発達させ、定住と共同体を支えて持続させた。自然崇拜(山や岩・巨木、クマ、サケ、サメ・海ガメ、ワシ・タカ・フクロウなど)、祖霊崇拜・葬送と環状列石などの葬祭場、物送り(イオマンテ)と送り場、狩猟儀礼(狩猟土器)、土偶・石棒などの祭祀具を定住した当初から発達させた。祭りは、人びと・男女の出会い、相互理解、情報交換、余剰の再分配など、集団の絆を深める大切な行事であった。なお大規模拠点集落は、葬送・物送りなどの祭祀センターでもあった。人や自然を思いやる争いの少ない社会を作ろうとしてきた。

森羅万象、風土などあらゆるものに神が宿り、そして死して山に帰りまた再生すると信ずるによって、日常的だった死を昇華して救われた。特にこの精神文化は東北日本で発達し、日本の精神文化のルーツとなった。日本書紀(神代下)に「葦原中国は、磐根、木株、草葉も、猶能く言語ふ。」と記す。中国の大乗仏教の涅槃経では「一切衆生 悉皆成仏」(衆生とは心があると思われた動物昆虫まで)と書かれている。しかし、日本では「草木国土一切成仏」などと空海、最澄、親鸞、良寛らが異口同音に唱えた。縄文文化以来、土や岩、草木に至るまで、すべてに神宿ると考えていたらしい。

縄文の精神文化は、祭りや祈りを発達させ、司るシャーマンを生み、一方で階層化した集団を統率し、和を守るためのリーダーも生んだ。副葬品や祭祀具を持つ埋葬者や、そのような人物を描いた土器や線刻礫が発見されている(岡村2009)。

8 総括

世界的な温暖化による完新世の環境に適応した新石器文化が世界各地で誕生するが、縄文文化もその一つで、東アジア東端の島で約一万年間維持されて続いた。現在の日本列島の豊かな環境・生態系、その各地の風土に適応した生き方・生活文化が育まれた。人々は、自然の一員として生き、地域にふさわしい技と精神文化を発達させ、東アジアでも固有な地域文化を發展させてきた。その文化を定義付けて時代区分する文化要素は、土器、堅穴住居で始まり、縄文文化にしかない石鏃、石匙、土偶や石棒などの祭祀具である。また共同墓地、石皿・磨石の多用などと、北方、特にロシア沿海地方やアムール川中下流域・中国東北部からの連続的な文化と見られる土屋根穴建物、人やイヌの屈葬、家送り、物送り儀礼も特徴である。

これまで日本史の第一段階として縄文文化を一括して語ってきた。しかし、同じ土器・土偶型式を用い、葬送・祭祀などの精神文化を共有する地域集団、部族(民族)などが、重層する文化圏、社会集団を形成し、歴史文化を担っていたと考えられる。このような重層する文化圏は、東アジアにも広がっていた。これからはこの文化圏と時間(歴史)の枠組みで、日本列島の人類史を捉えなければならない。

縄文文化は、東アジア東端の豊かな季節性をもつ自然環境に適応し、精神文化を発達させた独特な文化であり、東北日本は、特に優れた縄文的环境下で、縄文文化を發展させた代表的で個性的な地域文化圏を持続させた。

なお、土器型式の範囲による文化圏の把握については、日本第四紀学会が編集した『図解 日本の人類遺跡』を大いに参照した。1975年ごろから全国各地で発掘量が激増し、面的に歴史・文化の把握

が可能な発掘データが整ってきた。前掲の書は、1992年に編集された労作であるが、その後、さらに発掘資料は急増したにも拘らず、同様な研究はまとめられていない。今こそ膨大な資料を組織的に集合・分析して、日本列島各地の地域性、地域文化圏を踏まえて、その文化の特色、地域への適応性を探究し、先人が努力して積み重ねてきた歴史の延長で地域の未来を展望し、地域の再生を図る必要がある。この小論では東・東北アジアでの縄文文化、東西の縄文、各地の地域文化圏とその細分地域など、空間的に捉える作業の枠組み、文化把握の見通しなどについて提案したつもりである。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 2017 『三内丸山遺跡44 総括報告書 第1分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書第588集
- 秋田県教育委員会 2011 『津下遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第23集
- 伊藤慎二 2017 『3 縄文文化における南の範囲』山田康弘・国立民俗学博物館編『縄文時代』吉川弘文館
- 宇田川 洋 1989 『イオマンテの考古学』UP選書(8)東京大学出版会
- 大貫勝夫 2010 『縄文文化と東アジア』『縄文時代の考古学1』同成社
- 岡田康博 2014 『三内丸山遺跡』同成社
- 岡村道雄 1997 『日本列島の南と北での縄文文化の成立』『第四紀研究』36-5
- 岡村道雄 2000 『日本列島の石器時代』青木書店
- 岡村道雄 2009 『日本の美術 縄文人の折の道具』№515 至文堂
- 岡村道雄 2011 『宮戸島の縄文文化に学び震災復興を考える』『季刊東北学』東北文化研究センター
- 岡村道雄 2014 『縄文時代以来のアスファルト採取、精製、流通と利用』『新潟考古25』新潟県考古学会
- 岡村道雄 2015 『(3)土製品・石製品』『御所野遺跡V -総括報告書-』一戸町教育委員会
- 岡村道雄 2017 『御所野遺跡と周辺の村々』『平成27年度一戸町文化財年報』一戸町教育委員会
- 鹿角市教育委員会 2017 『特別史跡 大湯環状列石総括報告書』鹿角市文化財調査資料第110集
- 加藤章・高橋己・藤井茂・八木光則 2016 『よくわかる盛岡の歴史』東京書籍
- 北の縄文研究会 2012 『北の縄文「円筒土器文化の世界」～三内丸山遺跡からの視点～』
- 工藤雄一郎 2012 『旧石器・縄文時代の環境文化史』新泉社
- 工藤雄一郎/国立民俗学博物館編 2014 『ここまでわかった!縄文人の植物利用』新泉社
- 栗島美明 2015 『「木組遺構」再考—縄文時代にアク抜き施設は存在するの—』『考古学研究』62-1
- 五所川原市教育委員会 2017 『五月女菰遺跡』五所川原市埋蔵文化財報告書 第34集
- 小林達雄 1996 『縄文人の世界』朝日選書
- 佐賀市教育委員会 2016 『東名遺跡群IV—東名遺跡群総括報告書—』
- 佐川正敏・小林亜矢 2004 『中国遼西地区新石器時代中期興隆窪文化段階の文物集成』『東アジア文化史研究』4 東北学院大学大学院文学研究科
- 三内丸山遺跡保存活用推進室 2016 『円筒土器文化総合研究データベース作成』『特別史跡三内丸山遺跡年報19』青森県教育委員会
- 新東晃一 2015 『南九州に栄えた縄文文化 上野原遺跡』新泉社
- 中国社会科学院考古研究所、日本中国史前文化遺址共同研究実行委員会 2003 『中国東北地方新石器文化と列島縄文文化の比較研究1—内モンゴル興隆窪遺跡と青森県三内丸山遺跡を軸として』東奥日報社編集局
- 福田正宏 2017 『2 縄文文化における北の範囲』山田康弘・国立民俗学博物館編『縄文時代』吉川弘文館
- 船橋市教育委員会 2013 『千葉県船橋市取掛西貝塚(5)I』
- 保坂康夫 2016 『考古資料の讀み論的理解』『山梨県考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 研究紀要32』
- 松戸市立博物館 2016 『平成28年度企画展 石斧と人』
- 宮本常一 2011 『山に生きる人々』河出文庫
- 宮本常一 2015 『海に生きる人々』河出文庫
- 百瀬響 2017 『アイヌのくらしと火—土の住居と家を焼く儀礼—』『火と縄文人』同成
- 山科哲 2010 『黒曜石の一括採納例と流通』『移動と流通の縄文社会』雄山閣
- 山田昌久 1995 『コスモポリタン「縄文人」』『縄文人の時代』新泉社

1 はじめに

本稿は、これまで個別に復原されてきた三内丸山遺跡を中心にした地生生態系、生物生態系、人生態系を重ね合わせ、三内丸山集落生態系を復原したものである。そうすることによって、三内丸山遺跡を代表とする円筒土器文化の形成にかかわった環境変動と、集落生態系が人為生態系であったことを明らかにした。なお、本稿はおよそ7年前の辻(2011)を修正したものである。

青森平野の南西部に位置する三内丸山遺跡は、考古学による土器編年によって縄文時代前期の中頃から中期終末までの長期間にわたって営まれた拠点的な集落遺跡である。土器編年によれば、円筒土器文化とそれに続く大木系の覆林・最花・大木10式土器文化が連続し続く集落である。後述するように、放射性炭素年代測定法によって、集落の継続期間は、約5100BP～約3800BPで、これを暦年校正曲線によって校正暦年にするると約3950 cal BC～約2150 cal BCとなり、校正暦年では約1800年間継続したことになる(辻・中村2001)。縄文時代を通じてこのように長期間にわたって連続し継続した集落遺跡は稀である。集住域では堅穴住居群からなる居住域、大型掘立柱建物群、墓域、おびただしい木炭片や土器片などを包含するいわゆる盛土域など、規模の大きい施設が配置されており、それらが大規模な土木工事によって建設されていること、土器・石器・木器と多様な道具類が生産・使用されていたこと、遠隔地からの多種類の物品が発見されており、広域にわたって交易がおこなわれていたことから、拠点的な集落遺跡とされる(岡田2000、岡村2000など)。このような縄文時代を代表する集落遺跡において、集住域と生活を支える生業圏を包含する集落生態系を復原することは、円筒土器文化の内容を解明することになると考えてよいであろう。

ここでいう集落生態系とは、集住域と集住する人々の生活を支えている生業の基盤となっている空間のことをいう。したがって、住居が集中する居住空間だけでなく、狩猟・採集や農林業、漁業など主要な生業のおよぶ周辺域を含んでいる。青森県史編さん考古部会編(2002)の『青森県史別編三内丸山遺跡』ではこの拠点的な集落を「三内丸山ムラ」と呼んだが、ここでは集落という呼び方を踏襲し、集落生態系の様相を明らかにする立場から、三内丸山集落生態系と呼び習わしたい。

2 青森平野と青森湾の地生生態系の変遷

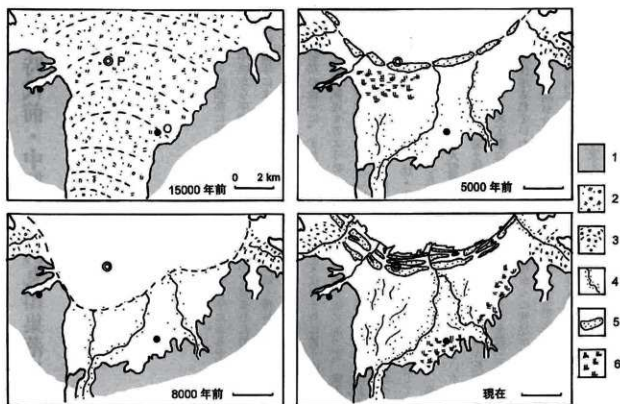
三内丸山集落生態系における集住域は、青森平野の南西部の台地の北部を占有している。また、集住域の北西部の台地から沖館川低地に移行する斜面、すなわち第6鉄塔地区では、主として縄文時代前期の第1期(円筒下層a・b式期)の魚貝類、鳥類、哺乳類の動物遺体群が検出されており、とくに多種類におよぶ魚貝類のほとんどが内湾から外洋の水産資源によって占められるため、これまで考えられていたような広大な干潟を前面に擁する海域生態系はなかったのではないかの問題提起がなされてきた。これは、海への交通や対外交渉を考える上でも重要であり、三内丸山集落生態系における青森平野と青森湾を含めた地生生態系を捉え直す必要が生じた。

その必要に応えるべく、筆者を研究代表者とする集落生態系復原を目的としたプロジェクト研究「三内丸山遺跡における人と自然の交渉史Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」(青森県三内丸山遺跡特別研究推進事業)が1998年

度から2000年度の3年間にわたって実施され、青森平野と青森湾を含めた地生生態系の変遷および水産資源利用についてこれまでとは異なる知見が得られた（久保ほか2006、樋泉2006）。これらを総合し、また、新たな資料を加えて、青森平野と青森湾の変遷および水産資源利用の様相をまとめる以下のようなものである。

青森平野には、南方に位置する八甲田山や十和田カルデラが噴出した大量の火山屑碎物が一般屑碎物として主に河川を通じてもたらされ、それらが平野の埋積に大きくかかわってきた。青森平野の表層部を構成する沖積層は、表層から最上部泥層、上部砂層、中部泥層からなっていて、それより下位は火山屑碎物からなる。この火山屑碎物の一部は二次的に一般屑碎物となっているところもあるが、十和田火山起源の十和田大不動テフラ（降下火山灰と火砕流）と十和田八戸テフラ（降下火山灰と火砕流）の二つの大規模噴火による火砕流主体のテフラによって占められる。このことは、関東平野など他の海岸平野と比較して、大きな特徴の一つに挙げることができる。そのため、最終氷期の深くえぐられた谷地形は認められず、また、関東平野など各地の海岸平野で認められるような縄文海進による長期間におよぶ厚い内湾海成層は認められない。

すなわち、縄文海進によって堆積した海成層である中部泥層は全般に薄く、海岸部の青森市街地でさえ層厚は10m程度にすぎない。中部泥層は海岸から3km付近の内陸側で尖滅し、上部砂層あるいは最上部泥層が下位の火山屑碎物を直接覆うようになる。中部泥層の年代は、市街地のもっとも厚く堆積する場所での下限と上限の放射性炭素年代測定によって、それぞれ約7200BPと約6060BPとされ、



1：山地・丘陵地 2：八戸火砕流堆積面 3：扇状地 4：河川および自然堤防 5：砂州 6：湿地
P：県庁 S：三内丸山遺跡 O：大矢沢野田(1)遺跡
(久保ほか2006)

図5-113 青森平野の地形変遷図

較正暦年では約7600 cal BPから約6400 cal BPとなる。この年代を青森平野における縄文海進期と捉えることができる。その後、急速に海は屑砕物によって埋積され、海岸部には砂州が形成されるとともに、内陸部は湿地化を遂げていった。三内丸山集落の始まりの年代が較正暦年で約5900 cal BPとなるので、集落が形成されたころは、海岸線はかなり後退しており、海と集落の間には現在と同じような沖館川低地がすでに形成されていた。すなわち、三内丸山集落の集住域のあった台地前面には干潟は存在せず、沖館川を通じて海とつながっていたといえよう。

以上の新たな知見にもとづいて青森平野と青森湾の生態系の変遷を描くと図5-113のようになる(久保ほか2006)。

一方、三内丸山遺跡の第6鉄塔地区の第1期の円筒下層a式土器包含層からは多量の魚貝類遺体群が検出されているが、これらの水産資源の獲得には上記のような平野と湾の環境変遷が深くかかわっていたはずである。樋泉(2006)によれば、集落における水産資源利用は、周囲の河川・湿地における淡水系魚貝類の利用と、青森平野沿岸の砂泥底浅海域における底魚類などの利用、夏泊半島方面またはより遠方での岩礁性魚貝類の利用、青森湾の沿岸から沖合にいたる水域での回遊魚の利用からなっており、近傍の淡水域から青森湾にいたる多様な水域環境が広域的・多角的に利用されていた(表1)。さらに、集住域の北側を流れる沖館川は、淡水魚貝類の漁場としてだけでなく、青森湾への通路としても重要な位置を占めていたであろう。このように、集落における水産資源利用のあり方は、平野と湾の環境変遷と著しく調和的であり、多様な魚貝類遺体群を裏付ける。

水 域	底質・生活様式	主要種	その他
外洋(～内湾)	表層・回遊性	ブリ属、サバ属、ニシン、サヨリ属、マイワシ	カタクチイワシ、カマス属、シイラ属、ソウダガツオ属、カツオ等
外洋沿岸(～内湾)	砂礫	マダイ	
外洋沿岸～内湾	岩礫	フサカサゴ科、アイナメ属、ウミクナゴ科、オニオコゼ科	
外洋沿岸～内湾	砂礫・底魚	カレイ科、ヒラメ、エイ類	コナ科、ササウシノシタ属目
内湾	—	スズキ	クロダイ属、ボラ科
淡水～汽水	—	ドジョウ科、ウグイ属	フナ、アユ
外洋→淡水	—		サケ属

※ゴチックは特に出土量の多い種類

(樋泉2006)

表1 三内丸山遺跡第6鉄塔地区の集落第1期の遺物包含層から産出した主要魚貝類の生息環境

3 十和田火山の巨大噴火と円筒土器文化の形成

テフラ層序・福年は考古学的な遺物福年を確立する上でも大きな役割を果たしてきた。東北地方北部では、十和田火山の火山活動によってもたらされた更新世・完新世のテフラ群が、旧石器時代から平安時代にかけての遺物・遺構の層位や年代の決定に果たしてきた役割は大きい。縄文時代の遺物・遺構とのかかわりで古くから注目されてきたのが十和田中振テフラ(To-Cu)であった。その経緯については市川(2006)が、関連する円筒土器および大木式土器の研究史とともに総括しており、このテフラ噴火が縄文時代の人々の生活に大きな影響を与えた可能性も示唆している。中でも福田(1986)によって、円筒下層a式土器がTo-Cuの上位から出土し、大木2a式土器がTo-Cuの下位から出土するこ

とが示されたことは、円筒土器がTo-Cuの上位で出現し、円筒下層a式土器が大木2a式土器に時期的に近接することを示唆しており、以後、To-Cuと円筒土器および大木式土器の関係について注意していく必要性を喚起した。

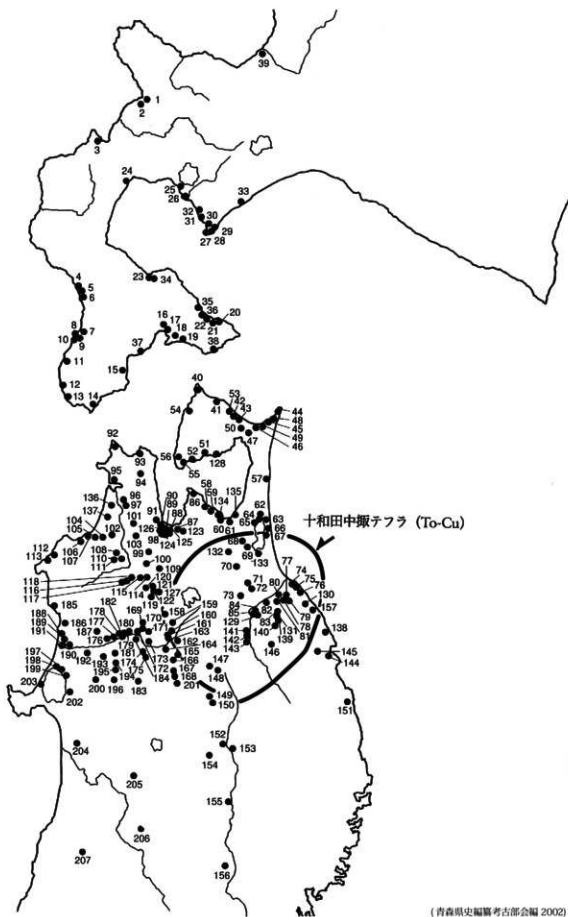
一方、1999年度～2000年度の青森県三内丸山遺跡特別研究推進事業総合研究の総括として、青森県野南部の大矢沢野田(1)遺跡の研究結果が提示され、To-Cu直上に円筒下層a式土器が出土すること、同時にクリ林が急速に拡大すること、放射性炭素年代測定によってTo-Cuと円筒下層a式土器の年代が5050BP前後となり、両者がほぼ一致することが示されたことから、十和田カルデラの巨大噴火が円筒土器文化の成立に直接かかわった可能性が指摘された。これを受けて、2001年度と2003年度の青森県三内丸山遺跡特別研究推進事業では、青森・岩手・秋田の3県にわたって、To-Cuと土器形式の関係を明確にし、To-Cuが生態系に与えた影響を解明することにした。

その結果、星・茅野(2006)によって、岩手県と青森県では、大木2a式土器はTo-Cuの下位であること、大木2b式土器はTo-Cuの下位か上下にまたがる可能性が高いこと、円筒下層a式土器はTo-Cuの上位であることが明らかにされた。これによって、円筒土器がTo-Cuに先行することはないことが明確となり、円筒土器文化はTo-Cu直後に形成されたことが明らかになった。

青森県野南部の大矢沢野田(1)遺跡では、To-Cuの直上においてクリ林の明瞭な拡大が確認されている(後藤・辻2000)。また、三内丸山遺跡では、後述するように円筒下層式土器包含層において、また、年代がほぼ一致する層位においてクリ林の急速な拡大が確認されている。これに対して人の活動が認められない八甲田山田代湿原では、To-Cu直上で、それまで優勢だったブナが急減し、ナラ類(おそらくミズナラと考えられる)の急増が認められ、数百年と見積もられる長期間の後に、ブナが再び回復してきた様子が花粉分析によって明らかにされていた(辻ほか1983)。クリ林の拡大が吉川ほか(2006)の指摘するように人為的であるとすると、人為のおよばない八甲田山においては火山活動の影響を受けて生態系が大きく変化し、人の活動が明瞭な野南部においては円筒土器文化の形成によって、ほぼ同時にクリ林など人為生態系が作り出されたといえよう。

図5-114は円筒下層式土器をとまう東北地方北部から北海道南部の遺跡の分布と層の厚さが10cm以上となる十和田火山周辺域の範囲を示してある。三内丸山遺跡は125番である。To-Cuの層位や分布、年代については大池(1972)によって中振浮石と記載されて以来、多くの研究がある。層序と噴火様式については早川(1983)の詳細な研究があり、To-Cuは下位から、中振軽石、金ヶ沢軽石、宇樺部火山灰によって構成され、いずれも火山から東方に大きな円を描くように分布するとされている。もっとも噴火の規模が大きい中振軽石は、噴出物量が6.5立方キロメートルになり、約5万年前に箱根火山の巨大噴火がもたらした箱根東京テフラとほぼ同程度の大規模なものであるとされた。星・茅野(2006)が示したように、To-Cuの分布は、その後、東北地方南部にまでかなり広い範囲で確認されるようになり、火山東方に主軸があるものの、岩手県南部や山形県にまでおよんでいる。これらのことを総合すると、To-Cuを噴出させた十和田火山の巨大噴火は、周辺域の生態系に甚大な影響を及ぼしたことが予測できる。

事実、図5-117(吉川ほか2006)の三内丸山集落、大矢沢野田集落、および八甲田山田代湿原の総合的な花粉変遷図で示すように、十和田火山の巨大噴火によってもたらされたTo-Cu降灰の直後で八甲田山ではブナ林が壊滅状態となり、土壌的に乾燥・悪化しても比較的適応性が高いコナラ属コナラ



(青森県史編纂考古部会編 2002)

図 5-114 東北北部および北海道南西部における円筒下層式土器をともなう遺跡の分布と十和田中帯テフラの層厚 10cm 以上の範囲

北海道

1	上リヤムナイ	9	勝山館	17	西桔梗	25	入江貝塚	33	鹿伏浜4
2	東山	10	大安在B	18	徳現台場	26	若生貝塚	34	森川A
3	寿都3	11	小砂子	19	面館空港第4	27	祝津貝塚	35	大船C
4	栄浜	12	大津	20	木直C	28	ボンナイ	36	白尻B
5	元和B	13	茂草B	21	八木	29	麓別	37	釜谷
6	小茂内	14	館崎	22	ハマナス野	30	本輪西	38	戸井貝塚
7	穀川	15	森越	23	森村オニウシ	31	茶森場C	39	上花畔1
8	十兵衛沢	16	サイベ沢	24	静狩	32	北黄金		

青森県

40	大間平(2)	60	観ノ木(1)	80	石手洗	100	高賀野(1)	120	古館
41	桑畑	61	寺の沢	81	一王寺(1)	101	沢田	121	大平
42	水木沢(1)	62	六郎(1)	82	西久根	102	山田	122	大面(1)
43	川代	63	坊主沢	83	荒谷	103	原子下溜池(1)	123	桶山
44	物見台(1)	64	唐貝貝塚	84	虚空蔵	104	石神	124	三内丸山(6)
45	入口	65	中志(1)貝塚	85	泉山	105	鳴沢	125	三内丸山
46	石持納屋	66	金栗平貝塚	86	大館	106	七尾	126	岩波小谷
47	最花貝塚	67	早稲田(1)貝塚	87	雲沢	107	浮橋貝塚	127	四戸橋
48	ムシリ(3)	68	赤川	88	近野	108	大森勝山	128	熊ヶ平
49	稲崎平	69	二ツ森貝塚	89	三内沢部(1)	109	坂留(2)	129	中野
50	女館(1)貝塚	70	寺上	90	三内堂園	110	熊鷹七面山	130	白原
51	島沢	71	駒袋(1)	91	野木和(1)	111	薬師	131	畑田
52	小サ沢	72	吉街道長根	92	中ノ平	112	一本松	132	作田
53	涌館	73	西張平	93	山崎(1)	113	寅平	133	古原敷貝塚
54	八幡堂	74	鶴久保	94	大平墓地公園	114	井沢(1)	134	榮崎(1)
55	脇野沢	75	冷水	95	オセドウ貝塚	115	鳥海山	135	向田(13)
56	大沢	76	熊ノ林貝塚	96	深郷田	116	野尻	136	牛島(1)
57	北川沢	77	重地	97	妻の神(1)	117	久渡寺	137	田小原野貝塚
58	家ノ下	78	松ヶ崎貝塚	98	照沢	118	沢部(1)		
59	一本松	79	蟹沢	99	松元	119	永野		

岩手県

138	桑畑Ⅱ	142	上里	146	田代	150	水切場	154	蟹IV
139	長倉	143	深山神社	147	越戸Ⅱ	151	ニシナ畑	155	山ノ神
140	駒水	144	二子貝塚	148	荒原Ⅱ	152	大船町	156	中島
141	中曾根	145	外里山上Ⅱ	149	長者屋敷Ⅰ	153	瀬戸	157	千敷平Ⅰ

秋田県

158	下大谷地(1)	169	福館・橋野野	180	茂屋下岱	191	八森坂	202	沢田
159	内の岱	170	芝谷地	181	神明社	192	小掛	203	角間崎貝塚
160	熊坂	171	茂内	182	村社裏台	193	李岱	204	瀬沢
161	茂谷山麓	172	松木	183	麓ノ瀬	194	長野岱	205	藤葉野
162	丸館	173	山館	184	芋瀬沢	195	狐岱	206	大乗院塚
163	瀬田井	174	長内沢	185	本館	196	隆馬岱	207	堤綱
164	土深井	175	中野	186	外林	197	堂谷沢貝塚		
165	浦水向	176	上町	187	院内岱	198	二ツ森		
166	三ヶ田	177	大畑	188	根洗地	199	古館堤頭		
167	大館	178	なかれ	189	杉沢台	200	福館		
168	水沢	179	赤川	190	古館(1)	201	長峰		

亜属がブナ林に取って代わった。再びブナ林になるまでには約400年あるいはそれ以上の年数を要したと見積もられ、いかに十和田火山の巨大噴火の影響が大きかったかがわかる(紀藤ほか2017)。

辻(2004)は、東北地方北部における十和田火山の巨大噴火とその直後の生態系の急変、ほぼ同時的な円筒土器文化の成立を説明するために、「十和田中振テフラの火山活動は東北地方北部を中心とする生態系と人社会の攪乱を引き起こし、円筒土器文化の形成を誘導した」という仮説を提示した。星・茅野(2006)によるTo-Cuと円筒下層a式土器の層位関係、すなわち円筒下層a式土器は十和田火山巨大噴火の直後であることが確かめられたことで、この仮説はいっそう補強された。星・茅野(2006)およびその後の星(2007)の検討によって、To-Cuの下位にあたる可能性のある白磁式と呼ばれる土器形式の年代や層位、さらにその他の円筒下層a式土器に先行する土器形式の解明が重要課題であることが明らかになってきた。ただ、円筒土器は東北地方北部から北海道南部にかけての多数の遺跡から検出され、かつ膨大な量が検出されているにもかかわらず、それに先行する土器が明確でなく、また、量的にもきわめて乏しいことは、十和田火山の巨大噴火が当時の縄文社会に与えた影響のきわめ

て大きかったことを示唆し、各地に散在していた小規模な集団を一気に統一的な円筒土器文化を持つ集団を形成する契機となったことを示唆する。

しかしながら、円筒土器文化とそれを持つ人集団の形成のプロセスについてはほとんど分かっておらず、解明への緒に着いたばかりである。

4 三内丸山集落生態系史

(1) 集住域の変遷と編年

2006年度までの青森県の発掘調査の成果から、三内丸山集落の集住域は縄文時代前期中頃から中期末葉まで連続と継続したことが明らかになってきた。主要な遺構としては、住居、盛土、土坑墓、掘立柱建物、貯蔵穴などが確認されている。遺跡の発掘調査は上位の縄文時代中期については詳細に進められたが、北西部の巨大6本柱からなる掘立柱建物の発見によって遺跡の全面保存が決定されたこ

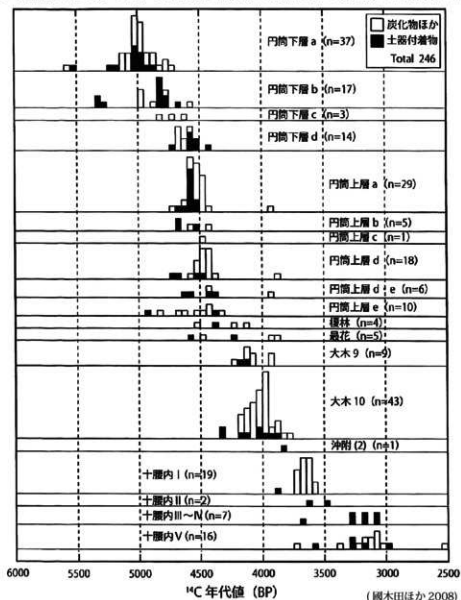


図 5-115 東北地方北部の円筒土器と榎林・最花・大木 10・十腰内式土器に関する放射性炭素年代の集成

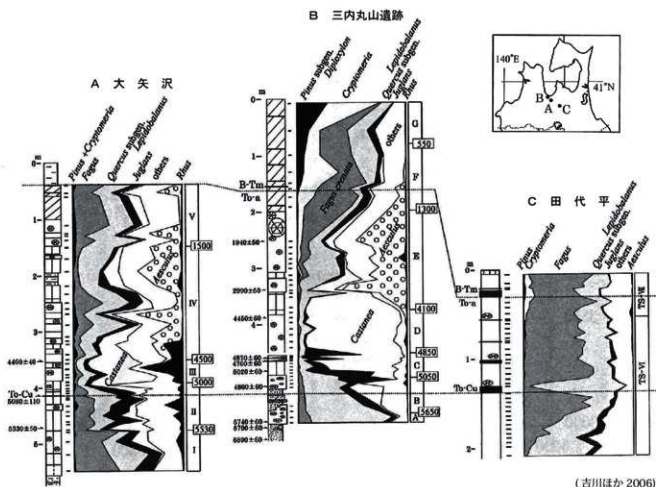


図 5-117 三内丸山遺跡、大矢沢野田(1)遺跡、および八甲田山田代平(田代湿原)における樹木花粉ダイアグラムの比較

(吉川ほか 2006)

第V期：縄文時代中期後半（複林・最花時期）、4300BP～4100BP。引き続き集落は拡大傾向にあるが、施設配置の規則性が崩れ始める。この時期には環状配石墓がたくさん造られる。盛土は形成されるが、活動量は減少する。

第VI期：縄文時代中期末葉（大木10式併行期）、4100BP～3800BP。集落は縮小傾向にあり、施設配置の規則性が失われる。盛土や大型住居、掘立柱建物は構築されなくなる。

放射性炭素年代に対する較正暦年については、土器形式によっては資料がいまだに乏しいものもあり、また、あくまで統計的であるため必ずしも狭い範囲に絞り込めるわけでもないで、ここでは年代を放射性炭素年代で示し、較正暦年で示すことは控えた。

一方、後述するような三内丸山集落の集住域での植生復原やさまざまな遺構との対比については、三内丸山遺跡全面にわたっての基本層序の設定を行い、各調査地区での個々の便宜的な層序や遺構の層位の対比を示したのが図5-116（辻2006）である。これによって集住域全域にわたる生態系復原を行った。ただし、層序において残された重要な問題がある。テフラTo-Cuが基本層序のどの層位に位置付けられるかである。三内丸山遺跡では、To-Cuがまだ確認されていない（辻ほか2017）。

(2) 集住域における生態系史、とくに人為生態系

三内丸山集落の集住域は広大な面積におよんでおり、また、かつて小三内遺跡や近野遺跡と別の遺

跡名で呼ばれていたものが三内丸山遺跡として統合され、今日では便宜的に北地区、南地区、近野地区の三つの地区に大きく区分されている。上述したように、各地点や各地区での植生変遷や動物・植物遺体群の空間的な対比には、基本層序とそれとの対比が不可欠なことはいうまでもない。

集住域での住居や土坑墓などの施設の復原は、基本的には遺構・遺物によって行えるが、遺構・遺物が検出できない空間については花粉分析や珪藻分析、さらに土壌分析などによって復原を試みた。個々の分析の詳細については、主に辻・能城編(2006)の『三内丸山遺跡の生態系史』(植生史研究特別第2号、日本植生史学会)の各論に掲載されているので、ここではそれらにもとづいて復原される集落生態系について論じることにしたい。

三内丸山集落の植生は、吉川ほか(2006)の花粉分析による検討と辻ほか(2006)の種実遺体群の検討、およびNoshiro and Suzuki(2006)の木材遺体群の検討によって明らかにされた。それらを総合すると、三内丸山集落が成立する前は、台地にはブナやコナラ属コナラ節、カエデ属、サワシバ、シナノキ、キハダ、タラノキ、ニワトコ属などの落葉広葉樹からなる森林植生が、また、谷底にはハンノキやヤチダモからなる湿地林が成立していた。これはブナを主要な森林構成要素としてもつ冷温帯落葉広葉樹林の典型的なものである。集落の成立と同時に植生は大きく変化し、ブナをもつ落葉広葉樹林は台地上から消滅し、台地上の住居などの施設以外の空間には広くクリ林が成立した。北の谷など谷の一部ではオニグルミ林が一時的に成立した。クリ林は住居や土坑墓に近接して広大な面積を占めていたが、北地区中央部の北盛土および南盛土といった盛土域にはその存在が認められなかった。クリ林は、第1期から第4期まで途絶えることなく継続した。台地上に広く成立していたクリ林は、ブナやコナラ属コナラ節などからなる冷温帯落葉広葉樹林と入れ替わり成立したこと、また、クリ以外に木本類をまったく含まないこと、さらに林床にはほとんど草本類をとまなわなないことから、人為的に作られたものであり、かつ維持・管理の行き届いたものであったことは明らかである。南の谷での代表的な地点での花粉分析の結果を図5-117に示したが、集落形成とともにクリ林に変化し、第1期から第4期までおよそ千年近くにわたって続いたことは人為的な生態系であることを示している。クリだけの単純な林が、他の木本をまったく含むことなく長期間にわたって存続することは人為ではなくしては説明できない現象である。おそらく、開けた林床の維持にも人為が強く働いていたものといえよう。

クリ林は、種実遺体群として多量に果実が検出されることから、食料を供給するものとして重要な位置を占めていたであろう。ただし、それだけではなく、木材遺体群や焼した木炭の破片群の大半がクリに同定されていることから(辻ほか2017など)、木材資源としても、また燃料資源としても重要な位置を占めていたであろう。

木材遺体群ではウルシやキリといった栽培植物の木本類が検出されているが、三内丸山集落ではウルシ製品(漆器)が多数出土しており、ウルシなどの有用な木本類がクリと同様に人為的に育成されていたであろう。

ところで、三内丸山集落の第V期に入ると、台地上の集住域の施設配置が崩れはじめ、これに呼応するかのよう、谷筋に沿ってトチノキ林が拡大した。谷筋に沿ってのトチノキ林の林床には草本類がほとんど繁茂せず、湿地やその周辺では辛うじてツリフネソウ属やネコノメソウ属、それにミズバショウなどの湿原植物が見られる程度であった。吉川(2008)は、拡大したトチノキ林が人為によっ

て維持されたか、あるいは人為によって作り出された人為生態系である可能性もあるとしている。それは東北地方から関東地方にかけて主要な遺跡でほぼ同時にトチノキ林の拡大が確認され、人の資源利用に組み込まれているからである。また、トチノキの繁殖戦略などを考慮すると、人為によって作り出されたと考えたほうが説明しやすいことが根拠になっている。

一方、東北地方のトチノキ林の拡大と人の資源利用の編年を行った國木田ほか(2008)は、円筒上層d・e式土器段階(約4400BP)、大木9・10式土器段階(約4100BP)、および十腰内I式土器段階(約3700BP)の3段階の画期を経て変遷していったことを明らかにしている(図5-118)。最初の段階は利用開始期、次は住居内での備蓄および精神世界への導入期、最後が集約的な利用開始期であったとしている。この変遷の背景には、気候の寒冷化にともなう海退や河川の浸食作用に起因する低地での新たな環境区の成立とその開発、大木9・10式土器期にピークを迎える活動の広域拡散化があったと考えている。気候の寒冷化が上記の年代に呼応して3段階にわたって起こったことは、最近、九十九里浜平野での海退プロセスにおいて明らかになりつつあり(一木ほか2008)、トチノキ林の拡大が気候変動およびそれにとまなう生態系変動と密接に関係している可能性もある(辻2008a)。

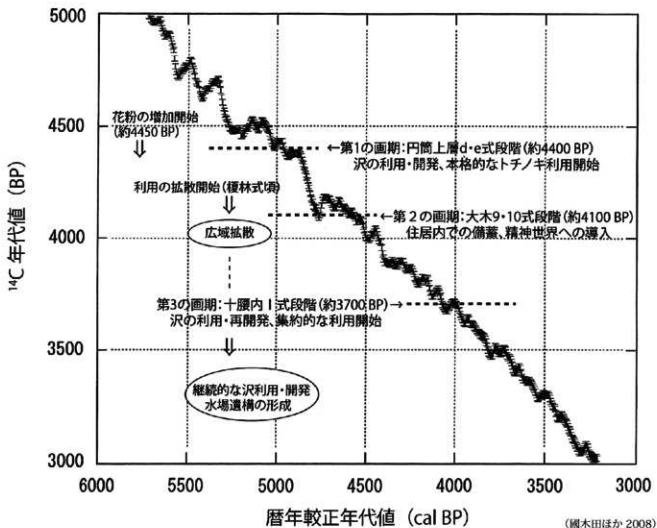


図5-118 東北地方北部における縄文時代のトチノキ利用の三つの画期の編年

三内丸山集落生態系におけるこれまで述べてきた植生の変遷は、図5-117(吉川ほか2006)の総合的な花粉ダイアグラムによって示されている。青森平野南部の同時期の大矢沢野田集落での変化は、三内丸山集落での変化にほぼ同調しており、集住域におけるクリ林の成立と維持・管理、トチノキ林の拡大が明瞭に示されている。これに対して人の活動が確認できない八甲田山の田代湿原では、すでに述べたように十和田火山の巨大噴火すなわちTo-Cu噴火によるブナ林の数百年におよぶ後退は確認できるものの、クリ林やトチノキ林といった人為生態系はまったく確認できない。

(3) 第6鉄塔地区の第I期の特殊な種実・動物遺体群

第6鉄塔地区においては、集落の第I期の円筒下層a・b式期の遺物包含層に、ニワトコ属を主体とし、ヤマグワ、ヤマブドウ、サルナシ、マタタビ、ヒメコウゾ、キハダ、ミズキ、タラノキを満遍なく含む種実遺体群のみからなる層が挟在する。それら種実の占める割合は大きく変化することなく、つねにニワトコ属種実(種子に見えるが実際には果実の一部をなす内果皮)が90%以上を占めている。とくに顕著なものは、集積する層の厚さが5~10cmもあり、広さが10mにもおよぶ。第6鉄塔地区では、このような種実だけの集積層が第I期で少なくとも2層確認され、それぞれ1層が1回に使用された残滓であると考えられた。辻(2005)は、秋田県大館市の池内遺跡の同時期(すなわち三内丸山集落での第I期)の谷底の遺物包含層から、ニワトコ属種実を90%以上含み、三内丸山集落とまったく同じ組成の種実遺体群の塊がすくなくとも9個も発見されたことと併せて、両遺跡でのニワトコ属主体の種実群は、果実酒の酒造に用いられた搾りかすであるとしている。それは、池内遺跡での産出状況が細かな植物繊維によってくるまれた塊状であったことと、それらがおおむね0.3ℓ、1ℓ、2ℓ、2.5ℓ、3ℓ、4ℓ、7ℓの単位であったことから、ある程度は定量された単位が、搾り取られた状況証拠とみなされたからである。これは醸造学からも支持されている(辻2008b、谷川・辻2010)。

種実類の中で主体となっているおびただしい量のニワトコ属は、典型的なエゾニワトコを含んでいる。これは本州に広く分布するニワトコの変種として分類されている。現在ではまったく果実が利用されることはないが、青森県から北海道、およびサハリン南部に分布しており、人の生活域や攪乱域のみに生育しているため、かつては人と密接なかかわりをもっていた植物であった可能性は高い。三内丸山集落において、クリ林などと同様にエゾニワトコからなる人為生態系が維持されていた可能性はあるであろう。また、かつて酒造の材料など人と密接な関係があった植物であれば、その後も酒造は残存し、技術的な展開があるはずだと民族学や比較人類学からの指摘がある(石毛1991、吉田1993)。この点については慎重に検討すべきであり、エゾニワトコが栽培植物に分化していたものかどうかを分子生物学から検討することや、酒造技術が消滅したかどうか東北地方北部からサハリンにかけて検討する余地はあるだろう。

ニワトコ属主体の種実遺体群が検出された第6鉄塔地区では、集落の第I期の遺物包含層から多数の昆虫類も検出されている。昆虫遺体群は、森(1998a、1998b、1998c、2000)によって詳細な報告がなされている。ここからは食植性昆虫としてツヤケシヒメゾウムシとヒメコメツキガタナガクチキの2種がきわだって産出量が多い。前者はブドウの農林害虫として知られ、ブドウ属などの果樹の葉や果実などに多い。また、後者の幼虫はクヌギ・コナラなどの広葉樹の枯れ木の樹皮下を食へ込み、樹皮下でサナギになる。これらの存在は、付近にブドウ類が存在したこと、また、クヌギ・コナラなど

の朽木や倒木があったとされる。これら以外にも二次林や畑作物など人の介在した植物を加害する人里昆虫が多数検出されている。これらはいずれも閉ざされた森林中に生息することがなく、三内丸山集落の植生が人為度の高い二次林で占められていたことを示すものであるとしている。さらに、汚物食と考えていいハエ類の開蝨の出現率が高く、人畜に由来する糞や生活ゴミ・腐肉などに集まる汚物集積の指標昆虫が多く、酒造りに利用されたと考えられる腐熟した果実に集まるおびただしい数のショウジョウバエの仲間が存在することで特徴づけられるという。多数の食糞性昆虫の存在は人糞に由来するものと考えられ、ハエ類の開蝨も人糞や生活ゴミに集まったものと考えられるという。以上のことを総合すると、三内丸山集落の第6鉄塔地区のような台地斜面には、果樹をとまなう二次林が成立しており、人糞や生活ゴミが集積あるいは処分されるような場所であったといえそうである。

寄生虫の調査でも第6鉄塔地区や北の谷の一部の遺物包含層からはおびただしい鞭虫卵が検出されている(金原2002)。このことから、三内丸山集落では鞭虫症が蔓延し、人口の密集と定住が示唆され、植物性の食料を主要な食料として生活していたと考えられるとしている。このことは、昆虫遺体群から示唆されたことと調和的であり、人糞や生活ゴミを処分した場所であったことが支持される。

第6鉄塔地区からは、水産資源の獲得についてすでに述べた魚貝類のほかに、鳥類や哺乳類の遺体群が多数検出されている。動物遺体群を検討した西本(1998, 2002)は、三内丸山集落での鳥獣類が他の遺跡と比較して特異なものであることを指摘している。すなわち、これまでの縄文時代の遺跡ではふつうであったシカやイノシシがきわめて少なく、ノウサギやムササビが多いというのである。これだけでは食肉量を満たすことはできなかったとされるが、一方ではイカ・タコ類やシャコが検出され、動物食が多様であったことも裏付けられた。さらに食肉の交換システムの可能性も指摘されているが、動物食がこれまでとは大きく異なるものであることから、三内丸山集落では広大なクリ林を育成することによって植物食に大きなウエイトを置いていたという可能性も指摘できるかも知れない。

(4) 三内丸山集落生態系の復原

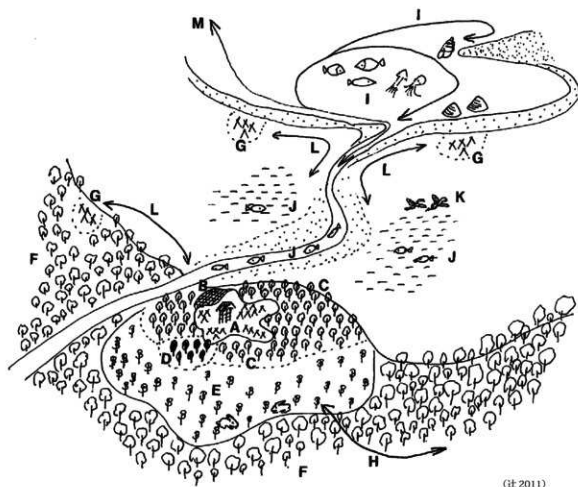
これまでに述べてきたような、三内丸山集落における集住域の生態系は、住居や土坑墓、掘立柱建物群、盛土域などの不可欠な施設以外にも、広大な人為生態系が形成されていたことが明らかになってきた。これまでの調査ではまだその範囲がどこまで及ぶかは定かではないが、とくにクリ林はこれまでの調査区域の外にまで広がりを見せる可能性がきわめて大きい。いわゆるウルシ畑やキリ畑、さらにエゾニワトコ畑などそれぞれ区域が確保されたエリアが存在した可能性がある。クリ林にしても、花粉分析の結果に示されるように、連続と継続している人為生態系であり、恒常的に資源を提供しうるものであったと推測される。このような維持システムは、下草管理はもちろんであるが、樹齡構成をうまく維持するローテーションシステムを構築しておかないと、千年という長期間を維持することは困難である。木本類は樹齡を有するため、経年変化を観測するという行為も必要になってくるだろう。そのように考えると、三内丸山集落における人為生態系の成立と維持・管理は、食料・建築・土木・燃料といった多様な資源利用を目的として営まれており、まさに農林業経営と呼んでもよいシステムが成立していたといえるであろう。

集落域における二次林の存在は、種実遺体群からも、昆虫遺体群からも、さらには寄生虫遺体群からも示唆される。また、シカやイノシシがほとんどなく、ノウサギやムササビといった食肉の少ない

小型の哺乳類しかいないことから、集落を含めて周辺域の生態系は大きく人為的に改変されており、狩猟・採集の範囲内においては里山と呼んでもよい生態系が成立していたであろう。すなわち、三内丸山集落の陸域生態系は、人々の集住域とそれをとりまく農林業経営域、そしてさらにそれを取り巻いている広大な範囲の人為生態系から成り立っていたと考えることができる。つまり、農林業と狩猟・採集はともに営まれていたと考えてよいであろう。

さらに、魚貝類の水産資源利用で明らかにされたように、三内丸山集落に集住する人々が直接沖館川水系に出掛け、さらに青森湾に出かけて漁労をしていたとすれば、生業のおよぶ範囲を集落生態系に含めるという考えに立てば、沖館川から青森湾までが三内丸山集落生態系に含められるであろう。また、直接沖館川や青森湾へ出掛けず、海側の集落の人々によって漁労が営まれたとしても、資源が集住域に持ち込まれている以上、交易のおよぶ範囲として集落生態系に組み込んで考えることは可能であろう。

以上のことを総合して、三内丸山集落がもっとも規模が大きかった第Ⅳ期すなわち縄文時代中期中頃の集落生態系を描き出してみると図5-119（辻2011）のようになる。第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけても



- A: 集落域 B: 捨て場 C: クリ林 D: ウルシ畑 E: 二次林 F: 主にブナ林からなる落葉広葉樹林
 G: 小集落 H: 狩猟・採集域 I: 内湾漁労域 J: 淡水漁労域 K: 水辺鳥獣狩猟域 L: 近距離交易
 M: 遠距離交易

図5-119 円筒下層式土器文化期における三内丸山集落生態系モデル

盛土域など重要な施設が成立するなど集住域に大きな変化があるし、第V期以降のトチノキ林拡大と資源利用の変化があり、これらにともなう集落生態系の変化が予測できるが、現時点ではとくに縄文時代中期後半以降の生業にかかわる資料やその空間構造にかかわる資料も乏しいので、今後の課題としておきたい。もちろんこれは試論であって、これまでに明らかになっている周辺域の遺跡群から示唆される集落は描いていない。あくまで集落生態系の範囲を模式的に示しただけであるが、時期によっても周辺域の小さな集落が密接に関係してくることは想像に難くなく、考古学的な方法と歴史景観生態学の方法の融合によって、今後、このような復原が推進されていくであろう。

引用・参考文献

- 青森県史編さん考古会編 2002 『青森県史別編三内丸山遺跡』 青森県
- 石毛直道 1991 『食文化・討論』 『日本文化の起源、北からの道・南からの道』 160-172頁、小学館
- 一本絵理・村田泰輔・岡本 大・辻 誠一郎 2008 『九十九里平野北部における縄文時代後半期の海退プロセス』 『環境文化史研究』 第1号、91-99頁、環境文化史研究会
- 市川金丸 2006 『東北地方北部の円筒式・大木式土器編年と十和田中振テフラ (To-Cu) について』 『植生史研究』 特別第2号、139-149頁、日本植生史学会
- 大池昭二 1972 『十和田火山東麓における完新世テフラの編年』 『第四紀研究』 第11巻 228-235頁、日本第四紀学会
- 岡田康博 2000 『遙かなる縄文の声 三内丸山を掘る』 日本放送出版協会
- 岡田康博 2002 『第三章第2節 ムラのうつりかわり』 『青森県史別編三内丸山遺跡』 青森県
- 岡村道雄 2000 『縄文の生活誌』 講談社
- 金原正明 2002 『寄生虫は語る』 『青森県史別編三内丸山遺跡』 278-283頁、青森県
- 川口 潤 2006 『三内丸山遺跡の集落研究』 『植生史研究』 特別第2号、19-22頁、日本植生史学会
- 紀藤典夫・大槻華也・辻 誠一郎・辻 圭子 2017 『降下テフラが植生に与える影響と長期的な回復過程—完新世中期の十和田中振テフラの例—』 『植生史研究』 第26巻、15-26頁、日本植生史学会
- 岡本 大・吉田邦夫・辻 誠一郎 2008 『東北地方北部におけるトチノキ利用の変遷』 『環境文化史研究』 第1号、7-26頁、環境文化史研究会
- 久保純子・辻 誠一郎・村田泰輔・辻 圭子・後藤香奈子 2006 『最終氷期以降の青森平野の環境変遷史』 『植生史研究』 特別第2号、7-17頁、日本植生史学会
- 後藤香奈子・辻 誠一郎 2000 『青森平野南部、青森市大矢沢における縄文時代前期以降の植生』 『植生史研究』 第9巻、43-53頁、日本植生史学会
- 小林謙一 2005 『付着炭化物のAMS炭素14年代測定による円筒土器の年代研究』 『特別史跡三内丸山遺跡年報』 第8号、81-91頁、青森県教育委員会
- 谷川章雄・辻 誠一郎 2010 『考古学と民族植物学における酒史研究の展望』 『酒史研究』 第25号、19-27頁、酒史学会
- 辻 誠一郎・宮地直道・吉川昌伸 1983 『北八甲田山における更新世末期以降の火山灰層序と植生変遷』 『第四紀研究』 第21巻、301-313頁
- 辻 誠一郎・中村俊夫 2001 『縄文時代の高精度編年：三内丸山遺跡の年代測定』 『第四紀研究』 第40巻、471-484頁
- 辻 圭子・辻 誠一郎・南木睦彦 2006 『青森県三内丸山遺跡の縄文時代前期から中期の種実遺体群と植物利用』 『植生史研究』 特別第2号、101-120頁、日本植生史学会
- 辻 誠一郎 2004 『円筒式土器文化の形成・展開・終焉とその要因』 『平成15年度三内丸山遺跡報告会予備集』 36頁、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室
- 辻 誠一郎 2005 『縄文時代における粟実酒造の可能性』 『酒史研究』 第22号、21-28頁、酒史学会
- 辻 誠一郎 2006 『三内丸山遺跡の層序と編年』 『植生史研究』 特別第2号、23-48頁、日本植生史学会
- 辻 誠一郎・能城修一編 2006 『三内丸山遺跡の生態系』 『植生史研究特別第2号、日本植生史学会』

- 注 誠一郎 2008a 「青森県三内丸山遺跡特別研究：縄文中期から後期初頭の環境文化急変の解明－三内丸山遺跡を中心に－」『環境文化史研究』第1号、1-5頁、環境文化史研究会
- 注 誠一郎 2008b 「縄文人による果実酒作りの可能性」『増補酒づくりの民族誌－世界の秘酒・珍酒－』371-377頁、八坂書房
- 注 誠一郎 2011 「縄文時代前・中期の三内丸山集落生態系史」『研究紀要』第10号、37-51頁、東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 注 誠一郎・早川裕次・安芸早穂子・吉川昌伸・吉川純子・植田弥生・鈴木 茂・安 昭暉・一木総理・安室 一 2017 「三内丸山遺跡の集落景観の復原と画像化」『特別史跡三内丸山遺跡年報』第20号、36-51頁、青森県教育委員会
- 桶泉岳二 1998 「三内丸山遺跡第6鉄塔地区出土の魚類遺体(1)」『三内丸山遺跡Ⅸ(第2分冊)』61-97頁、青森県教育委員会
- 桶泉岳二 2006 「魚貝類遺体群からみた三内丸山遺跡における水産資源利用とその古生態学的特徴」『植生史研究』特別第2号、121-138頁、日本植生史学会
- 西本豊弘 1998 「三内丸山遺跡第6鉄塔地区出土の鳥類・哺乳類遺体」『三内丸山遺跡Ⅸ(第2分冊)』53-60頁、青森県教育委員会
- 西本豊弘 2002 「海の利用」『青森県史別編三内丸山遺跡』245-252頁、青森県
- Noshiro, S. and Suzuki, M. 2006 Utilization of forest resources in the early Jomon period at and around the Sannai-maruyama site in Aomori Prefecture, northern Japan. *Jpn. J. Histor. Bot., Special Issue No.2*, p.83-100, *Jpn. Assoc. Histor. Bot.*
- 早川由起夫 1983 「十和田火山中樞テフラ層の分布、粒度組成、年代」火山,第2集 第28巻、263-273頁 特定非営利活動法人 日本火山学会
- 福田友之 1986 「考古学からみた「中樞浮石」の降下年代」『弘前大学考古学研究』第3号、4-18頁
- 星 雅之・茅野嘉雄 2006 「十和田中樞テフラからみた円筒下層a式土器成立期の土器様相」『植生史研究』特別第2号、151-180頁、日本植生史学会
- 星 雅之 2007 「十和田中樞テフラの考古学年代について－課題などを中心にして－」『岩手県における縄文文化の諸相 資料集』27-36頁、岩手考古学会
- 森 勇一 1998a 「三内丸山遺跡第6鉄塔地区第VIa・VIb層から得られた昆虫化石」『三内丸山遺跡Ⅸ(第2分冊)』151-162頁、青森県教育委員会
- 森 勇一 1998b 「三内丸山遺跡第6鉄塔スタンダード・コラムから産出した昆虫化石」『三内丸山遺跡Ⅸ(第2分冊)』19-25頁、青森県教育委員会
- 森 勇一 1998c 「ニワトコの種子集積層から産出した双翅目のサナギについて」『史跡三内丸山遺跡年報2』17-25頁、青森県教育委員会
- 森 勇一 2000 「三内丸山遺跡から得られた昆虫化石群集とその意義」『考古学と自然科学』第38号、29-45頁、日本文化財科学会
- 吉田集而 1993 『東方アジアの酒の起源』ドメス出版
- 吉川昌伸・鈴木 茂・辻 誠一郎・後藤香奈子・村田泰輔 2006 「三内丸山遺跡の植生史と人の活動」『植生史研究』特別第2号、49-82頁、日本植生史学会
- 吉川昌伸 2008 「東北地方の縄文時代中期から後期の植生とトチノキ林の形成」『環境文化史研究』第1号、27-35頁、環境文化史研究会

第3項 三内丸山遺跡の生業の特徴

西本 豊弘

はじめに

東北地方北部の青森県は円筒土器文化や亀ヶ岡文化の中心地域として知られているが、この地域の縄文時代の生業活動がどのようなものであったのかよくわからなかった。青森県は津軽と下北・太平洋側に大きく区分される。太平洋側は貝塚が分布しており、ある程度狩猟漁労活動が行われていたことが予想されるが、その内容は明らかではない。またその他の地域では動物遺体の出土例が少なく、狩猟漁労採集活動の内容はほとんど分からなかった。

しかし、三内丸山遺跡の発掘が行われ、丁寧に遺物採集が行われたため生業活動全般にわたる新しい資料が多く得られた。特に第6鉄塔地区の調査では動物遺体とともに植物遺体も多く出土した。そこで、第6鉄塔地区の発掘内容を基本として、三内丸山遺跡での生業活動の特徴について考えてみることにする。

なお、筆者は動物考古学を専門としており植物遺体については知見が乏しい。そのため植物利用に関しては植物考古学を専門とする研究者の所見を参考としていただきたい。この分野はでんぶん利用の問題など新しい事実が明らかになりつつあり、今後大きく進展する分野である。また、この遺跡での動物利用については、すでに『三内丸山遺跡Ⅱ』（西本1998）や『青森県史』（西本2000）などで述べている。そのため、ここでは資料の出土内容の詳細やこれまで述べてきたことを紹介することは必要最小限に止めて、縄文文化全体の中で三内丸山遺跡の研究結果がどのような意義をもっているかについて述べることにする。

1 動物遺体の特徴とその意義

三内丸山遺跡の動物遺体の特徴は、哺乳類ではシカ・イノシシが少なく、ノウサギとムササビが多いことと、魚類では寒流と暖流に生息するの多くの魚種を利用していることと、ブリの若年魚やサバ・ニシンなどの群れを成す魚類を多量に捕獲していることである。まずこれらの特徴について考えてみたい。

(1) 哺乳類の偏りの問題

第6鉄塔地区の動物遺体を分類した時、最初に気が付いたことは哺乳類が少ないこと、特にシカとイノシシの骨が少ないことであった。筆者は以前に北海道と沖縄を除いた本州・四国・九州の縄文文化の遺跡から出土する動物遺体を集成したことがある。その結果時期的にも地域的にも若干の偏りはあるが、シカとイノシシが最も多く出土することが分かった。シカとイノシシの生息する地域では、この2種が陸獣狩猟の主要な対象であったことは間違いのないであろう。ところが、三内丸山遺跡ではシカもイノシシも少なかったのである。この2種の骨がどこかに捨てられて発掘されていない可能性もあるが、骨角製品の材質を調べてみるとシカやイノシシの肋骨や肩甲骨が骨針に利用されていることから、動物骨そのものが少なかったと想定された。縄文時代では骨角製品が多量に作られたことが知られているが、肋骨や肩甲骨が短冊状に割られて骨針に加工する例は青森地域を除いては筆者は知らない。このことから、三内丸山ではシカやイノシシの骨は道具の材料として貴重なものであったこ

とは明らかであり、シカ・イノシシがほとんど捕獲されていないのではと推測される。シカ・イノシシの生息条件では寒さと雪の量が問題となるが、この地域よりも北に位置する北海道ではエゾシカが生息しており、青森でシカが生息できないとは思われない。狩猟圧など何らかの人間の側の影響でこの遺跡の縄文人はシカとイノシシをあまり捕獲できなかったのであろう。シカやイノシシの代わりにノウサギやムササビが多いことから、ノウサギやムササビが食肉を提供したのではという考え方もあるかもしれないが、ウサギは小さい動物であり肉量は少ない。ましてムササビについては夜に木の間を飛んで移動する動物であり、毛皮を除くと肉はほとんどなく、毛皮を利用してきても食肉の供給源としてはほとんど役に立たないであろう。このように考えると、三内丸山の縄文人は、狩猟活動による陸獣からの食肉の供給が少なくても、この場所にとどまり長い年月ここで生活を行ったことになる。このことは他の地域の縄文遺跡と大きく異なっており、三内丸山遺跡の特徴といえるであろう。

なお、青森地方でシカが少ないことに関して、カモシカが多いのではという意見もあるかもしれない。確かに、青森県ではカモシカが低地の遺跡でも出土しており、カモシカを縄文人が捕獲していたことは知られている。しかし、カモシカの出土量は少なく、他の地域のシカの役割を担っていたとは思われない。本州北部の青森県では太平洋側は別として、縄文時代を通してシカ・カモシカ・イノシシの生息数が少なかったのではないかと筆者は推測している。そこで縄文時代の食料源として問題となるのが魚類の利用である。

(2) 魚類の内容とその意味

第6鉄塔地区で出土した魚類は約51種である。縄文時代では海岸部に生息する魚を網やサなどでも捕獲するので、捕獲する魚種が弥生時代以降に比べて多種類であることが特徴である。この遺跡でも小さな魚類から大きな魚類まで多種類が捕獲されているが、単に魚種が多いというだけではなく暖流と寒流の両方の魚が捕獲されているために種類が多くなったと思われる。この遺跡の縄文人の漁労活動は、陸奥湾で主に行われていたと思われるが、寒流と暖流の両方が流れる津軽海峡に近いという立地条件が多く魚種をもたらしたのであろう。

そして、この遺跡出土の魚類で最も注目すべきことは、ブリの若年魚やサバなどの群れをなして海の中層を泳ぐ魚が多いことである。おそらくこれらの魚は陸奥湾に入り込み水面近くまで上昇して遊泳していたので縄文人が気が付いたのであろう。この2種は大きな群れを成すので、捕獲方法さえ確保できれば大きな資源となる。

(3) 魚類の加工品と交換の問題

さらに、もう一つ問題となったのは魚類の利用方法である。どれほど獲物が多く得られても、それを利用できなければ意味がない。例えばイワシなどの骨がまとまって多量に出土することがあるが、生のイワシを保存できなければ安定的な食料元とならない。三内丸山ではブリやサバの頭部の骨が少なく、また頭部近くの椎骨が少ないことが知られている。このことから、水揚げ場で頭部と内臓を捨てた時に椎骨の一部も捨てられて、身の部分のみ遺跡に運ばれることがあったのではと推測されている(極泉1998)。このことから、波辺または遺跡で魚を天日で乾かすなどの加工が行われたと推測される。もしも大量に捕獲される魚類が干魚として貯蔵されていたとすれば、魚類は貯蔵のできる食料と

して大きな意味を持つことになる。それらの干魚は持ち運べる食料であり、また交換品としての役割も持つであろう。

この点については、秋田県大館市の円筒土器文化の池内遺跡の魚骨が大きな意味を持つてくる。この遺跡の魚類は筆者が分類したが、内陸にも関わらずニシン・サバ・ブリ・ホシザメ・ヒラメなどの海の魚の椎骨が含まれていた。大館市は日本海側からは米代川をさかのほっても直線距離は数十キロメートルであり、太平洋側からも陸奥湾からも遠く離れている。これらの海魚がどのような形で運ばれたとしても、生のまま運ばれたとは考えられない。何等かの保存処置がされて山奥まで運ばれたのであろう。それらの魚種が三内丸山遺跡の主要な魚種と同じであることから、円筒下層土器文化の時期に、青森県を中心として魚の干物が文化圏内で一般的に利用されていたことは明らかである。それらはおそらく山奥と海辺の村の間の交易で交換品として用いられていたのであろう。

なお、円筒土器文化での魚類の利用は、土器附着炭化物の年代測定研究の過程で議論されていた。国立歴史民俗博物館では、縄文土器や弥生土器の年代をAMS法で行う研究を進めてきたが、その過程で三内丸山遺跡出土の円筒土器の年代で土器形式で想定される年代よりも数百年古く測定される土器附着炭化物があることに気が付いた。そこで炭化物の成分を窒素と炭素の同位体分析を行ったところ、その炭化物に海の生物に由来するものが混じっていることが分かった。年代が古く測定される海洋リザーバ効果と呼ばれるものである。この海洋リザーバ効果は同時期の木式土器にはほとんど見られず、三内丸山の円筒土器に多いことも分かった。その段階で三内丸山では土器で魚類も煮ているのかと意外に思っていた。魚を煮る目的は調理だけではなく魚油の採取も目的であったかもしれない。近年までニシン漁場ではニシンの油が採取され、そのニシン油が商品とされる他に、ニシン漁場に出稼ぎにきた人達に配られていたという。魚油は食料として、また灯火の燃料として貴重なものであったという。縄文時代には植物から油をとることは知られていたが、おそらく魚油も採取されていたであろう。その魚油も干魚とともに交易品であったかもしれない(今村峯雄、西本豊弘ほか2007、小林2005)。

2 植物質食料の問題

三内丸山遺跡の生業で植物利用については、まずクリ栽培の問題がある。これは、三内丸山でクリの実が採集されただけではなく、意図的にクリの木を管理していたのではないかという問題である。クリの実が焼けたものは各地点で少量ずつ出土しており、三内丸山でクリが食料として利用されていたことは間違いない。そして遺跡内の土壌の花粉分析の結果を見ると、クリ花粉が各地点で多量に含まれていることが分かった。クリは風媒花ではなく虫媒花なので、花粉は広く散らない。そのため1か所でクリの花粉が多くてみられても偶然クリの木の下の土壌を採取したかもしれない。それが遺跡内のほとんどの土壌サンプルにクリ花粉が多いとすると偶然とは言えない。花粉は本来短期間で分解するものであり、それが遺跡内に残っていたとすると、クリの木が多く生えていたことになる。

そして、野生のクリの実を採集した経験からすると、クリの実を採集するためには下草を刈っておく必要がある。なぜならば、クリの実を狙う動物は人間だけではなくネズミやリスがいる。それらの動物よりも早く完全なクリの実を得るためには、雑木や草を除いておくことである。また、クリの木は別の種類の木に囲まれると生育が遅れるし、枯れることもあるという。これらのことを考慮すると、

クリ林の管理が行われていた可能性が高い。動物の側からみると、雑木の除去された見通しのよいクリ林はシカやイノシシにとっては隠れる場所のない場所である。一方、ノウサギにとっては下草が生えやすい疎林であり、ムササビも生息しやすい場所である。この点では動物遺体の内容と矛盾しない。また、クリ林の管理が行われているとすると、ウルシの管理やアズキの栽培など植物栽培がおこなわれていた可能性が高くなる。現在の知見では麻が約10,000年前から栽培されており、ダイズやカボチャ類も栽培されていたと推測される。縄文文化はおそらく当初から何等かの植物栽培を持っていたことが考えられる。縄文時代の残留デンプンの研究も進みつつあり、三内丸山遺跡でも植物利用の研究は今後さらに推進されるであろう。

3 円筒土器文化の生業の特徴とその意義

前節までは三内丸山遺跡での生業活動の特徴を紹介してきた。そこでは従来の縄文文化で知られていない魚類の大量捕獲と保存処理とその交換財としての可能性を述べた。その中で特に注目されることは、干魚の交換財としての問題である。最近発掘された西目屋村川原平(1)遺跡でもニシンが多く出土した。この遺跡は 岩木川の河口から60km以上の中流部にあり、縄文晩期の土器が多量に出土した遺跡である。漆塗りの木製品を製作していた村であり、交換活動が盛んにおこなわれていたと推測される。その遺跡でもニシンの骨が出土したことは、東北地方北部では縄文晩期にニシンの干物が山奥までもたらされていたことになる。単なる旅行用の食料として持ち込まれたかもしれないが、海の魚は内陸では貴重なものであったと思われるので、それらが海の村から山の村への交換財であったことが考えられる。大館市の池内遺跡で指摘したように、海の産物が晩期でも山奥にもたらされていることは、縄文前期から晩期まで東北地方北部で連続して続いていた習慣であったと推測される。すなわち、円筒土器文化や亀ヶ岡文化の経済基盤の一つは魚類資源であり、それを加工して交換財として用いたことが、これらの文化を支えた要因の一つであったと考えられる。

引用・参考文献

- 今村峯雄、西本豊弘ほか 2007 「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集
- 小林謙一 2005 「付着炭化物のAMS炭素14年代測定による円筒土器の年代研究」『特別史跡 三内丸山遺跡 年報-8-1』青森県教育委員会
- 橋本岳二 1998 「第5節 三内丸山遺跡第6鉄塔地区出土の魚類遺体(1)」『三内丸山遺跡Ⅹ』青森県埋蔵文化財調査報告書第249集
- 西本豊弘、1998 「三内丸山遺跡第6鉄塔地区出土の鳥類・哺乳類遺体」『三内丸山遺跡Ⅹ』青森県埋蔵文化財調査報告書第249集
- 西本豊弘、2000 「第5章第2節 海の利用」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』

1 三内丸山遺跡とその周辺の森林資源

(1) 花粉分析結果に見る三内丸山遺跡周辺の森林植生の変遷

三内丸山の地における森林植生については、第4章にまとめられているように、遺跡内外の多数の地点における花粉分析、出土種実および木材の同定がなされ、遺跡成立以前から遺跡廃絶後まで通時的に地形に対応した変遷を追うことが出来るようになってきている。三内丸山遺跡の花粉分析結果による大まかな植生変遷は吉川らによるとA～Gの7つの植生期に分けられる(表1, 図5-120)。

A期は縄文時代前期の前葉の前半にあたり、未だ縄文人の定住の気配の無い時期で、遺跡内外はコナラ亜属(ほとんどがミズナラ)を主体としてブナもある冷温帯性の落葉広葉樹の自然林が広がっていたようだ。B期(縄文時代前期の前葉の後半)になると遺跡内のいくつかの地点で局所的にクリ花粉が現れ、それと反比例してコナラ亜属とブナの花粉が減少することから、縄文人による落葉広葉樹の自然林の「開発」が部分的に進行し、クリの栽培管理が始まったことが考えられ、三内丸山遺跡内に居住域は知られていないものの、周辺を含めた地域での人間活動が活発化したことが窺える。

図5-120の「居住期間」とある下の破線が三内丸山遺跡内における居住の開始時期を、上の破線が居住の終了時期を示しているのだが、開始時期はC期(縄文時代前期中葉)の始まりと一致している。C期になるとクリ花粉が爆発的に増え、D期(縄文時代前期後葉～中期後葉)には遺跡内のほとんどの分析地点で検出される樹木花粉の80%、90%という大変な量をクリ花粉が占めるようになる。クリ花粉が60%を超えるというのは分析地点を中心に広い範囲でクリの「純林」が広がっていたといえるという(吉川2011)。すなわち、遺跡内にはほとんどクリしか生えていない、クリ以外の樹木が無い、と言う状態を示している。

そして三内丸山遺跡が衰退し始める縄文時代中期後葉～末葉にかけて、遺跡の衰退と歩調を合わせてクリ花粉の占める割合が減り始め、E期(縄文時代後期以降)になると激減する。クリの激減と入れ

表1 三内丸山遺跡の大まかな植生変遷(青森県教育委員会2017、『三内丸山遺跡44 総括報告書第一分冊』:198頁)。吉川他2006より作成されたもの

植生期区分	C14年代	時期区分	花粉化石群分析による結果
A期	約5800～5650yrBP	縄文時代前期前半	コナラ亜属・ブナを主とする落葉広葉樹林期
B期	約5650～5050yrBP	縄文時代前期前半	コナラ亜属・ブナの縮小及び局所的なクリ林の拡大期
C期	約5050～4850yrBP	縄文時代前期中頃	クリ林の拡大期
D期	約4850～4100yrBP	縄文時代前期中頃から中期	クリ林の優占期
E期	約4100～1900～1300yrBP	縄文時代後期から弥生時代ないし古墳時代	トチノキ林の拡大期
F期	約1300～550yrBP	7～15世紀頃	ブナ・コナラ亜属が優勢な落葉広葉樹及びスギ林拡大期
G期	約550yrBP	15世紀以降	マツ林の拡大期

替わるのはトチノキ花粉で、分析地点によっては50%にもなる(吉川他2006)。トチノキもクリ同様「虫媒花粉」で、母樹から離れたところには花粉はほとんど飛散しないことから、分析地点の直ぐ脇にトチノキが生えている、あるいは分析地点周囲一帯がトチノキ林という状況だったのであろう。E期の前半にはトチノキ花粉の増加とともにコナラ亜属もぐっと増える。これは遺跡の成立・発展と共に遺跡から離れたところに追いやられていたミズナラを主体とした落葉広葉樹の自然林が分析地点の近くまで戻ってきたことを示している。さらにE期の後半になるとトチノキもコナラ亜属も減少し、代わりにブナが非常に増え、ブナに赤桐を合わせてスギが増え始め、平安時代の頃からマツが増え、近世に入る頃からスギとマツが更に増大し、ブナが漸減して現在の植生状態へと変遷してきた(吉川他2006)。

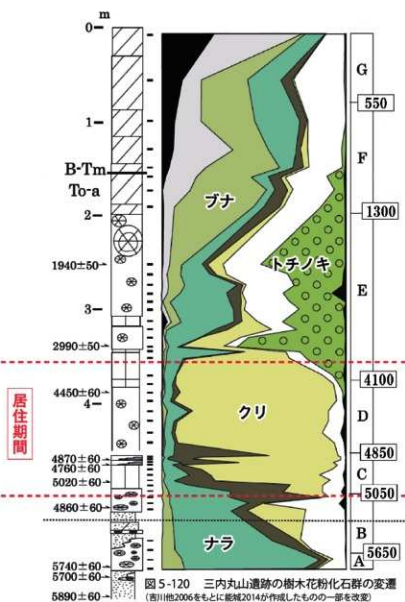


図 5-120 三内丸山遺跡の樹木花粉化石群の変遷 (吉川他2006をもとに熊城2014が作成したものの一部を改変)

(2) 花粉分析結果からわかる三内丸山遺跡周辺の森林資源

上に見たように、三内丸山の地で居住が開始される以前はミズナラを主体とし、ブナも多くまじえる落葉広葉樹林であった。花粉分析で検出されている樹種はミズナラ、ブナの他は、オニグルミ、ウコギ科(ハリギリ、コシアブラ、タラノキなどが考えられる)、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属、キハダ属、サワグルミ、カバノキ属などで、クリもわずかであるが存在していた。現在の東北地方～北海道西南部の冷温帯落葉広葉樹林はブナが優占するところが多いが、地形・地質・水分環境等の差異によりミズナラが優占する林分も少なくない。三内丸山遺跡周辺の自然林はそういったミズナラを主体とし、様々な落葉広葉樹の混じった林であったと言える。このような自然林は三内丸山遺跡が営まれている間も遺跡外の人為による干渉が希薄な青森平野の台地・丘陵部に継続して存在していた。この林にはミズナラ、オニグルミ、サワグルミ、ニレ、ケヤキ、ハリギリ、キハダ

など、有用な木材が多く、また、マユミ、ガマズミ、ノリウツギ、ムラサキシキブ、ハイヌグヤなど木材が有用な低木類も少なくない。食用になるのはミズナラ、オニグルミなどの堅果、ヤマブドウ、サルナシ、マタタビ、アケビ、キイチゴ、ガマズミなどの果実類、オオバギエリ、カタクリ、ヤマノイモ（自然薯）などの野生根菜類、コゴミ、ワラビ、タラ、ウド、オオバギボウシ、ギョウジャニンニクなどの山菜類などである。こうした森はまた、縄文人にとって木材、食料以外の植物素材も提供する場であった。ヤマブドウ、サルナシ、マタタビ、アケビ等の蔓、サクラ、カバノキの樹皮、イラクサ属、カラムシ属の繊維、リョウメンシダなどの縄素材等がそれである。こうした様々な資源を備えている森の存在は縄文人にとってムラを作り、定住するのに格好の立地であったと言える。

2 三内丸山遺跡における森林資源利用

(1) 三内丸山遺跡における木材資源利用

それでは実際にどのような森林資源利用が見られたかを三内丸山遺跡の出土遺物から検討しよう。

① 縄文時代前期中葉～後葉の木材資源

遺跡北部、沖館川に面した北の谷と第6鉄塔地区で試料数は多くは無いが、居住開始前後の出土木材が調べられている（表2）。居住開始前（縄文時代前期中葉）の北の谷地点Bでは幹材ではトネリコ属、カエデ属、ブナ属が殆どを占め、たくさんのトネリコ属の根材、それにオニグルミの根株材も出土している。これは小さな谷の底のこの場所に湿地生のトネリコ属（恐らくはヤナダモ）が優占して生え、湿潤地を好むオニグルミもあって、谷斜面にカエデ属、ブナが生えていた、まさに湿性の落葉広葉樹の自然林があったことを示している。これが、居住が開始された縄文時代前期後葉になるとブナが消えている。またモクレン属（ホノキ又はコブシ）が幹・根材ともに少なからずあることからこの地に生えていたのだろう。居住開始後（縄文時代前期後葉）の北の谷全体からの出土自然木を見るとクリとアスナロ（ヒバを含む）が非常に多く、両者で5割以上となり、次いでオニグルミ、トチ

表2. 三内丸山遺跡の縄文時代前期の自然木と木製品・加工木の樹種組成

（古代の森林研究会2015および能城・鈴木2002より作表）

樹種名	部位**	北の谷地点B*		北の谷自然木前期中葉		北の谷自然木前期後葉		第6鉄塔地区自然木前期後葉		北の谷木製品・加工木前期後葉		第6鉄塔地区木製品・加工木前期後葉		合計
		試料数	試料数	試料数	試料数 (%)	試料数	試料数 (%)	試料数	試料数 (%)	試料数	試料数 (%)			
クリ	S			95	32	11		105	29	127	36	338		
クリ	R									1	0	1		
アスナロ	S			76	26	1		152	42	65	19	294		
オニグルミ	S			53	18	1		28	8	10	3	92		
オニグルミ	SR+R	1	2	2	1			2	1			7		
トネリコ属	S	18	5	4	1	13		19	5	22	6	81		
トネリコ属	SR+R	37	24	14	5			1	0			76		
カエデ属	S	13		4	1	17	3	1	24	7	61			
コナラ属コナラ節	S			7	2	8	7	2	15	4	37			
ニレ属	S			6	2	1		8	2	15	4	30		
トチノキ	S			15	5			8	2			23		
ヤマゲワ	S						7			16	5	23		
ニガキ	S						9			12	3	21		
キハダ	S			2	1	3	5	1	8	2	18			
ブナ属	S	13		1	0	2	1	0				17		
ケンボシ属	S			2	1	2	2	1	4	1	10			
モクレン属	S		3	1	0			3	1	3	1	10		
モクレン属	R		11							1	0	12		
その他(宮種)***		3	1	15	5	13	21	6	28	8	81			
合計		85	46	297		88	365		351		1,232			

* 図解一部2006、三内丸山遺跡の掘削と編年・編年学研究特別号2号、記載の地点

** S=幹・根材、SR=根株材、R=根材

*** 合計10点以下の樹種27種の合計点数

ノキ、ミズナラ（コナラ節）、ニレなど花粉分析から推定された落葉広葉樹林の構成要素が顔をそろえている。だいたい同じ時期の第6鉄塔地区でも基本的にこれと良く似た組成である。異なる点はアスナロ、オニグルミ、トチノキが少ない（あるいはない）こと、ヤマグワ、ニガキといった木が見られることなどである。このような違いのうち、後述するアスナロを除いては北の谷が台地を切り込んだ小さな谷の谷底とその両側の斜面に由来する樹木であるのに対し、第6鉄塔地区は台地が沖館川に面した斜面であるという立地の違いによるものだろう。注目すべきはこの時期になってクリ花粉が急激に増加して、クリ林が拡大したことが考えられたが、それが木材（自然木）でも確認されたことだろう。クリ自然木の少なからぬ出土はクリの木が分析地点周囲に当り前のようであり、それらの樹木から自然に、あるいは人為による枝や幹材などの廃棄が起きていたことを表している。

② 三内丸山遺跡の木材利用樹種とその量

上に紹介した木材資源を縄文人はどの様に利用したのだろうか？表2には北の谷および第6鉄塔地区から出土した縄文時代前期後葉の木製品・加工木の樹種が示されている。いずれの地点でもクリとアスナロが最も多く、両者で50%を超える。この両者は別途検討することとして、それ以外で多いのは北の谷ではオニグルミ、トネリコ属、ニレ、トチノキ、ナラ、キハダといったところである。第6鉄塔地区ではカエデ属、トネリコ属、ヤマグワ、ナラ、ニレなどで、北の谷と樹種、量に多少の違いはあるものの、いずれもが①で述べた落葉広葉樹林の構成種であり、縄文人は遺跡の周囲に広がる自然林から木を伐りだして利用していたことが分かる。

第6鉄塔地区の縄文時代前期後葉の廃棄物層と西盛土の縄文時代前期末葉～中期後葉の盛り土層から出土した炭化材の樹種が調べられている（表3）。第6鉄塔地区ではクリが60%を占め、同定できなかったものを除くと、カエデ属、キハダ、トネリコ属、オニグルミなどで、アスナロが無いこととクリの占める割合に違いはあるが、樹種構成としては自然木、木製品・加工木と一致する。

西盛土の炭化材は北の谷、第6鉄塔地区以降の木材利用を表している。縄文時代前期末葉、中期前葉、中期中葉、中期後葉と4つの時期の盛り土層内の炭化材が詳細に調べられている（辻2017）。ここではクリが一貫して80%以上を占め、その他の樹木はわずかである。前期末葉にはトネリコ属が3.5%と多く、カエデ属、ヤマグワ、サクラ属、ナラ、ハンノキ、ケンボナシといった組成である。中期前葉～後葉の各時期でも同様で、オニグルミ、ニレ属、トチノキ、クマシデ属、そしてブナも加わる。これらはまさに遺跡周辺にあった自然林の樹種組成であり、これらの炭化材が縄文人は遺跡外の自然林を伐採して木材として利用したあと廃材を燃料とするか、焼却して処分し、あるいは薪材として自然林から伐り出して直接燃料としたものなどであることを示している。

③ 木製品の用材

三内丸山遺跡は大部分が「台地上」の遺構からなる遺跡なので、福井県の鳥浜貝塚や八戸市の是川遺跡などとは違って、植物性遺物など有機質の遺物が出土するのは北の谷や第6鉄塔地区など非常に限られた地区で、遺跡が大規模なわりには出土する木製品等の数は多くない。

これまでに報告された木製品の報告（能城・鈴木2002、古代の森研究舎他2015など）から拾ってみると、木胎漆器は7点あり、列物容器が4点、列物容器の把手では無いかと思われるものが2点、漆塗

表3. 三内丸山遺跡の炭化材の樹種組成

調査区 時期	西盛土**					合計	
	第6鉄塔* 前期後業	前期末業	中期前業	中期中業	中期後業		
調査試料数	1044	819	4814	1894	269	8872	
樹種	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)		(%)
クリ	60.0	87.2	83.7	83.9	85.5	7186	81.0
トネリコ属	1.2	3.5	2.0	1.1	5.2	175	2.0
カエデ属	3.3	0.7	1.8	1.3	1.5	157	1.8
コナラ属コナラ節	0.6	0.2	1.1	0.7		73	0.8
ヤマグワ	0.4	0.4	0.4	1.3	0.4	50	0.6
ハンノキ属	0.6	0.2	0.6	0.4	0.4	45	0.5
ニレ属	0.9		0.4	0.6	2.2	44	0.5
オニグルミ	1.1		0.4	0.4		38	0.4
エゴノキ属	0.1		0.6	0.3		36	0.4
サクラ属	0.3	0.4	0.4	0.3	1.5	33	0.4
ケンボナシ属	0.2	0.2	0.4	0.1	0.4	28	0.3
キハダ	1.7			0.1		21	0.2
トチノキ			0.1	0.7		18	0.2
ブナ属	0.2		0.3	0.2		18	0.2
クマシデ属			0.2	0.3		14	0.2
ケヤキ			0.2	0.1	0.4	14	0.2
ヌルデ	0.9			0.2		14	0.2
その他(28樹種)***	3.0	0.6	0.5	1.2	1.5	86	1.0
以上小計	74.2	93.5	93.0	93.2	98.9	8050	90.7
同定不詳・同定不能****	25.8	10.4	7.0	6.8	1.1	822	9.3

* 前田・鈴木2002より作成

** 辻他2017より作成

*** 合計点数10点以下の樹種28種を合計

**** 針葉樹、環孔材等の不詳な同定と同定できなかったものを合わせた試料数

り櫛が1点、器種不明が一点である。刳物容器4点の樹種はクリが2点、あとはナラ、ケンボナシで、把手は2点ともクリ、櫛もクリである。また、ウルシはかけられていないが大形の刳物容器（鉢）が1点あり、それはクリである。このように、漆器容器や櫛の木胎にクリが多用されているところに三内丸山遺跡の特徴がある。当遺跡にすぐ近くの三内丸山(6)でも皿・椀・刳物容器5点のうち4点がクリ、残りがトネリコ属、容器の破片かと思われる板片や容器原材かと思われるもの3点もクリである。山形県の縄文時代前期の押出遺跡では木胎漆器や皿がケンボナシ属とクリであるとの報告があり(東都文化財保存研究所2014)、これらの遺跡でも三内丸山遺跡と同じような用材選択がなされていたことを窺わせている。一方、三内丸山遺跡の南西の丘陵中の岩渡小谷(4)遺跡(縄文時代前期中業～後業)ではウルシ製の舟形容器2点が出土したことで注目されるが、これ以外の刳物容器あるいは容器と思われるもの7点はクリ、キリ、サクラ属、ハリギリ、カエデ属、ケンボナシ、コシアブラとバラエティに富み(能城・古代の森研究所2004)、クリに集中することがないのは三内丸山遺跡と対照的である。さらに福井県の鳥浜貝塚(縄文時代前期)では木胎漆器52点のうちトチノキが35点もあり、クリは1点も無く、刳物容器52点でもやはりトチノキが19点を占め、クリは5点到留まる(能城他1996)のと極めて対照的だ。

④ クリ材の利用

既に知られているように三内丸山遺跡から出土した柱材が樹種が調べられたものはすべてクリ材である。柱材に限らず、木製品、杭、丸木材、割材、板材など出土したすべての木製品・加工材の1/3がクリ材である。炭化材では表3に示されたように60～80%以上を占める。三内丸山遺跡の居住期間後半でのこのようなデータは無いが、花粉分析から前半と変わらずに高率のクリ花粉の検出から考えると、クリを非常に多用した生活が続いていたことは充分に考えられ、これらのことから三内丸山遺跡で消費されたクリ材の量は膨大なものであることが分かる。

⑤ アスナロ材の利用

ヒノキ科の針葉樹アスナロは日本特産の樹木だが、北海道西部から北東北、北陸の日本海側には変種のヒノキアスナロ（ヒバ）が分布する。青森県地方では最も重要な林業樹種で、三八上北地方を除いてほぼ全県的に分布しているが、三内丸山遺跡周辺には天然のヒバの自生は見られない。これはヒバが青森平野の台地、低地に元々自生していなかったことに依るのか、縄文時代以来の人間活動により自然林が伐採されて二次林化し、また地域が開発されてきたことにより自生していたものが消えたものなのかは難しい問題である。三内丸山遺跡とその周辺でのブナについては、元々ブナをまじえた自然林があったが、三内丸山遺跡が営まれた期間は遺跡内では人為によりブナが無くなったものの遺跡周辺の自然林にはブナをまじえた落葉広葉樹林は継続しており、そして遺跡廃絶後は今度はブナが主体の落葉広葉樹林となり、その後歴史時代になってスギ林の拡大、マツ林の拡大があって現在ではブナはほとんど消失してきたことが分かっている（吉川他2006）。ヒバ（ヒノキアスナロ）については同じ事が言えるのだろうか？

吉川他2006には遺跡内外の9地点の花粉分析結果が示されている。それらの花粉分析結果一覧表を見ると、各分析試料で200～400粒ほどの樹木花粉がカウントされている中で、ヒバが含まれる「イチイ科-ヒノキ科-イヌガヤ科」（これら3つの科の花粉は互いに良く似ていて識別が困難なため一括して取り扱われる）は縄文時代の各時期、各分析地点を通してゼロか、1、2粒しかないのがほとんどである。ヒバやヒノキはスギやマツに比べて花粉生産量が少ないので花粉分析で大量に検出されることは元々少ないのだが、それでもこの結果は、分析地点およびそのすぐ周辺も含めてヒバは「生えていなかった」と考えるのが妥当だろう。そうした目で出土木材の樹種同定結果（表2）を見ると、ヒバ（アスナロと表記）は北の谷地点Bで0、第6鉄塔地区の自然木は1点、と言う事で花粉分析結果と整合する。ところが北の谷の自然木では76点（25.6%）もの出土がある。北の谷、第6鉄塔地区双方とも木製品・加工材ではヒバはクリと同じくらい大量に使われている。このことから北の谷のヒバの自然木は、北の谷に生えていたヒバの木に由来するのでは無く、ヒバ材利用のために遺跡に持ち込まれた伐採木の不要部分が北の谷に投棄されたものであると考えるべきなのだろう。

以上の検討で分かる様に、ヒバは三内丸山遺跡周辺には自生は無く、ある程度離れた地域から木材を利用するために持ち込まれたもので、クリが遺跡内に生えていて、それを利用したのとは違った資源利用であることが分かる。ヒバ材の利用は出土遺物の多くは細長い割材で、形の整ったものは著、著？、著状などと遺物に表記されたものがいくつもある。特異的なのがあたかも植木鉢に差し込む植物名ラベルのような形態（ヘラ状などと表記される）の遺物で、これがどういう目的にどの様に使わ

れたのかは分かっていない。しかし、少なくない数の出土はこの材が縄文人にとって有用で、また必要な木材であったことを窺わせる。いずれにしてもヒバの材は小さな製品・加工材であり、建築材や土木材への利用はほとんど見られないことも遠隔地から移入されたものであると言う考えを支持している。

⑥ 三内丸山遺跡の「クリ林」の資源の在り方、利用と資源管理

花粉分析の結果から、遺跡が営まれた時期の遺跡内には樹木はクリしかない、と言う状態であったことが明らかとなっている。そしてクリが圧倒的に多い分析試料でも堆積物単位体積あたりの花粉量が少ないわけではないことから、遺跡内にはクリしか無いが、草原のような開けたところにクリがまばらに生えた、現在に見る広々とした公園のような景観、と言うわけでは無いようだ。それは図5-120には示されていないが、元の花粉分析データ（吉川ほか2006）を見ると、このクリが圧倒的に多い層準でヨモギ属やイネ科などの草原性の草本花粉が増えるわけではないことから分かる。辻ら（辻ほか2017）は種々の分析結果を総合して、遺跡内にはびっしりとクリの「低木林」があり、遺跡のすぐ廻りの台地にはクリとコナラなどの混じった「細い木」の林が、更に外側にはクリとコナラなどの混じった「太い木」の林があって、更にその外側にブナ・ミズナラ主体の自然林があった、と言う「三内丸山集落生態系の景観モデル」を提案している。この図には一部にウルシ林を、台地に切り込む谷斜面や台地下の低地との境にはトチノキを配している。なかなか良くできた景観モデルと言える。

鈴木（2016）は現在の東北地方のクリをまじえる落葉広葉樹の二次林において、クリの木だけを抜き伐りするとその林にはクリは再生してこないで無くなってしまふこと、ある程度の面積（実験では緩衝地帯も含めて20m×20mの面積）を皆伐してそのまま放置すると、最大で伐採前の量のクリしか再生してこないことを示した。三内丸山遺跡成立当時のナラ・ブナを主体とした落葉広葉樹林には多くはないがある程度の量のクリが含まれていたと考えられる。その資源量だけではムラを開き、維持するにはとうてい足りないのは自明で、縄文人がとった施策は「クリ林」を造ることだった。現在の我々は「集落の周辺をクリ林にする」と考えてしまうが、花粉分析結果を素直に受け止めると、縄文人は「集落の中にクリ林を造る」あるいは「クリ林の中に住いする」ことだったようだ。クリの木のある中に住いし、日常を送る縄文人にとって、その管理・育成は非常に親しみがあって、かつ重要な仕事だったのではないだろうか。辻ほか（2017）はこうした「ムラの中のクリ林」として「低木林」を想定している。「低木クリ林の剪定のイメージ」の図を見るとリンゴやウメなどの果樹のように太くて低い幹から徒長した当年枝を毎年剪定して育成していることを想定しているようだ。短枝に花芽がつく果樹には剪定は必須である。リンゴやウメのように樹上で成熟した果実を収穫するには木が低いことは作業効率として望ましい。しかし、クリはこのいずれにも該当しないようだ。

円筒式土器文化圏の縄文時代中期の拠点集落である岩手県一戸町の御所野遺跡では10棟の焼失堅穴住居の炭化材877点の樹種が調べられ、実に84.3%がクリ材であり、ここに限らず、東日本の縄文時代の堅穴住居では主柱や梁などの主構造以外の部分もほとんどがクリの丸木で造られていたことが分かっている（鈴木2016）。堅穴住居の屋根の垂木には元径で最大10cm、長さ2m以上ある真っ直ぐな丸木が数10本使われるのが通例である。御所野の炭化材の結果はこれらがほとんどクリ材であることを

示している。竪穴住居の建築には主構造部分は直径の大きなクリ材が必要だが、それは「たくさん」は必要なく、むしろ垂木にするようなサイズの通直で長さのある材が多量に必要である。三内丸山遺跡の北の谷もそうだが、低湿地の遺構では大量の丸木杭が打ち込まれている遺跡が多数ある（能城2014）。数百本あるいはそれ以上の杭の大半はクリ材である。この杭材にも通直で、直径が10cmに満たない、樹齢は恐らく10年程度のクリ材が用いられている。住居材にしても土木材にしても、こういったサイズの通直なクリ材というのはどの様にして調達できるのだろうか。自然林の中に密度低く生えている木を探し回っていてもとうていそれだけの量は調達できないし、伐採後放置した二次林でもムリだろう。それが可能なのは苗を密植して互いに競争させて育てて、生育段階に応じて順次間引き、若木の時から実を取獲しつつ、時期に応じて間伐をすることである。クリに限らず樹木は疎開したところでは横枝が発達し幹は下部では太いがテーパーが強く、又下部から太い枝があって通直でテーパーの少ない利用しやすい木材は得られない。密度が高い状態で生育させてこそテーパーの少ない丸太を得ることが出来る。クリ苗を比較的密に植え、成長に応じて必要ときに必要な太さのクリを伐り出し、他の木はそのまま存続させる。間伐によって陽樹であるクリの苗が育つほど光が入りこむ空地ができたところにはまたクリの苗を植える。こういった形で集落内では常にクリの苗を植え、常にクリの木を伐る、と言う事を継続して行うことにより、毎年一定程度のクリの実の取獲と、コンスタントな木材供給が可能だったのではないだろうか。こうしたクリの管理はもちろん、集落の中心から遠ざかるにつれて粗になって行く。いきおい、そういったところではクリの木は大きくなるまで残ることになり、「高木のクリ林」となる。三内丸山遺跡から出土したクリ木柱の年輪解析の結果、オープンな公園に植栽されたクリと同じくらいに極めて初期成長が良いが、樹齢が進むとともに年輪幅が狭くなっていき、樹齢100年を超える頃には天然林のクリと同じくらいの緩慢な成長になっていることが示されている（鈴木2016）。これらのことから三内丸山遺跡におけるクリの育成管理がこのように行われていたことが十分考えられる。縄文人は一年生の穀類の栽培を大規模に行うことはなかったけれど、何年、何十年という単位の時間を要する栽培管理を行っていたことになる。

（2）三内丸山遺跡における木材、食料以外の森林資源利用

縄文人は食料、木材として以外の目的に様々な植物の様々な部分を利用していた。それらの実体は今のところよく分かっていないのが現状である。

① 漆

漆製品の制作と利用は縄文文化を特徴づける主要な要素の一つである。三内丸山遺跡からは漆塗容器、棒（?）、漆塗土器など、様々な漆製品が出土している。赤外線分光分析によりこの漆塗膜はウルシ科ウルシ属のウルシ *Toxicodendron vernicifluum* (Stokes) O. Kuntze. の樹液であることが確かめられている（青森県教育委員会2017）。また、下地層や何層にも塗り重ねられた塗膜の構造から高度な漆器製作技術が当時既にあったことが示されている。そして漆液の採取・保管に関わる道具として漆容器土器も出土している。一方、植物としてのウルシは木材では岩渡小谷（4）遺跡（縄文時代前期中葉～後葉）から舟形容器が2点出土し（能城・古代の森研究舎2004）、花粉化石では三内丸山遺跡の他青森県内では青森市内の大矢沢野田（1）遺跡（縄文時代前期）、野辺地町の向田（18）遺跡（縄文時代前期）でもウルシ花粉が検出され、クリと同じく遺跡の開始から終焉までウルシはあったと考え

られている(吉川2006)。ウルシの果実は中果皮部分が固い殻となるので、この部分が遺物として出土することがある。青森県では三内丸山遺跡(縄文時代前期～後期)、岩渡小谷(4)遺跡で検出されている(吉川・伊藤2004、伊藤2006、吉川2005、2010、吉川・吉川2008)。こうしてみると青森県ではウルシの木が縄文時代前期から存在し、樹液の採取が行われ、縄文時代を通して漆製品が生産され、そして利用されていたことが言える。ウルシの木自体は日本には自生が無く、大陸から渡来したものであるが、渡来時期については、鳥浜貝塚で縄文時代草創期、約12,600年前の自然木が確認され(鈴木他2012)、漆製品としては縄文時代早期(約9,000年前)の垣ノ島A遺跡の被葬者の装飾品がある(鈴木2014)。これらの情報を総合すると、ウルシの木は縄文時代草創期に既に日本列島に渡来し、各地で栽培が行われ、漆液の利用が図られていたが、当初は縄文時代前期以降に見られるような赤彩の漆製品の生産は行われていなかったか、あるいは遺物としての出土機会に恵まれるほどには生産されていなかったが、長い年月をかけて縄文社会の拡大とともに漆液生産量の増加と漆製品生産技術の進歩と利用文化の発展があったのだと考えることが出来るのではないだろうか。そして三内丸山遺跡では遺跡成立当初から遺跡内外にウルシを栽培し、樹液を採取し、様々な漆製品を生産し、利用してきた。現在、漆製品の流通と言うことは全く考えていないが、そう遠くない将来において、ウルシや胎の同位体分析などにより、漆製品の生産地と消費地、生産・制作技術の伝播と言うことも分かってくるに違いない。

② 編組製品等

植物の茎や蔓、繊維などを編み組みして敷物や容器、縄紐、編布などを作ることがいつに始まったかは未だ明らかではないが、石器を木の棒に縛り付ける縄、ものを持ち運ぶに便利なカゴなどあるいは土器より以前から使われていたとも考えられる。編組製品の最も古い出土例は縄文時代早期初頭(約10,200年前)の滋賀県の栗津湖底遺跡から出土した断片で、これがどのような製品に由来するのか分かっていない(佐々木2017)。紛れもない編みカゴの出土は佐賀市の東名遺跡(縄文時代早期後葉、約8,000年前)で、ここではおびただしい数のカゴに加え縄、紐も出土している(鈴木2017a)。また、福井県の鳥浜貝塚からは縄文時代草創期の縄が出土している。一方、土器制作時の敷物として使われた編組製品(の破片)のあと(圧痕)を持つ土器は各地の草創期後半の遺跡で知られている(松永2015)。このように縄文文化の早い段階から編組製品等は全国的に作られ、使われていたが、遺物自体の出土は少ない。

三内丸山遺跡では縄文時代前期の完形に近い小型編みカゴ、いわゆる縄文ポシェットが出土したほか、断片ではあるが18点、縄・紐が3点、樹皮製品・樹皮素材が11点、蔓製品3点などが出土している。

それらに使われた素材で最も多いのは竹笹類の程で「竹笹類?」も含めて9点ある。縄文ポシェットのほか3点がヒノキ科(恐らくはヒバ)の樹皮で、他にカバノキ属とヤマブドウの樹皮が使われていた。また、全体器形や用途が不明な赤色漆を塗ったと思われる樹皮製品が6点あり、これらはいずれもカバノキ属の樹皮であった。また、棒や弓と思われる物に巻き付けてあった樹皮を巻いたものはカバノキ属かカバノキ属orサクラ属(保存が悪い資料では両者は区別できない)であった。その他、リョウメンシダの葉柄で編った縄、ヤマブドウの蔓の結束紐なども出土している(小林他2015)。

以上、三内丸山遺跡で編組製品等に利用されていた素材の植物種は竹笹類の稈、ヒノキ科の樹皮、カバノキ属の樹皮、ヤマブドウの樹皮と茎(蔓)、リョウメンシダの葉柄などで、ヒバと思われるヒノキ科樹皮以外は遺跡内外に自生しているものであり、縄文人にとって身近にある素材であったことが分かる。

3 円筒式土器文化圏における森林資源利用

円筒式土器文化圏はおよそ秋田県・岩手県中部以北、北海道石狩低地以南西の地域の縄文時代前期～中期という時空範囲にあるが、これら地域のこれらの時間における森林資源利用の在り方が窺える遺跡、データは決して多くは無い。津軽海峡を挟んで南北のほぼ同じくらいの範囲に広がる地域で、南の本州北部側の森林資源とその利用は以上に述べた三内丸山遺跡でほぼ代表することが出来る。一方、北海道側ではこれに匹敵する資料、データのある遺跡は無く、非常に断片的なデータから全体像を推定するしかない。

(1) 縄文時代前期～中期の円筒式土器文化圏の森林資源

北海道函館市の太平洋側の海岸段丘上には多数の縄文時代前期～中期の遺跡群が広がる。その中で垣ノ島遺跡はコの字型をした大規模な盛土遺構で知られるが、この遺構は縄文時代前期後半に構築が始まり、後期に形成が終わったことが分かっている(函館市教育委員会2017)。この盛土遺構の盛り土層の花粉分析がなされ、検出された花粉量は非常にわずかながらも、樹木花粉はクリが圧倒的であること、草本花粉ではオモギ属やイネ科、タンポポ科などが比較的多いことから、この盛土遺構は遺跡内の樹木としてはクリが生え、草原状に草本が広がって生えている場所から運ばれてきた土で作られたと考えられる(鈴木2017b)。一方、遺跡周辺の海岸段丘上の平地地の自然植生はミズナラを主体とした落葉広葉樹林が推定されており、三内丸山遺跡で居住が開始される前の自然植生と同じようなものであったことも推定されている(鈴木2017b)。すなわち、垣ノ島遺跡が営まれ、盛土遺構が構築されていた縄文時代前期後半～後期の期間中、遺跡内は樹木はクリだけの疎開した人工的景観であったこと、遺跡周辺の自然林と遺跡の間の部分にクリをまじえた二次林が作られていたことが想定され、これは三内丸山遺跡で想定された景観イメージと規模は小さいが基本的に同じであると考えられる。つまり、遺南に位置する垣ノ島遺跡においても三内丸山遺跡と同じ自然植生の下で同じような森林資源が存在し、同じようにその利用が図られてきたと言える。

(2) 円筒式土器文化圏とクリ

三内丸山遺跡ではクリは居住開始とともに増加し、遺跡の終焉とともに消えることが明らかになった。北海道でクリが検出された遺跡は縄文時代前期の木古内町新道4遺跡、鶴岡2遺跡、八雲町コタン温泉遺跡などで、それ以前の遺跡からの出土は無い。縄文時代中期になると出土遺跡数は増え渡島半島南部の他登別市の千歳5遺跡でも多量の炭化したクリ子葉がオニグルミの核片とともに出土したという。そして後期になると小樽市の忍路土場遺跡、石狩低地の千歳市キウス7遺跡で出土するようになり、晩期ではキウス7遺跡や千歳市美々4遺跡に見られる。これらのデータをまとめた山田・柴内(1997)は、「クリは縄文時代前期後半になって土器文化を共有していた津軽海峡対岸の青森県内の

遺跡から北海道の津軽海峡に面した地域の遺跡に持ち込まれ、食糧資源および構造材としての有用性からそれぞれの遺跡で管理・栽培され、人間の関与のもとに時代の経過とともに次第にその分布域を北に拡大し、中期末には北海道中央部西南の登府市付近まで分布域の拡大が完了しており、後期中葉までには小樽から石狩低地帯までの北海道中央部に達したと考えることができる」としている。さらに「人間にあまり利用されることがなかったブナが、約6,000年前頃に北海道に上陸し、現在の自生北限である黒松内低地帯に達したのが約350年前のことであったのに対し、クリが北海道に上陸したのが約4,200-4,000年前の前期後葉で、石狩低地帯に達したのは約3,200-3,000年前の後期中葉のホッケ調式土器の頃である。クリは北海道に上陸してから自生北限地での利用が開始されるまでに約1,000年程しか要して」いないとして、これは縄文人による分布域の拡大であるとした。まさに三内丸山遺跡で居住が開始された頃に同じ土器文化を持つ縄文人によってクリが重要な食料および木材資源として北海道に持ち込まれ、それが1,000年の時間をかけて現在の分布域まで人の手により拡げられたと言うことである。

実はこのことはクリの集団遺伝子解析の結果からも支持されている。本州のクリの集団は多様な遺伝子を持っているが、北海道の集団の遺伝子はその一部に過ぎず、しかもその遺伝子組成は北東北の集団が持つ遺伝子構成に似ていることから、多様な本州の集団（恐らくは北東北の集団）から少数の個体が北海道に渡って、それが現在の分布域全体に拡がったことによる、と言うものである（田中2006）。自然に分布域が拡大される場合は元の集団が持つ多様な遺伝子を持った子孫が新たに拡がるから、基本的には同じ遺伝子構成を持つことになるが、元の集団の一部の遺伝子を持った少数のものだけが新たに拡がる場合は、その遺伝子組成は少数の「選ばれたもの」が持っていた遺伝子だけとなるからである。それまでクリの分布していなかった道南の地に縄文時代前期後葉にクリが持ち込まれ、その有用性から道南の縄文人の手によって急速に広まったと言うことである（鈴木2017a）。

（3）円筒式土器文化と木材・食料以外の植物利用

① 漆

これまでに知られている最古の漆製品は垣ノ島B遺跡の被葬者の装飾品で、縄文時代早期（約9,000年前）とされる（鈴木2014）。縄文時代早期の漆製品は全国でこの一例だけだが、縄文時代前期になると各地で知られるようになり、中期、後期、晩期と、漆製品を出土した遺跡は全国各地に拡がり、縄文時代を特徴づける文化要素の一つとなっている（岡村2010）。北海道でも漆製品出土遺跡は道東、道央、道南と広い範囲でしられ、しかも円筒式土器文化の成立以前、また円筒式土器文化圏外にも数多く分布することから、漆は縄文文化の要素の一つであって、円筒式土器と特に結びついた特徴というものは認められないようだ。

② 編組製品等の素材植物の地域性と円筒式土器文化圏

佐々木（2017）は日本列島の縄文時代の編組製品の素材植物に地域性があることを報告している（図5-121）。それによると九州・中国・四国の「常緑広葉樹の本木植物多用地域」、北陸の「針葉樹と蔓植物多用地域」、関東・南東北・北陸北部の「タケ亜科（笹類）多用地域」、そして北東北・北海道中部～南西部の「落葉広葉樹の本木植物多用地域」である。もちろんこれらの各「地域」の境界は全く

縄文時代編組製品の素材植物の地域性

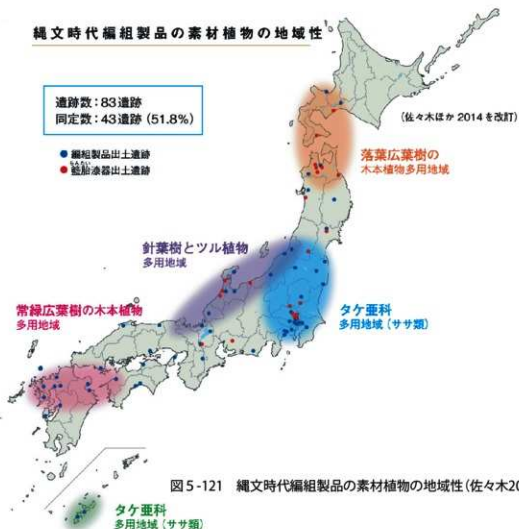


図 5-121 縄文時代編組製品の素材植物の地域性 (佐々木 2017 年より)

厳密なものではなく、また、まだまだデータ量が少ないこともあり、「おぼろげながら見えてきた地域性」と理解するのが妥当だろう。くしくも「円筒式土器文化圏」と「落葉広葉樹の木本植物多用地域」がほぼ重なるように見えて、これも一つの円筒式土器文化の特徴かと考えたくなるが、実際はそうとは言えないようだ。北海道での編組製品の出土は小樽市の忍路土場遺跡、千歳市のキウス(4)、(5)遺跡、恵庭市の柏木川遺跡などわずかしか無く、素材が調べられたものではカエデ属のへぎ材が多く、他にキハダのへぎ材、ヤマブドウの樹皮などで、なるほど「落葉広葉樹の木本植物多用地域」といえるのである。しかし北東北ではと言うと、三内丸山遺跡が素材植物が調べられた遺跡であるが、先に紹介したように、竹笹類が最も多く、それにヒノキ科・カバノキ属・ヤマブドウの樹皮で、北海道の例とは大きく異なり、「落葉広葉樹の木本植物多用地域」とは言いがたい。

以上、見てきたように、三内丸山遺跡および円筒式土器文化圏での植物資源利用の一番の特徴はクリである。クリが重要な食料であり、また木材資源であるというのは円筒式土器文化圏に限ったことでは無く、漆と並んで「縄文文化」をもっとも特徴づける植物資源である。縄文社会のなかでクリは早くから見いだされ、当初は「野生採取」であったのだろうが、早い段階から人の手による「育成管理」により安定して恒常的な生産が計られることにより、より重要な資源とない、縄文社会を支えて

きたのだろうか。

しかし、円筒式土器文化圏では単に重要な食料・木材であるという以上の重みを持った文化要素と言える。円筒式土器文化が成立して広まり、文化圏を形成するなかで、文化圏内での交流の過程で縄文人の手によってクリが海を渡り、クリが生育していない北海道と同じ土器文化を共有する地域に縄文人が積極的に広め、それは円筒式土器文化が終わった後も重要な食料および木材資源としてその地域に引き継がれ、縄文時代が終わった後もアイヌの伝承（知里1953）に見られるようにクリの文化が後世まで引きつがれてきた、と言うところにある。全国各地の縄文社会のなかで重要な資源であったクリの利用体系をもっとも完成させたのが円筒式土器文化と言えるのかも知れない。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 2017 「三内丸山遺跡44 総括報告書」、第一分冊、青森県教育委員会
- 伊藤由美子 2006 「ウルシ属果実の同定」『青森県埋蔵文化財調査報告書第418集近野遺跡Ⅱ』青森県教育委員会：322-331。
- 岡村道雄 2010 「縄文の漆」、同成社。
- 古代の森研究舎・能城修一・鈴木三男2015 「北の谷地区から出土した木材の樹種」『青森県埋蔵文化財調査報告書第557集 三内丸山遺跡42』青森県教育委員会：121-133。
- 小林和貴・鈴木三男・佐々木由香・能城修一2015 「三内丸山遺跡出土編組製品等の素材植物」『青森県埋蔵文化財調査報告書第557集 三内丸山遺跡42』青森県教育委員会：134-151
- 佐々木由香 2017 「縄文時代の編組製品の研究法」工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館（編）『さらにわかった！縄文人の植物利用』：74-93、新泉社。
- 鈴木三男 2014 「縄文人がウルシに出会ったのはいつ？」工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館（編）『ここまでわかった！縄文人の植物利用』：94-113、新泉社。
- 鈴木三男 2016 「クリの木と縄文人」、同成社。
- 鈴木三男 2017a 「鳥浜貝塚から半世紀—さらにわかった！縄文人の植物利用—」工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館（編）『さらにわかった！縄文人の植物利用』：182-201、新泉社。
- 鈴木三男 2017b 「垣ノ島遺跡の植生環境」『史跡垣ノ島—平成25～8年度国庫補助事業による市内遺跡調査等事業総括報告書—』函館市教育委員会：135-138。
- 鈴木三男・能城修一・小林和貴・工藤雄一郎・鮎本眞友美・網谷克彦2012 「鳥浜貝塚から出土したウルシ材の年代」『植生史研究』21：67-71。
- 田中孝尚 2006 「SSRマーカーによるクリ (*Castanea crenata*) 野生集団の遺伝的構造の解析」東北大学生命科学研究科平成17年度博士学位論文。
- 知里真志保 1953 「分類アイヌ語辞典（第1巻）植物篇」（日本常民文化研究所彙報（第64））、日本常民文化研究所。
- 辻誠一郎 2006 「三内丸山遺跡の層序と編年」『植生史研究、特別第2号』：23-48。
- 辻誠一郎・早川裕次・安芸早穂子・吉川昌伸・吉川純子・植田弥生・鈴木茂・昭哉・一本絵里・安室一2017 「三内丸山遺跡の集落景観の復元と図像化」『特別史跡 三内丸山遺跡年報20』：36-51。
- 東郷文化財研究所 2014 「木製品・縄・樹皮の樹種同定と漆製品の塗膜断面観察」『押出遺跡第4・5次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター：92-94。
- 能城修一 2014 「縄文人は森をどのように利用したのか」工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館（編）『ここまでわかった！縄文人の植物利用』：50-69、新泉社。
- 能城修一・古代の森研究舎 2004 「岩渡小谷（4）遺跡出土材の樹種」『青森県埋蔵文化財調査報告書第371集 岩渡小谷（4）遺跡Ⅱ』青森県教育委員会：320-328。
- 能城修一・鈴木三男・網谷克彦 1996 「鳥浜貝塚から出土した木製品の樹種」『鳥浜貝塚研究1』：23-79。
- 能城修一・鈴木三男 2002 「三内丸山遺跡第6鉄塔地区出土木材の樹種」『埋蔵文化財調査報告書第249集「三内丸山遺

- 跡』、第2分冊 青森県教育委員会：99-118
- 函館市教育委員会 2017 『垣ノ島遺跡総括報告書』
- 前田純子・鈴木三男 2002 「三内丸山遺跡第6鉄塔地区出土炭化材の樹種」『埋蔵文化財調査報告書第249集「三内丸山遺跡』、第2分冊 青森県教育委員会：119-139。
- 松永篤知 2015 東アジア先史時代の編物。金沢大学考古学紀要36：15-35。
- 山田悟郎・柴内佐知子 1997 「北海道の縄文時代遺跡～出土した堅果類」北海道開拓記念館研究紀要25：17-30。
- 吉川純子 2005 「三内丸山遺跡第683号住居跡より出土した炭化種実」『青森県埋蔵文化財調査報告書第422集 三内丸山遺跡29』青森県教育委員会：195-199。
- 吉川純子 2010 「三内丸山遺跡第31・32次調査の環状配石墓より出土した炭化種実」『青森県埋蔵文化財調査報告書第494集 三内丸山遺跡36』青森県教育委員会：51-54。
- 吉川純子・伊藤由美子 2004 「青森市岩渡小谷（4）遺跡より産出した大型植物化石群」『青森県埋蔵文化財調査報告書第371集 岩渡小谷（4）遺跡I』青森県教育委員会：293-319。
- 吉川昌伸 2006 「ウルシ花粉の同定と青森県における縄文時代頃の産状」『植生史研究14』：15-27。
- 吉川昌伸 2011 「クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況」『植生史研究18』：65-76。
- 吉川昌伸・吉川純子 2008 「三内丸山（9）遺跡の植生史と沢内の堆積環境」『青森県埋蔵文化財調査報告書第448集 三内丸山（9）遺跡Ⅱ』青森県教育委員会：39-49。
- 吉川昌伸・鈴木茂・辻誠一郎・後藤香奈子・村田泰輔 2006 「三内丸山遺跡の植生史と人の活動」『植生史研究 特別第2号』：49-82。

第5項 三内丸山遺跡の盛土遺構

小林 克

1 縄文土器編年と盛土遺構

1990年代前半にきわめて大きく取り上げられた栃木県小山市寺野東遺跡のような環状盛土遺構は、東関東、北関東各地で発見されている。埼玉県さいたま市馬場小室山遺跡、蓮田市雅楽谷遺跡、千葉県君津市三直貝塚、佐倉市井野長割遺跡などであり、環状集落を加えるとその数は相当に上る。いずれも後期から晩期に営まれた遺跡である。これに対し、東北地方北部から北海道南部にかけての盛土遺構は関東地方よりも早く、前期から中期に登場する。三内丸山遺跡の特別研究として平成22年から23年に行われた研究会が、北海道から宮城県・山形県までを対象としてまとめた資料には、「捨て場」「遺物包含層」や一部「貝塚」を含め、222の盛土遺構がある遺跡が抽出され、そのうち半数以上の122の遺跡が前期から中期、ないしそのどちらか一方の時期に営まれていた。代表的な例としては三内丸山遺跡の南および北盛土と西盛土、秋田県大館市池内遺跡、岩手県一戸町御所野遺跡、北海道函館市垣ノ島遺跡などがある（『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究』会 2011）（註1）。

東北地方北部および渡島半島はこの前期から中期を通して円筒土器により編年される。八戸市是川中居貝塚と五所川原市相内オセド貝塚の層序所見に合わせ、山内清男が円筒土器に言及したのは1929年である。一部の層を二次堆積と見抜き、佐藤傳蔵報告のつがる市田小屋野貝塚のローム層を再堆積層と喝破するなど、現在、盛土遺構を認める際の重要な視点が述べられている（山内 1929、小林克 2010b）。その山内による最初の編年表（図5-122：山内 1936）からは、興味深い傾向を読み取ることができる。編年表であるから地方ごとに特徴ある土器型式を取り出し、その縦横の関係がわかるよう区切られた升目に配列してはいる。しかし、いまだ信濃から九州までの地域、そして北海道では圧倒的に空白が多い。逆に陸奥・陸前・関東では早期や晩期の一部そして後期を除いては、ほぼ型式名が升目を埋めている。そして陸奥では円筒土器下層式、同上層式、陸前では大木式のそれぞれが、細別された記号番号を付すか、細別の可能性を表記し前期から中期にまたがって配列される。その一方、関東では中期後半の加曾利E式に二細別が示されるほかは、同一の型式名が細別されるのは加曾利B式、安行式の後期から晩期の型式である。ことに安行式は1、2式、2-3式、3式と連続する型式を組にした配列である。これは是川中居貝塚の円筒土器の出土状況の解説にもみられるのであって、その各層位から「各種土器が種々の比例で混在」するのと同じ意味の表記ととれる。

すなわち、「盛土」という表現こそ使っていないが、「第二次」の堆積を繰り返した包含層が土器については「種々の比例で混在」させ積み上がるのを、陸奥および関東の遺跡と同じように観察していた可能性を編年表は示している。地層累重の法則にしたがえば上位層に包含されるものは下位層より新しい。しかし、是川中居貝塚では分層された上下層のなかに同じ型式の土器が含まれていた。上下で違ったのはそれが他の土器と混じる割合、すなわち「比例」であり、その現象はあきらかに人為による二次的な堆積によっておこったものと理解された。こうした現象はすでにその場にある土壌を攪拌し再堆積させる、盛土遺構の生成過程で起こる。おそらく安行式の1、2式、2-3式、3式と連続する組の配列表記は、同様の現象が安行式土器を出土する関東地方の後晩期遺跡でも観察され、同じように理解されたからであろう。

そして前者は前期から中期、後者は後期から晩期とそれぞれ分かれることが編年表には示されてい

縄紋土器型式の大別と細別

	近畿	近畿	近畿	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	瓶木 1 # 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 多山	曾根?× (+)	ひじ山 船加		黒島×	歌橋ヶ谷×
前期	石川野×	円筒土器 下層式 (4型式以上)	遺跡 大木 1 # 2a, b 3-6 # 6	遺・花旗下 田・箕山 式・黒旗 跡・横 a, b 十三坊台	(+) (-) (+) (+)	跡ノ木×	国前北内川 1 大湊山	跡ノ森 馬木 1	森?
中期	(+) (+)	円筒上 a # b (+)	大木 7a # 7b 8a, b # 9, 10	五箇台 阿玉台・溝塚 加曾利E # (新)	(+) (+) (+) (+)			黒木 2	曾根 深淵 出来 }
後期	青柳町×	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (-) (+)	滝之内 加曾利B # 安行 1, 2	(+) (+) (-) (+)	西尾×	北白川 2×	津賀上層	御手洗 百早
終期	(+)	亀ヶ岡式 (+)	大洞B # B-C # C1, 2 # A, A'	安行 2-3 # 3	(-) (+) (+)	吉野× # × 佐野×	宮滝× 日下×竹ノ内×	津賀下層	御領

註記 1. この表は仮製のものであって、後日訂正増補する筈です。
 2. (+)印は相当する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
 3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と関連する土器を出し先進者。

図 5-122 山内清男の編年表(1936年)

る。現在なら前中期の円筒土器文化の盛土遺構、後晩期の環状盛土遺構のそれぞれに対応するとみなせるだろう。盛土遺構に累々と積み上がる土層とそのなかに含まれる連続的な変化を示す土器、原点到に近い編年表には層位と型式の関係で東北と関東それぞれの盛土遺構が関わっていた。そして信濃以西、あるいは北海道での編年表の空白は、ほぼ盛土遺構のない地域との対応を示していた。

2 円筒土器文化の盛土遺構研究史

盛土遺構は集落の特定の箇所土器や石器を含む土がうずたかく積み上げられた遺構である。円筒土器文化での研究の歴史は古く明治・大正期に遡る。

青森県の郷土史家として活躍した佐藤藤は現在の黒石市、花巻遺跡での出土土器について述べ蔵骨器説を展開した(佐藤 1889)。その際、津軽各郡には「富士形」の「山形土器」が出土する「土器塚」があることを併せて述べ、同種の遺構が津軽地方には各所にあるとの認識を示した。「富士形」の「山形土器」とは、われわれが現在円筒上層式として認める中期の土器であるが、それをおびただしい量包含する「土器塚」が、青森県内に数あることを説いたことになる。

次いでその7年後には、東京帝國大学理科大学助手であった佐藤傳蔵が現在のつがる市にある田小屋野貝塚を発掘し、その土器の出土状況を詳しく記した(佐藤 1896)。地質学を専攻した佐藤は田小屋野貝塚の土器包含層が沖積期の黒色土壌ではなく、黄褐色を呈する「壙塚層」であることから、土器の作られた年代が洪積期であると示した。この佐藤の認識は先述したように後に山内清男によって否定されることになる。しかし、ローム層の二次堆積した上面を、土器を埋め込んだ地面すなわち基盤面とする見方はその後も続いた。秋田県文化財専門員であった武藤一郎は、能代市二ツ井にある上の岱遺跡の円筒土器上層式の出土状態を報告し、蔵骨器とみなした上で埋まっていた木炭や土器片混じ

りの赤褐色土を当時の地面とみなした
(武藤 1927)。

述べたようにロームの再堆積がはっきりと認識されるのは、山内清男や長谷部言人による是川中居貝塚の調査によってである。しかし、限られた範囲の発掘結果ではその二次堆積層の成因が追究されることはなく、山内の論文も重要な事実を指摘はしたが、その点が注意されて後の調査に十分に受け継がれはしなかった。例えば、戦後に行われた函館市サイベ沢遺跡では、4m以上もの厚く堆積する土器包含層が調査され、その上位には火山灰質や粘土質のローム層が間に黒褐色土層を挟んで1m以上堆積していた。分層された層位が自然に積もったとは見られなかったようで、いくつかの層を7つの

表1 サイベ沢遺跡第一地点の層序

層位	註記	厚さ (cm)	遺物	文化層	円筒土器 対比
I	黒色土	13			
II	火山灰質黄褐色土層	26	有		
III	粘土層	33	有	第VII	
IV	黒褐色泥木炭片土	9	有		
V	褐色泥木炭片土	47	有	第VI	
VI	含砂火山灰層	9			
VII	褐色泥木炭片土	6	有		
VIII	粘土層	3	有		
IX	帯黒褐色含砂土	28	有		
X	粘土質層	2	有	第V	
X I	泥木炭片多量粘土質層	6	有		
X II	粘土質層	4	有		
X III	泥木炭片多量粘土質層	5	有		
X IV	粘土質層	6	有		
X V	泥木炭片多量粘土質層	47	有	第IV	
X VI	泥木炭片少量粘土質層	10	有		
X VII	火山灰質層	3			
X VIII	泥木炭片多量粘土質層	45	有	第III	
X IX	粘土質層	16			
X X	泥木炭片多量粘土質層	30	有	第II	
X X I	泥木炭片多量粘土質層	32	有		
X X II	黒色粘土層	32	有	第I	
X X III	粘土質ローム層	6			
X X IV	黒褐色粘土層	6			
X X V	褐色砂層 (海江砂)	19			
基底	段丘礫層				

(細線は火山灰質ローム層、粘土質ローム層、褐色泥木炭片土)

「文化層」と東ねた点に人為の働きを認めてはいる(表1)。しかし、その目的は土器の編年を総合的に理解しようとすることにあり、ローム層の再堆積の成因にまで言及はしていない(市立函館博物館 1958)。

サイベ沢遺跡でとらえられた7つの「文化層」に振り当てられたローマ数字は、そのまま渡島半島の前期から中期の編年上にサイベ沢I群~VII群と用いられることになる。この時期は層位的に良好な土器の出土で地域ごとの編年を組み立てることを目的とした調査が盛んになされていた。そして、同様の目的の調査は青森県側でも行われた。つがる市石神遺跡の調査である。しかし、その報告は佐藤傳蔵の田小屋野貝塚と同質の誤解を含んだ内容であった。報告では土器を多く含む遺物包含層の断面に4ないし7枚確認された無遺物の黄褐色土層を、岩木山起源の降下火山灰とみなし、包含層が人為の影響を受けずに整然と積み重なったとしたのである。そして、その結果、包含される上層式土器についても黄褐色土層を目安としてd式を認めた上でe式を追加し、さらには最花式をf式と呼び代えて円筒土器の中期一系論が展開された(江坂編 1970)。

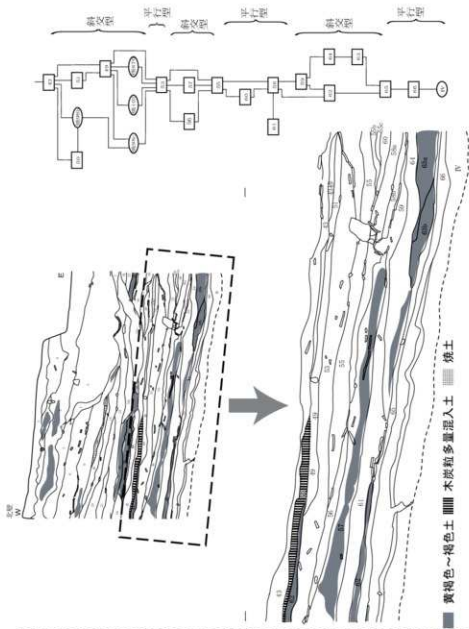
サイベ沢遺跡では二次堆積層も「文化層」とまとめることで、分層される各層ごとの先後関係に不整はあっても、「文化層」相互の先後は正しい関係で示すことができた。人為的攪乱の結果に起こる二次堆積、すなわち時間的な不整関係が層の束ねの操作で整えられたのである。こうした操作は津軽半島突端の外ヶ浜町中の平遺跡の調査報告(青森県教育委員会 1975)、津軽海峡対岸の福島町館崎遺跡の調査報告(福島町教育委員会 1985)でもなされた。しかし、石神遺跡ではそうした操作をすることなく、分けられる包含層中すべての層を一次堆積として、e式以降の円筒土層次に次々細別名のアルファベットを追加していった。円筒土器文化のなかではきわめて特異な層位所見だったし、その型式

設定は広域編年に照らす際の龍體の大きな要因となった（小林克 2010b）。なお、石神遺跡やその後の中の平遺跡では、佐藤部以来注目された円筒土器の出土状態に視点を合わせた報告がなされている。石神遺跡では「使用中の品を祭った」ようにとらえ、中の平遺跡では土器の出土状態をパターンとして分けて層中の人為の動きをみている。

円筒土器文化の盛土遺構の研究史には、土器の出土状況を端緒として墓との関連が考慮された経緯がある。花巻遺跡で出土した土器が蔵骨器か否かが出発にあったが、その後、五所川原市オセドウ貝塚（註2）、八戸市是川中居貝塚、サイベ沢遺跡で人骨が出土し、墓との関わりは抜きがたく考えられるようになった。近年の調査でも館崎遺跡の盛土中から人骨の出土がある（北海道埋蔵文化財センター 2017）。また、土器をはじめとした遺物が、焼土や木炭を多く混じえた褐色ないし黄褐色土層と絡んで出土することをめぐる認識も要点にある。元来、洪積世に属する堆積物でありながら土器を伴うことは田小屋野貝塚の調査以来に注意されていたものの、二次的な堆積によることがはっきり示されるまで30年余りが費やされた。盛土遺構の本質に関わるこの二次堆積層の認識は、その後、海峡を挟んだ地域の編年対比の目的で「文化層」として東ねる操作や、逆に型式細別をめぐって降下火山灰と見えずなど、土器編年との関係が中心となって推移し、土や遺物の堆積に人為を認める遺構認識とは直接に結びつかない状況が続いた。1970年代にやっと一定の広さをもった範囲が調査され、土器の廃棄/遺棄パターンの側面に焦点を合わせた調査がされたが、それも遺構認識としては限定的だったといえる。盛土そのものを遺構として認識するに至るのは、1990年代の岩手県御所野遺跡の調査（高田 2010）、そして三内丸山遺跡の調査（岡田 2014）からである。これ以降、遺跡の全体構造のなかでその性格をとらえようとする目的が明確になり、近年の調査および研究もその延長に位置している（「三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究」会編 2010・2011）。

3 盛土遺構に関わる堆積類型、削土と盛土

盛土遺構に関わる土の堆積類型は基本的に二つに分けられる（図5-123左）。通常、遺跡の基本的層位は表土から基盤まで平行に重なる複数の層で示され、図上段のうち7層と6層、2層と1層の層界はそれぞれ他の層と接することはなく単純に先後の関係に置かれる。一方、自然地形の起伏、地面に加えられるなんらかの人為などで、本来平行であるべき層界が斜めに切れ、堆積関係図ではその順が複雑で示される場合もある（3層と5層、4層と5層）。この場合であっても分層される各々の層の堆積は整序的に先後の関係を示す。すなわち、5層と4層、4層と3層、5層と3層の層界を示す線は互いに接するが、堆積は5層→4層→3層の順であることはそれぞれが平行である場合と同じである。これを「Ⅰ類：平行型」と呼ぶ。平行型では整序的な堆積であることにしたが、人為が働いたとしても層序への影響はきわめて少なく見積もられ、含まれる遺物も整った時間的關係におかれる。これに対し、下段では全体の堆積構造は上段と変わらないものの部分において細別された層の堆積関係は複雑な様相を表す。下段は上段の図のうち6層が3分、5層が2分、3層が4分された状態を示すが、堆積関係図に整理すると整序的な関係は細分されない1層と2層、そして細分されても下層が分層されない6a～6c層と7層の関係にとどまり、3a～3d層、4層、5a・5b層の関係は、最大6条の複雑で示されるほどに複雑化する。頻繁な人為が繰り返されその影響が堆積に強く及んだ場合を想定できる。これを「Ⅱ類：斜交型」と呼ぶ。不整序な斜交型では堆積の先後関係を決められない部分が生じる。こ



「三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究」会報第2010「三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究」

図5-123 「盛土遺構」に関わる層相類型と三内丸山遺跡西盛土Aトレンチ断面

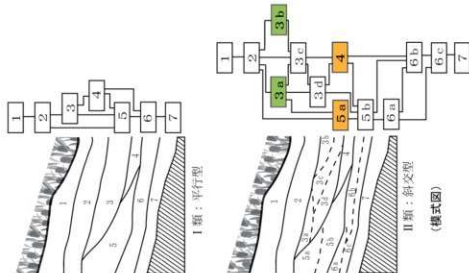


図5-123

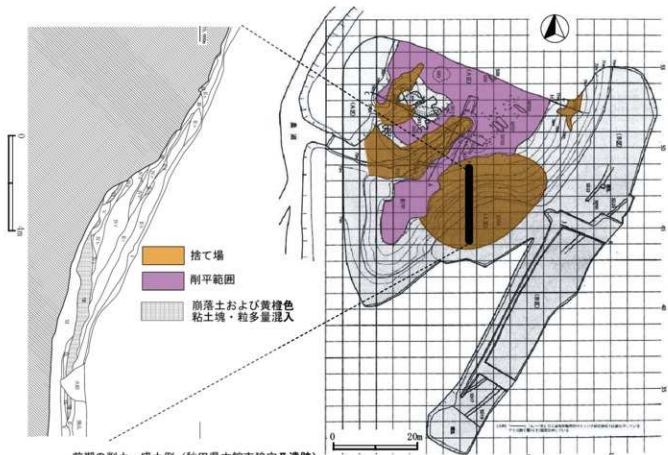
の場合には3aと3b層、4と5a層がそうした関係にある。したがって含まれる遺物も層位では時間的な先後関係が決められない。中居貝塚で山内によって指摘された「第二次に堆積し「種々の比例で混在」する土器の状況は、こうした不整序な堆積層が土器を包含する状況を指し示し、サイベ沢遺跡で「文化層」として束ねた層位把握は、不整序な斜交型を全体構造の変わらない整序的な平行型へ還元したとらえ方である。まとめ上げられた「文化層」同士は時間的に明らかな先後関係を示すのであって、遺物は混在しても「文化層」でまとめられた群は堆積に応じた先後の時間におかれる。

基本的な堆積類型は以上のように整理されるが、実際の盛土遺構では平行型と斜交型とが交互に現れることがある。図5-123右は平成22年度に調査された三内丸山遺跡西盛土A1区北壁の断面である。断面の上半部では円筒上層式が出土し、下段に拡大した43層以下では円筒上層a₁式および下層d₂式が出土している。上層a₁式は58層および59層に多量に含まれ、かつ木炭の混入が非常に多い。63層は第Ⅵ層地山土の大規模な二次堆積層であり、上面および層中からは下層d₂式が出土している（斉藤2010）。

断面図に表された43層以下は層界の線が傾斜面に沿って長く引かれ、薄層が整序的に重なって見える。しかし、示された堆積関係図によれば、実際は50～57層の間では50層と51層ないし49層、56層と57層、また、62層と64層ないし63層のように先後の関係を決定し得ない層位があることがわかり、かつ49層と53層との間には焼土や埋設土器が存在する。これらは斜交型の層相と見て良い。そしてその間を53層、55～58層、65・66層のような並行型の層位が繋いでいる。すなわち、A1区北壁の断面には前期から中期に至る比較的短い間にも、人為が頻繁にはたらいだ時期とその休止期とも呼ぶべき人為のはたらくの希薄な時期とが、交互に表れているとみることが出来る。遺物の子細な包含状況はあきらかではないが、おそらく、斜交型に比較し並行型の層では含まれる遺物量も少ないだろう。

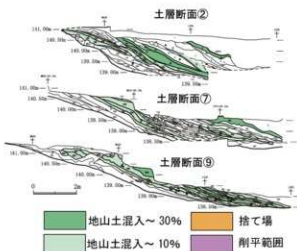
田小屋野貝塚の「壇母層」、中居貝塚の「第二次」の堆積層、石神遺跡の「降下火山灰」層、サイベ沢遺跡の「火山灰質ローム層」「粘土質ローム層」、そして三内丸山遺跡西盛土A1区の大規模な二次堆積層など、円筒土器文化の盛土遺構では地山土が逆転した褐色ないし黄褐色の再堆積層が認められる。塊状といえるほどの厚さの場合すらある。こうした多量の地山土の再堆積は、露出した地山面の掘削ないし削平が行われたことを示す。堅穴建物、フラスコ状土坑の構築に伴う掘削をその供給因とすることもできる。一定期間繰り返された遺構掘削の排土が、より低い場所へ投棄された結果である。しかし、層をなす広い面積が覆われること、また、地山を構成する異なる褐色ないし黄褐色土が混濁するよりは、「壇母層」「降下火山灰」層、「火山灰質ローム層」「粘土質ローム層」などと呼ばれるように均質な性状の土である場合もある。むしろ台地上の広い地山面が一気に削平されその排土が堆積したとみられる場合である。

このような地山面を広く削平する例は円筒土器の分布する地域では前期以来、いくつかの遺跡で認められる。図5-124上段は秋田県大館市にある狼穴Ⅱ遺跡の事例である（秋田県教育委員会2010）。南側に突き出した台地に西側から2条の沢が入り、その沢および南東側斜面の凹地および東側斜面の一隅に「捨て場」が認められ、円筒下層a₂式を中心とした多くの土器および石器類が出土した。それらの遺物は南東側斜面凹地の「捨て場」ではⅧ層・Ⅸ層から出土したが、このうちⅧ層は黄褐色粘土塊・粒を多量に含む層であった。これらの由来は台地上に求められたが、台地上に同時期の遺構としては2棟の堅穴建物跡とフラスコ状土坑1基があるのみであった。斜面下の黄褐色粘土塊・粒の供給元と



前期の削土・盛土例（秋田県大館市狼穴Ⅱ遺跡）

台地上面にある平安時代の竪穴建物跡は壁の立ち上がりが残っているのに対し、2棟ある縄文時代前期の竪穴建物跡は、削土によって壁の立ち上がりが失われている。斜面の捨て場には地山の再堆積土が塊状に堆積し、削土は一気に行われたと推定される。



漆下遺跡ST101捨て場土層断面図

後期の削土・盛土例（秋田県北秋田市漆下遺跡）

西側台地の広い削土範囲は周囲に4ヶ所の「捨て場」を伴っている。そのうち東側の「捨て場」では、地山土を10%ほど混入する土と30%ほど混入する土とが、黒～暗褐色の土と斜めに互層をなして堆積する。地山土が塊ではなく粒状に混じり堆積を繰り返すことから、削土は徐々に行われたものと推定される。

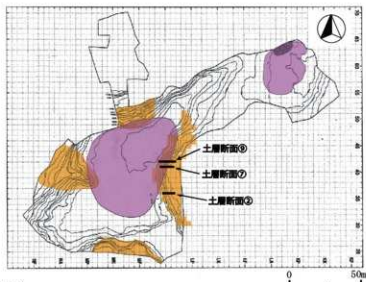


図5-124 前期・後期の削土・盛土例

しては少なすぎる数である。また、この2種の竪穴建物跡は柱穴および跡跡が検出されただけであり、竪穴自体の壁の立ち上がりは確認できていない。これに対し、同じく台地上に確認された平安時代の4棟の竪穴建物跡のうち、縄文時代前期の竪穴建物跡の中間に位置する1棟は45cmほどの壁の立ち上がりがあり、残されていた。報告では前期の竪穴建物跡の壁の立ち上がり認められなかったことに対し、現代の宅地や耕地造成の削平で失われたとしているが、平安時代の竪穴建物跡の壁は残されているのだから、削平は平安時代以前にもあったことになるだろう。南東側斜面凹地での縄文時代前期の遺物を多量に含んだ土が同時に黄橙色粘土塊・粒を多く含むことを考えれば、その時期は前期の間と考えるのが適当である。すなわち、台地上に前期の集落が営まれそれが廃絶する時期に、竪穴建物跡を含む範囲が広く削平されたわけである。

台地上面に一定の削平範囲が認められる例は、円筒土器文化に後続する後期にもある。円筒土器が分布する地域では後期前葉に大規模な環状列石が造営され、列石で囲まれる内部が大きく削平されることが知られている。その伝統のもとに考えられるのが、図5-124下段に示した秋田県北秋田市にある漆下遺跡である。遺跡は東西両側に比較的広い面をもつ段丘上にあり、うち西側の面では台地上面に多数の建物跡や墓を含む土坑などの遺構群が見つかり、それを囲む斜面4か所に多量の遺物の「捨て場」が見つかった(秋田県教育委員会 2011)。台地上面は北東側に偏って3,700㎡ほどの範囲が大きく削平されていたが、そのなかには北東-南西に長軸をもって整列し、明らかに墓と判断される土坑が20基あまりある。また、上面に配石を伴う土坑例もある。したがってこれらの遺構は台地上面の削平後に構築されたことがわかる。斜面の「捨て場」では地山土を最大3割程度含む土が薄層で堆積し、そのなかに多量の遺物も包含され、かつ一部に焼土遺構が形成されていた。全体的には関東の環状盛土遺構にも共通する遺跡構造である。

これらの例は斜面に多量の遺物があり「捨て場」として認識された例である。前期の狼穴Ⅱ遺跡の場合には削土とその排土の再堆積が短い間に行われたのに対し、後期の漆下遺跡の場合には削土と再堆積が何度も繰り返された状況を示す。しかし、どちらも堆積関係図を描けば前述の斜交型にあたる堆積が含まれ、盛土遺構と基本的に違いはない。漆下遺跡の場合には削土され造成された平坦面に土坑墓群が作られているが、狼穴Ⅱ遺跡と同様、前期の台地斜面下の沢に複数の「捨て場」が見つかった大館市池内遺跡では、削土され平坦になった台地上面に44基の土坑墓列が作られている(秋田県教育委員会 1997・1999、小林 1998、宇田川 2009)。以前からの遺構を含んで削平しその排土を盛り立てる、ないし斜面下に投棄することにはいくつか理由が考えられるが、共通して見えてくるのは墓域の造成である。また、排土の投棄される斜面ないし盛土のなかでの焼土遺構の存在からも、それらの場での儀礼行為が想定されるが、当然ながら墓域に密接な関係をもつ行為だったと考えられる。

4 三内丸山遺跡の盛土遺構と大型建物跡

三内丸山遺跡全体の地形は、現在縄文時遊館のある台地西側に高位部があり、東に向かい旧野球場予定地から、北の谷、南の谷それぞれの谷頭付近まで斜面が続く。そしてそれ以降、南縁は南の谷に向かう斜面、北縁は沖館川に面した崖で画された、上面幅100m前後の東西に長い台地が続く(図5-125)。しかし、西側高位部から旧野球場予定地までの斜面には、地滑りなどの急激な力を除いては自然にはできない起伏が現れている。これまでの発掘調査の結果と照合すれば、盛土遺構そして伴う削



図 5-125 三内丸山遺跡発掘前地形と盛土および推定削土範囲

土範囲は、そうした起伏ない等高線の変化がある部分にはほぼ相当することがわかる（小林克 2003）。

西盛土の南にはその付近で最も標高の高い35mの地点があり、そこから北50～100m強の範囲にイチジク状に伸びる平坦面がある。等高線で示される平面形は自然のままではなく、緩い斜面が削土され押し出された結果の地形と見られる。西盛土の範囲はその削土範囲の東側斜面にとりつくようである。南盛土は南の谷の谷頭に近い標高20mの小丘状高位部を取り込む範囲にあるが、その西側には等高線が大きく開いた部分がある。この範囲から削土された土が東側に押し出された結果、南盛土が作られたと推定される。北盛土は北の谷の西に接した位置にあるが、そのさらに西側では17.5mの等高線が大きく東に突出する。削土され北の谷に向かい土を押し出した結果、北盛土が形成されたとみられる。いずれも薄層が重なり長い時間をかけて削土と盛土が繰り返されたことがわかる。

旧野球場予定地の東側、北の谷から東に向かい平坦面が長く続く地形でも、特に台地の縁にはわずかながらも等高線が不自然な開きをもつ部分がある。そうした場所では若干なりとも削土・盛土と同様の地形改変が行われた可能性がある。例えば旧野球場予定地内の東側一面の平坦面上には100基ほどの土墳墓や50基あまりの埋設土器、10基の竪穴遺構が見ついている。その一つ第1号竪穴遺構の埋土は盛土遺構同様の薄層の堆積で占められていた。西あるいは南北両盛土ほどに大きな地形改変が行われたものではないにせよ、同じような意味をもって遺構が形成された可能性がある。この1号竪穴遺構周囲には、直径70～90cmほど、深さは最大90cmに達する大型柱穴の掘立柱建物跡5基が付随する。一部竪穴遺構と重なって柱穴が失われてはいるものの薄層の重なる埋土状況から、竪穴遺構が一時ではなく何度かにわたり押し広げて作られたことがわかる。竪穴遺構と掘立柱建物跡は併存して関連しながら機能した遺構であろう。そして周囲には土墳墓群が広がる。盛土同様の薄層が堆積する竪穴遺構と大型の掘立柱建物跡群、そして周囲の土墳墓群と埋設土器群、これらからこの範囲が墓域として利用されたことの可能性が見えてくる。

広く知られるように北盛土の北西側には高さ14.5mに復元された巨木の建物跡がある。そして、それを含め周辺には7棟の大型建物跡がある。また、旧野球場予定地内では北盛土と南盛土に挟まれた位置に18棟の大型掘立柱建物跡が東西に列をなして配置する。その東側延長は前述の野球場予定地内東側一面の土墳墓群のうち、墓道を挟んだ二列の墓列の間に続く。すなわち、盛土遺構もまた大型の掘立柱建物跡群と密接な繋がりを持ち、旧野球場予定地内東側一面の遺構群との関係で総体として墓域に関わっていた可能性が強い。

5 縄文時代の「記念物」

1950年代の駒井和愛による「巨石記念物」から、石以外を用いた縄文時代のさまざまな遺構まで「記念物」の名でくっつけて呼ぶようになったのは、20世紀も終わり近くになってからである（小林克 2010a）。小林達雄は「記念物・「円」や「方形」に世界観込め」とタイトルした一文の冒頭、「日常的な衣食住とは直接結びつきやうのない一風変わったものが縄文列島に散見…（中略）…、いずれも規模が大きく、一見して目立つという特徴があり、これを記念物と呼ぶことにしている」（小林達 1997）と述べた。具体的には多数の石を集めた配石遺構や、大量の土を動かして積み上げた盛土、円や方形に建てた巨木柱遺構、そして丘の上に溝を掘り巡らせ土塁を沿わせた濠跡を、それに敷き上げる。

このうち、石を集めた配石遺構、ことに大きな環状を呈する遺構は、小樽市忍路環状列石や鹿角市

大湯環状列石のように縄文文化に早く知られていたが、そのほかは1980年代、90年代になって初めて存在が確認された遺構である。冒頭にあげた寺野東遺跡の環状盛土遺構、石川県金沢市チカモリ遺跡の環状木柱列、三内丸山遺跡の4本の巨木柱遺構、北海道苫小牧市静川遺跡の環濠などを指す。わずか40年前には縄文文化に想像すらつかなかった遺構である。「日常的な衣食住とは直接結びつ」かない、という評価は、素朴な狩猟・採集経済段階にある縄文文化のイメージにはそぐわない、規模の大きさと示威性を指してのことである。そのイメージの枠では作られた目的を推し量ることは不可能であろう。むしろ、従来の縄文文化のさまざまな枠組みを変えなければ理解することはできず、90年代には、それまでになかったランド・スケープ論や階層化社会論が登場し注目を浴びることになる。

普通、「記念」という言葉には後世への記憶伝承という意味が含意される。たとえ文字で記録されなくとも、作られた様式で何を象徴しいつ頃に作られたかを後世から推測することができる。したがって構築時には目的とするある形があり、その完成で果たすべき役割が十全に実現される、というごく一般的な理解がある。ところが、小林達雄の一文では造営そのものが記憶伝承の行為であると説く。共同作業による集団の連帯感、それが世代を超えて継続されるとき先祖・子孫を包む同族の観念、それらを確認するために縄文時代の人々が作り続けたのが「記念物」である、という。そして、寺野東遺跡の環状盛土遺構は幾枚もの土器包含層の重なりで「後期中葉から晩期前葉にいたる」、「350年以上の」時間の長さが推定され、世代を継ぐ構築物の代表としてとらえられている（小林達 前掲）。

6 まとめ

寺野東遺跡では環状盛土遺構を中心に、呪術的な祭祀を示す遺物が数多く出土している。437点の石剣・石棒類、293点の土偶などである（江原・初山2007）。盛土とともにこれらの遺物は、遺跡の性格を特徴づけている。そしてまた、三内丸山遺跡でも南北盛土を中心に2,000点以上の土偶出土が知られている。寺野東遺跡同様に盛土で行われた儀礼行為を象徴する遺物である。円筒土器文化が終わるころ、中期後半は土偶が少なくなるが盛土遺構は作り続けられる。この時期には繰り返し竪穴建物を作りつつ、その上に盛土を形成する遺跡が北海道木古内町幸連5遺跡や秋田県能代市烏野遺跡で見られる。岩手県御所野遺跡もその例である。東関東では廃屋墓が隆盛する時期にあたり、これらも廃屋墓に関係する盛土遺構と考えて良いのかもしれない。ただし、既に述べたように三内丸山遺跡での盛土遺構は、大型の掘立柱建物跡と関係しつつ存在した。御所野遺跡、烏野遺跡とも同様の掘立柱建物を伴う。

さて、図5-126には18世紀後半における、アラスカ南部ヤクタート湾、ポート・マルグレーブ周辺でのトリングットのグレーブ・モニュメントを引用した。スペイン海軍Malaspina率いる世界周航探検隊に加わったTomás de Suriaが描き、アメリカ、スミソニアン研究所の人類学者Fredeica de Lagunaが引用した図である。探検隊の記録によれば、モニュメントはヤクタートの土地の名を冠した一族、Ankauの墓地にあり、Iukitchetchと土地の名で呼ばれるクマのトーテム・ポールを中央に、3つのモニュメントからなる。中央のクマのトーテム・ポールがその前足の爪で吊り下げる箱のなかには氏族の長、Ankauの父親の火葬された灰と遺骨が小さな籠に入れて納められている。松の木で作られたトーテム・ポールは高さ10.5m以上あり、東を向き、歯と爪、そして頭のとっぺんが白と黒で塗り分けられているほかは、全身がベンガラで赤く塗られている。その両側に立つ4本柱の上に

設けられた台には、現在の長の息子2人の遺灰・遺骨が入った籠を収めた箱がある。そのそれぞれの下にも少量の材で覆われた箱があり、やはり火葬された骨、頭蓋骨片や脊椎骨を納めた籠が入っている。モニュメントの前面は溝が掘られ、火葬に用いられたと推測される燃え残りの材木がある (Laguna 1972)。図にはモニュメントを見上げる探検隊とそれを案内したトリンギットが描かれている。探検隊は銃を持ち、トリンギットはカワウソやテン、狼などの毛皮で作った肩マントをまとい、頭は葛で編んだ紋章入りの帽子 (crest hat) を被った姿である。

ダートマス大学の人類学者Selgei Kanによれば、火葬したのちの有力者の遺灰・遺骨を柱で支えた高い位置の納骨堂に収める習俗は、広くトリンギットの社会で認められるという。そして、暫時の保管後、高所に納めるのが一連の葬儀の最終段階にあり、その際、破滅的ともいえる財物の大量消費が行われる、それがポトラッチ (potlatch) である (Kan 1989)。

18世紀のアラスカ南部、トリンギット社会での墓地景観を、そのまま三内丸山遺跡に投影することができないことはいうまでもない。しかし、旧球場予定地東側に続く平坦面には「記念墓列」(阿部 2002/すなわちgrave monuments) が続き、その間の墓道を通った先に大型の掘立柱建物群が盛土遺構とともにある状況には、共通した部分があるのではないか。盛土遺構や大型掘立柱建物群を「記念物」と呼んで、共同作業による連帯感や先祖・子孫を包む同族の観念など、集団への帰属意識を確認・維持するために造られ続けたと説明するだけでは、もはや追究は不可能である。三内丸山遺跡の調査成果からすれば、盛土遺構は大型掘立柱建物跡、堅穴遺構、そして土壘墓群 (列) と道との関係を抜きがたく考えなければならず、それぞれの同時性や集落自体との関わりを具体的に究めた上で意味を明らかにする必要がある。



Grave monuments of the family of the current chief of Port Mulgrave (Yakutat area), 1791. Aquatint by Suria. Museo Naval, Madrid. De Laguna 1972:978.

図 5-126 トリンギットのグレイブ・モニュメント

註1) 研究会では長さ400mを越えるとまでいわれ、それまで円筒土器文化圏で最も長大な盛土遺構とされた、秋田県北秋田市狐傍遺跡を集成に加えなかった。理由は二つある。一つは盛土遺構と報告した文献に、阿仁川の自然堤防の可能性をうかがわせる記述があること、もう一つに第三者がそれと判断するにたる断面図や、断面写真の掲載がないことである。その成因など他例と比較検討できる資料の不備は、盛土遺構であるか否かの判断に致命的な欠落といわざるを得ない。

註2) オセドウ貝塚では既に大正十二年(1923)に、30~40才の成人骨1体が発掘され、詳細な報告がなされていた(中道1924、穴倉1924)。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1975 「中の平遺跡発掘調査報告書」青森県文化財調査報告書第25集
- 秋田県教育委員会 1997 「池内遺跡 遺構篇-国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-」秋田県文化財調査報告書268集
- 秋田県教育委員会 1999 「池内遺跡 遺物・資料篇-国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-」秋田県文化財調査報告書282集
- 秋田県教育委員会 2010 「狼六Ⅱ遺跡-一般国道7号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ-」秋田県文化財調査報告書460集
- 秋田県教育委員会 2011 「漆下遺跡-森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅢ-」秋田県文化財調査報告書464集
- 阿部義平 2002 「縄文時代の道と記念墓列の研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報5』青森県教育委員会
- 宇田川浩一 2009 「縄文時代前期の集落」『2009年度山形大会研究発表資料集』日本考古学協会
- 江坂輝弥編 1970 「石神遺跡」ニュー・サイエンス社
- 江夏英・初山孝行 2007 「寺野東遺跡-環状盛土をもつ関東の縄文集落」日本の遺跡23 同成社
- 岡田康博 2014 「三内丸山遺跡-復元された東北の縄文大集落-」日本の遺跡48, 同成社
- 小林達雄 1997 「記念物-「円」や「方形」に世界観込め-」『縄文人』25, 日本経済新聞 (9月27日)
- 小林 克 1998 「縄紋社会における「祭祀」の一構造」『季刊 考古学』64, 山嵐園
- 小林 克 2003 「地形の判読」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』17
- 小林 克 2010a 「縄紋時代の記念物」『遺跡学研究』第7号, 日本遺跡学会
- 小林 克 2010b 「円筒土器文化の盛土遺構」『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究-予稿集-』
- 佐藤 郡 1889 「陸奥国津軽郡花巻村ヨリ出テタル大甕」『東京人類学会雑誌』45
- 佐藤傳藏 1896 「雄略中石器時代の遺物」『東京人類学会雑誌』127
- 斉藤慶史 2010 「三内丸山遺跡西盛土の調査」『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究-予稿集-』
- 「三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究」会編 2010 「三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究-予稿集-」
- 「三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究」会編 2011 「三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究-資料集-」
- 穴倉宜孝 1924 「青森縣北津軽郡相内村より人骨発見」『人類学雑誌』39-1
- 市立函館博物館 1958 「サイベ沢遺跡-函館市郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘報告書-」
- 高田和徳 2010 「御所野遺跡盛土遺構の調査」『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究-予稿集-』
- 中道等 1924 「二、北津軽郡相内村ノ遺跡」『史蹟名勝天然記念物調査報告 第一輯』青森縣史蹟名勝天然記念物調査會
- 福島町教育委員会 1985 「館崎遺跡-円筒土器文化における「土器塚」の調査-」
- 北海道埋蔵文化財センター 2017 「福島町 館崎遺跡」北理調報333
- 武藤一郎 1927 「羽後山本郡荷揚場村上の倍石器時代遺蹟」『秋田考古会誌』1-4
- 山内清男 1929 「関東北に於ける縄文土器」『史前学雑誌』1-2
- 山内清男 1936 「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』1-4
- Fredica de Laguna 1972 "Under Mount Saint Elias : The History and Culture of the Yakutat Tlingit", Smithsonian Contributions to Anthropology Vol. 7, Smithsonian Institution Press
- Kan, Selgei 1989 "Symbic Immortality : The Tlingit Potlatch of the Nineteenth Century", Smithsonian Institution Press

第6項 西日本からみた円筒土器文化

玉田 芳英

円筒土器文化が栄えた縄文時代前・中期には気候が温暖化し、自然の恵みを最大限に利用した生活を営んでいた。特に東日本では人口の増加もみられ、遺跡数が増大し、集落の規模も拡大する。日本各地で展開していた多様な文化の中でも、円筒土器文化は独特で個性の強い文化として知られ、三内丸山遺跡が代表するように大規模な集落が栄えた。それに対し、西日本では遺跡数も少なく、集落の規模も小さいことが多い。一見全く別物に見える両文化ではあるが、逆に接点の少ない西日本縄文文化の観点からみることによって、円筒土器文化の特質や、広く日本全体で社会の動きが浮かび上がってくる可能性もあろう。そこで、本稿は土器と土器圏、集落、生業などの観点から、両文化を比較してみることにする。なお、ここで言う西日本とは、土器の分布圏に基づき、おおむね北陸・東海地方の西部から、近畿・中国・四国地方を指すものとする。

1 土器と土器圏

円筒土器とは言うまでもなく、器形が樽形か円筒形となることを特徴とする土器型式である。縄文や熱糸文を多用するが、装飾性が少ない前期の下層式と、器形に変化がみられ、装飾化する中期の上層式に大きく分けられる。円筒下層式では一貫して胎土に植物繊維の混入があり、関東地方等では前期後半には繊維を混入しなくなるのは好対照をなす。西日本では、そもそも胎土に繊維を混入することはない。円筒土器文化圏は北海道から東北地方北部にわたり、北端は石狩平野で、南側の境界線は既ぬ秋田市-田沢湖-盛岡市-宮古市を結ぶ線とするのが一般的である。

円筒土器自体、その器形や装飾がきわめて特徴的で独特のものであるが、細かな地域性も明らかになってきている。他地域の土器との関係では、中期後半になると東北地方南部の大木式との折衷土器が出現し、交流の一端がうかがわれるが、全体としてみれば独自性が非常に強いものである。他地域との搬入・搬出土器という観点からみれば、遠くは北海道礼文島の土泊3遺跡で、円筒上層c・d式に相当する土器が多数出土した。南方との関係では、円筒土器文化圏でも大木式土器が出土するが、客体的な存在である。一方、山形県に分布する前期末の吹浦式土器は、円筒土器と大木式土器とが融合して成立した土器であり、同様の例は北陸地方でもみられる。石川県真脇遺跡では、円筒下層d式の影響が認められる土器が出土しており（能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団1986）、富山県朝日貝塚からも円筒下層式の影響を受けた土器が出土している（青森県史編さん考古部会2002）。これらは円筒土器文化圏からの搬入品とは言えないものの、日本海沿岸地方での活発な交流がうかがわれる。他地域からの搬入土器では、前期末の円筒下層d式期に北陸地方の土器が少量出土しており、前期末から中期初頭にかけては、秋田県などで関東地方の五領ヶ台式土器などが出土する時期があることが指摘されている（青森県史編さん考古部会2002）。

西日本で、円筒土器文化の時期に分布する土器は、前期では北白川下層式系土器と羽鳥下層式系土器で、中期には船元・里木式系土器、次いで北白川C式系土器である。その分布圏は、九州地方を除く日本西部という広範囲にわたる。近畿地方を主として分布する北白川下層式はⅠ～Ⅲ式に細分されており、その後には大蔵山式が続く。これらは、貝殻条痕や縄文を地文として連続爪形文を施す土器や、爪形文を施した細い突帯をもつ土器である。瀬戸内地方における羽鳥下層式土器とそれに続く彦崎

22式も同様の土器で、両地域の土器が多少の地域差を含みながらも、ほぼ同様の変遷を遂げており、この点は円筒土器が齊一性を示しながら、分布圏内で地域差を有することと対比することもできよう。

中期前半の船元式は燃りの粗い縄文を特徴的に用いる土器で、器形や施文法から、鷹島式、船元Ⅰ～Ⅳ式に細分される。この段階に至ると近畿地方と瀬戸内地方の土器は型式名も同一となり、前期に引き続き広域土器圏を形成する。これも円筒土器文化に比肩しうる要素と言えよう。これは次の里木Ⅱ式でも同様であるが、その後は近畿地方では東日本の土器の影響を受けて北白川C式が成立するなど、地域差が顕在化していき、広域土器圏は一旦は解消の動きをみせていく。

そうした動きの中で注目されるのは、関東地方との関係である。前期後半の諸磯式では、北白川下層式系土器との関係が考えられてきた。安孫子昭二（多摩ニュータウン遺跡調査会1970）や谷口康浩（谷口康浩1980）は諸磯b式の浮線文の起源を北白川下層式に求める見解を示し、松田光太郎・羽島政彦（松田光太郎・羽島政彦1994）は、浮線文のない諸磯b式古段階に突帯文土器が伴出する事例から、隆線文様は北白川下層式でいち早く成立し、諸磯b式に影響を与えたとする。横浜市北川貝塚（横浜市教育委員会・横浜市ふるさと歴史財団2007）からは下半部が北白川下層式系の特徴を示す器形に諸磯b式の文様を施す土器が出土しており、両者の交流関係を知ることができる。また、横浜市折本貝塚（横浜市教育委員会・横浜市ふるさと歴史財団2007）では北白川下層Ⅱ式そのものとみられる土器が採集されている。一方で、諸磯式土器には円筒土器の影響を見出すことは難しい。この点は西日本の土器と円筒土器との違い、即ち円筒土器の独自性の強さをあらためて示すものである。

また、北白川下層式は、遠く大木式の分布圏である福島県郡山市田向A遺跡から北白川下層式Ⅱc式が出土している（山本友紀2014）。横浜市都筑区桜並遺跡（横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会1995）と同石原遺跡（横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会1995）では、前期末の大歳山式の完形品に復元できる土器が出土している（図5-127）。桜並遺跡の土器は胎土や焼成が在地の土器にやや似るが、石原遺跡出土土器は西日本の土器そのものとみてよく、搬入品であろう。石原遺跡からは大木式系土器も出土しており、各地域の交流がうかがわれる。神奈川県平塚市原口遺跡（かながわ考古学財団2002）では、破片ではあるが大歳山式と中期初頭の鷹島式が多数出土している。大歳山式は東京都八丈島の倉輪遺跡（八丈町倉輪遺跡調査編1987）でも出土が報告されており、比較的活発な交流の様子がうかがえる。こうした状況にも、円筒土器文化とは差異を見出すことができよう。ただし、この前期末から中期初頭という時期は、先に記した秋田県内などで五領ヶ台式土器をはじめとした関東系の土器が出土する時期があるという指摘と、同時期のことであることは注意される。



図5-127 横浜市桜並遺跡出土大歳山式土器
公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 提供

土器から知られる交流は、こうした搬入・搬出関係だけではない。諸磯式土器には、口縁部が内側に屈曲し、口縁部直下に小孔を連続して開ける有段内屈縁孔浅鉢という独特の土器があり、そのなかで、木の葉文浅鉢形土器は祭祀に関わる器種と理解されている(小杉康2003)。西日本の前期後半には、こうした土器が一定量みられる。北白川下層式土器に伴って諸磯b式土器の有段内屈縁孔浅鉢を模したものが出土し、特に北白川下層式土器の分布圏の東端にあたる東海地方西部では、磨消縄文を伴う木葉文を描いた浅鉢形土器など、諸磯式土器を模倣製作したものが型式内の一器種として定着している。単なる土器の行き来だけではなく、社会そのものに関わる交流も認められよう。

このように、円筒下層式土器の展開した前期後半、およびそれに続く中期初頭には、関東地方西部の様相を介してみると、西日本と円筒土器文化圏での差が浮かび上がってくるのである。

また、既に指摘されていることではあるが、円筒土器は大量に製作され、その結果、遺跡から出土する土器は質、量ともに膨大なものとなる。それに対し西日本では土器の出土量は圧倒的に少なく、完形品に復せる資料は僅少である。皮肉なことに、先に挙げた横浜市桜波遺跡や石原遺跡から出土した大蔵山式土器は、関東地方で出土した土器によって、当該型式の文様構成の全体が知られる例を加えたものである。西日本の土器自体は、特に前期において、器壁は薄手で内面を丁寧に磨き、焼成も良好な精製品というべき土器が大多数である。こうした土器に対する感覚の差ともいうべきものも認められ、興味深い。

その後、中期の後葉になると、円筒土器文化圏と西日本の両地域ともに、他地域の土器の影響を受けて、土器が変化していく。円筒土器文化圏では大木式の影響を受けて複林式、最花式が成立し、独特な土器型式は終焉を迎えていく。西日本では、東海地方の土器の影響を受けて北白川C式が成立し、中期中葉までの船元・里木式系土器とは様相が一変する。それまでの深鉢一器種のみによる単純な組成から、多彩な器種をもつ深鉢と、浅鉢や鉢をも保有する組成へと変化する。その頃瀬戸内地方では、里木式Ⅱの伝統を残す里木Ⅲ式が一時展開するが、やがて北白川C式に類似する土器が分布するようになる。こうした土器を基盤として後期初頭に中津式を成立させ、それが逆に東日本に波及して、関東地方の称名寺式の成立にかかわっていくとみられる。また、中期後葉から後期にかけては遺跡数も増加していき(図5-128)、高揚期を迎えていくのである。しかし、円筒土器文化圏ではそうした状況にはなく、後期には大規模な遺跡は少なく、遺跡数も減少する。中期後葉から後期のこうした土器型式の変化が象徴する現象が、両地域に展開した縄文文化の本質的な差異を表している、とみても誤りではあるまい。

2 集落

西日本の前・中期の集落の例は多くはなく、円筒土器文化の集落と直接比較するのは困難を伴うかもしれない。円筒土器文化の集落については、これまで様々な角度から論じられてきたので評述はしないが、長さが30mを超えるような大型竪穴建物を有し、竪穴建物や土坑、墓、捨て場、あるいは掘立柱建物などが列状に並ぶことが特徴である。居住域と墓域は、はっきりと分かれる。三内丸山遺跡のような大規模な拠点集落が多数存在することも特徴的である。遺跡数は、青森市内を例にとると、前期から中期にかけて減少し、いくつかの地域に集約される傾向が指摘されている(国立歴史民俗博物館2001)。

円筒土器文化はその後、中期後半には大木式の影響を受けて変質し、集落の列状配置が崩れてくる。気候が冷涼化に向かう中で、円筒土器文化の独自性を失っていくとともに、集落の規模も縮小していき、分散化の傾向を示していくのである。それを受けるように、後期に入ると、円筒土器文化圏にはほぼ重なる地域で環状列石が展開する。環状列石は一つの集落だけで作り上げていったものではなく、いくつかの集落が共同して作ったものと考えられている。地域共同体の再編が進んでいく中で、環状列石はその結合を深めていく場を提供していたのであろう。環状列石からは土偶や様々な土製品など、祭祀に関連する遺物が多く出土することもそのことを裏付けている。そこには、円筒土器文化の最後の姿をみることもできよう。

西日本では、前期中頃に遺跡数が増加する現象がみられる(図5-128)。その後、中期に入ると遺跡数は一旦減少に転じるが、中期後葉、北白川C式期になると再び増加していき、これは「分村化」による現象であるという見解がある(泉拓良1985)。集落構造は不明な点が多いが、明確な規格は認められず、建物数が少ないこともあって、環状構造をとることもない。こうした東西日本の集落の展開の差の原因として、地形の違いに求める見解がある(勅使河原彰2013)。東日本には台地が発達し、集落を作るのに好適な広い平坦地と、豊富な湧水に恵まれているのに対し、西日本はそうした状況にない、という。もちろん、そうしたことだけでなく、植生などの要因の違いも含めて、総合的なことに起因することは言うまでもない。

西日本の集落は、北白川C式が成立する中期後半に東日本から様々な影響が及び、大きな画期を迎える。住居の形状は隅丸方形に変化し、それまでの地床炉に加えて石組炉が出現する。鳥取県智頭町智頭枕田遺跡は中国山地の山間部にある遺跡で、2003年に町立保健・医療・福祉総合センターの建設に伴って調査したところ、縄文時代早期、中期末から後期初頭、および晩期の3時期にわたる大規模な遺跡であることが判明した(智頭町教育委員会2006)。中期末から後期初頭の時期では竪穴建物を12棟検出し、そのうちわけは中期末の北白川C式並行期が3棟、後期初頭の中津式期が8棟、後期前葉の緑帯土器期が1棟で、主体は中津式期である。他には掘立柱建物、貯蔵穴、土坑、配石遺構もあり、集落構造が具体的にわかる。特に掘立柱建物は近年の縄文集落では基本的な構成要素であることが明らかとなっており、それが西日本でも、集落の構成要素として竪穴建物とともに確認できたことは重要である。

検出した竪穴建物は、ほとんどが隅丸方形で石囲炉をもつタイプ(図5-129)で、この時期の例としては、中国地方では初めての検出である。こうした住居形態は、中期末には近畿地方までしか波及しないと従来まで考えられていたが、この地まで及んでいたことが明らかとなった。これは、智頭町

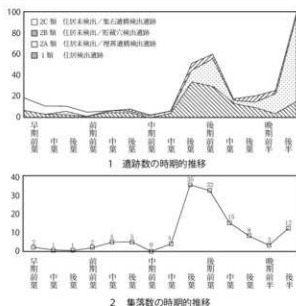


図5-128 近畿地方の遺跡数の推移

(瀬口真二2009)より転載



図 5-129 智頭枕田遺跡の竪穴建物

智頭町教育委員会 提供

は関西方面から鳥取に向かう特急列車が經由する智頭急行が通ることが示すように、陰陽連絡経路の要衝であることも関係するのであろう。西日本の多くの地域が東日本の要素を受け入れていたことを示唆するもので、その点では円筒土器文化の変質と似た状況とも考えられ、興味深い。しかし、本項「1 土器と土器圏」で前述したように、後期になると両地域は全く別の歩みをたどる。

西日本では、後期になると中期後葉に発生した社会の変化が新たな展開を示していく。和歌山県かつらぎ町中飯降遺跡では、後期初頭から前葉の大型竪穴建物を4棟検出した(和歌山県文化財センター2012)。これらは通常の住居ではなく、複数の集落の共同施設と考えられており(大野薫編2011)、共同体が結合を強めていった様子がうかがえる。以後、近畿地方の後・晩期には明確な居住域を伴わない形で貯蔵穴群や大規模な墓域を形成する例が増加していき、これは社会組織の変化を示すものであるという指摘もある(岡田憲一2005)。中期末には円筒土器文化と西日本ともに、他地域の要素を受け入れることにより社会に変化が生じるが、後期には西日本はむしろ独自性を強め、遺跡数も増加していく方向となり、円筒土器文化とは、また別な展開を示すのである。

3 生業

縄文時代は基本的に狩猟採集を生業としているが、一部では農耕に類する活動も行っていた。三内丸山遺跡では北の谷や第6鉄塔地区、南盛土、南の谷の各所で花粉分析を行っており、その結果、興味深い成果が得られていることは周知のとおりである。北の谷のP1を例にとると、前期中頃に遺跡の形成が始まる前にはクリ花粉は1～5%と低率であるが、ムラ出現後に急増して38～94%と高率に出

現する。すなわち、遺跡形成以前にはクリの木が散在する程度だったが、三内丸山人の定住の開始に伴いクリが分布を拡大し、クリ純林が形成されたことがうかがわれる。一方、周辺で主要な森林構成要素と推定される風媒種のブナとコナラ亜属花粉の出現率は、遺跡形成以前に81%から13%へと急減し、遺跡形成以後には約2~10%と低率であることや、花粉流入量が遺跡形成前後の比較ではクリ属が40倍に増加し、コナラ亜属は1/7、ブナは1/8に減少している(吉川昌伸ほか2006)ことから、ほとんどがクリ林であったことが知られる。

南盛土の分析では、中期前半の盛土層(層厚約2m)の7層準から樹木花粉が2~46粒出現し、盛土層でブナが1粒出現した他はすべてクリ属であり、南盛土付近の台地にはクリのみが分布していた可能性が推定されている。

南の谷での分析では、後・晩期には1~6%までクリ属花粉は急減するが、ブナやコナラ亜属の増加は14~25%程度と顕著ではなく、これら以外にトチノキ属(約20~55%)とハンノキ属(約13~39%)が増加して高率ないし比較的高率に出現している。こうした変化は、P7から20mの範囲ではクリ林が消滅し、約20~200mの範囲にはクリが分布していたと推定される。

こうした現象は決して自然界の中で生じたものではなく、縄文人が作り上げたものである。筆者もかつて遺跡から出土するクリ果実の大きさからクリの農耕を想定したこと(玉田芳英1990)があったが、三内丸山遺跡での花粉分析の成果等から、当時の人々は既にクリの農耕を行っていたことは、今日ではすでに広く受け入れられている。その他、三内丸山遺跡ではヒョウタン、ゴボウ、マメ類、アカザ、イヌビエ、アワなどの栽培植物の種子が出土している。また、5万点ほどの土器を対象として土器匠痕の分析を行った小畑弘己らは、ヒエ属種子(イヌビエ)やアズキ型種子(アズキ・ヤブツルアズキ)やササ属種子を検出した(小畑弘己・真造彩2014)。これらは、食料として利用可能な植物であり、補助的な食料としていたとも考えられる。

西日本においても、各地での花粉分析や出土種実の分析から、ある程度クリの農耕が行われていたことは確かであるが、円筒土器文化圏のように大規模なものではなかった。照葉樹林帯が広がる西日本では、ドングリ類の利用が盛んであったが、その中で、トチノキの利用に関して興味深い事例が明らかとなっている。中期前葉の滋賀県大津市粟津湖底遺跡第3貝塚からは、セタジミの貝層と堅果類の果皮層が互層になって堆積していた(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会編1997)。この中にはトチノキの果皮が混じっており、割いて破砕されていることから、トチノキ果実を食料として利用していたものと考えられる。トチノキはアク抜きが難しく、単なる水さらしだけではなくアルカリで中和させる必要があることから、それまでは中期後半以降にまず東日本で利用が始まると考えられていた。粟津湖底遺跡での具体的なアク抜き等の手法は不明であり、その後は西日本での頻度の増加もみられないが、食料利用の例として、今後の研究の進展が期待される。

一方、三内丸山遺跡では、前期末葉から利用されていたと考えられており(第4章第2節第5項)、第6鉄塔地区、西盛土、南盛土、近野地区南側からトチノキが出土している(藤原有希2017)。これらの多くは果皮を除いた種皮片で、食料としていたと考えられる。南盛土の分析では、盛土の形成が始まる中期前葉から既に出土がみられることが指摘されており(吉川純子2010)、粟津湖底遺跡第3貝塚と近い時期に、円筒土器文化圏と西日本でトチノキの利用が同様にみられることは興味深い。

こうした堅果類を貯える貯蔵穴については、円筒土器文化圏ではフラスコ状で大型のものが多く、

台地上に設けている。一方、西日本ではフラスコ状のものはみられず、設置場所も川岸などの低湿地である。こうした差は当然、内部に貯蔵していたものの差を示すのであろう。

最後に、生業に関わるその他の食用植物として、穀物類についてみてみたい。円筒土器文化圏においては、函館市ハマナス野遺跡（前期後半）や同市白尻B遺跡（中期）でヒエ属の種子を検出し、青森県六ヶ所村富ノ沢遺跡（中期末）の竪穴建物床面からは約2,000粒の炭化したヒエ属穎果が出土した。こうした事例や植物学的分析から、ヒエの栽培の可能性が考えられている（吉崎昌一1995）。西日本では、前期の岡山市彦崎貝塚（高橋護ほか2005）でイネ、コムギ、シコクビエ、キビ、モロコシ、ヒエなどの多種類にわたるプラント・オパールを検出している。

イネについては、水田稲作農耕が始まったことが遺構から確実に確認できるのは、縄文時代晩期末である。一方、それ以前のイネの例としては、青森県八戸市風張遺跡（後期末～晩期初頭）で竪穴建物床面からイネ胚乳が6粒出土している。西日本では、先に記した岡山市彦崎貝塚や同市朝裏鼻貝塚（前期前半）からイネのプラント・オパールの出土が報告されており、岡山県の遺跡で出土した中期中頃や後期後半の土器の胎土中からも、イネのプラント・オパールを検出したという。しかし、彦崎貝塚で実施した別の分析では、それらの種子は全く確認できなかった（松谷暁子2006）。この様に、プラント・オパールの事例はまだ評価が定まったものではないが、稲作農耕の存在の可能性とともに、多様な雑穀類の利用を考えさせるものではある。

もちろん、ヒエやイネの農耕があったとしても主たる生業手段ではなく、雑穀としての一部の利用にとどまるものだろう。落葉広葉樹林が広がる円筒土器文化圏に比べ、森林の生産力がより低い西日本では、様々な植物を利用していく形態があったことを想像させる。周辺環境の高い生産力と、縄文人の積極的な活動が円筒土器文化の隆盛を支えたことが、西日本と比較したことにより、あらためて感じることができる。

引用・参考文献

- 青森県史編さん考古部会 2002 『青森県史 別編 三内丸山遺跡』
- 泉拓良 1985 『縄文集落の地域的特質－近畿地方の事例研究－』『講座考古地理学4』
- 大野薫編 2011 『西日本の縄文集落と地域社会』『季刊考古学114』 雄山閣
- 岡田憲一 2005 「大規模葬祭空間の形成－近畿地方における縄文時代後晩期集落のあり方－」『関西縄文時代における石器・集落の諸様相』関西縄文論集2 六一書房
- 小畑弘己・真造彰 2014 「三内丸山遺跡北盛土出土土器の圧痕調査の成果とその意義」『特別史跡三内丸山遺跡年報－17－』
- かながわ考古学財団 2002 『原口遺跡Ⅲ』
- 北の縄文研究会編 2012 『北の縄文「円筒土器文化の世界」：三内丸山遺跡からの視点』
- 国立歴史民俗博物館 2001 『縄文文化の扉を開く－三内丸山遺跡から縄文列島へ－』
- 小杉康 2003 『縄文のマツリと暮らし』
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会編 1997 『栗津湖底遺跡第3貝塚』
- 瀬川真二 2009 「資源利用から見た縄文集落と地域社会－試論：関西地方の集落は、なぜ少数・小規模だったのか？－」『関西地方の縄文時代の集落と地域社会』第10回記念研究会発表要旨集・資料集、関西縄文文化研究会
- 高橋護ほか 2005 「岡山県瀬崎町彦崎貝塚の発掘調査」『考古学ジャーナル527』ニューサイエンス社
- 谷口康浩 1980 「第3節 縄文時代前期後半の土器」『藤の台遺跡Ⅲ』藤の台遺跡調査団
- 玉田芳美 1990 「縄文時代に農耕はあったか」『争点日本の歴史1』新人物往来社

- 多摩ニュータウン遺跡調査会 1970 「No.175遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査概報』
- 智頭町教育委員会 2006 『智頭杖田遺跡1』
- 勅使河原彰 2013 「縄文文化の高揚（前・中期）」『講座日本の考古学3 縄文時代上』
- 能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 『石川県能登町 真脇遺跡』
- 八丈町倉輪遺跡調査団編 1987 「東京都八丈町倉輪遺跡」東京都八丈町教育委員会
- 藤原有希 2017 「第2節第5項 種実」『三内丸山遺跡44 総括報告書第1分冊』
- 松田光太郎・羽鳥政彦 1994 「縄文時代前期後半諸磯b～c式（第Ⅲ群土器）の考察」『愛宕山遺跡・初室古墳・愛宕遺跡・日向遺跡』群馬県勢多郡富士見村教育委員会
- 松谷晩子 2006 「附章7 彦崎貝塚から出土した植物遺残の識別について」『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書』岡山市教育委員会
- 山本友紀 2014 「福島県文化財センター白河館収蔵の北白川下層Ⅱc式土器の紹介」『福島県文化財センター白河館研究紀要2013』
- 横浜市教育委員会・横浜市ふるさと歴史財団 2007 『北川貝塚』
- 横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会 1995 『板並遺跡』
- 吉川純子 2010 「三内丸山遺跡第31・32次調査の環状配石墓より出土した炭化種実」『三内丸山遺跡36』
- 吉川昌伸ほか 2006 「三内丸山遺跡の植生史と人の生業」『植生史研究特別第2号』日本植生史研究会
- 吉崎昌一 1995 「日本における栽培植物の出現」『季刊考古学50』 雄山閣
- 和歌山県文化財センター 2012 「中飯降遺跡・西飯降II遺跡・加陀寺前経塚・大谷遺跡・重行遺跡：一般国道24号京奈和自動車道(紀北東道路)改築事業に伴う第2次～第7次発掘調査報告書』